

第6章 園における障害のある幼児などの支援の 実際(実践事例)

第1章から第3章では、園において、障害のある幼児などを受け入れるに当たっての基本的な考え方や配慮について述べました。第4章では、障害種別に基本的な理解や日々の保育における障害のある幼児などの困難さに応じた支援について述べました。第5章では、障害のある幼児などの指導や支援を行うための体制整備について述べました。第1章から第5章までで共通して述べているのは、障害があるからできない、この障害種にはこの支援といったように決め付けたりせずに、目の前の障害のある幼児などを肯定的に受け止め、その子のよさや好きなことを生かしながら、その子の困難さに応じた支援を行うことの重要性です。そして、障害の有無にかかわらず、幼児同士が育ち合える関係づくりや、障害のある幼児などの保護者の気持ちに寄り添った支援の大切さです。さらには、こういった取組を支える先生の姿勢や体制整備などの必要性です。

園における活動では、これらは切り離して考えることはできません。第6章では、第1章から第5章までで述べた考え方を踏まえて、各園が実践を進めるための手掛かりとなるように、いくつかの具体的な事例を紹介していきます。

そもそも、先生は、保育を進める上では、一人一人の幼児をよく見て、その幼児にとって発達に必要な体験が得られるように指導を考えます。そのとき、どのような指導をすればよいか、幼児の姿から自分の指導を振り返り、日々、幼児理解に努めながら「次はこうしてみよう」と指導の改善につなげています。障害のある幼児などについてもこのことは同じです。先生は、障害のある幼児などの存在の有無にかかわらず、どの幼児も楽しく充実した園生活を送ることができるように、一人一人に応じた指導を考える必要があります。

しかし、実際には、障害のある幼児などを受け入れる場合、障害のある幼児などに目が向けられ、その幼児を特別な存在として捉えたり、障害の診断がなくとも、「気になる」幼児がいると、その幼児との関わりにおいて「困ること」が出てきたりします。どのように対応したらよいのか、具体的な支援の方法や方向性が見出せないままに、その日その日の支援に留まってしまうこともあるかもしれません。また、「気に

なる」ことは、先生がどのような視点で当該幼児を捉えているかによって異なるため、同じ幼児を見ている先生によって「気になる」と感じる点が異なる場合もあります。このようなズレは、当該幼児が見せる特定の面だけを捉えているために生じている可能性があります。当該幼児の実態を捉え、当該幼児のよさや抱える困難さを捉えるためには、先生同士が話し合い、今必要な支援だけではなく、長期的な視点をもって計画的に支援を考えていくことが大切です。そのためには、障害の基本的な理解と当該幼児の背景を理解しながら、担任が一人で抱え込まず、園全体の協力体制の下、園として組織的に取り組むことが重要です。

障害のある幼児などの指導は一樣ではありません。当該幼児の実態、保護者の気持ちや家庭の状況、園の体制や関係機関との連携状況などに応じた支援を考える必要があります。本章で取り上げる事例は、あくまでも一つの実践事例であることを考慮して各園の実情に即して活用してください。

事例1 日々の先生同士の会話の中で障害のある幼児などが抱える困難さに気付く

園に入園後、何となく指示が伝わりにくい、周りの状況が分かっていないのではないかなど、気になることが増えてくる幼児がいます。しかし、先生によっては、そのような場面にさえ、気が付かないことも多くあります。様々な先生が関わることで、幼児一人一人の実態を把握し、障害のある幼児などの困難さに応じた必要な支援を行っていくことができます。日々の先生同士のコミュニケーションを気付きや早期支援につなげていくことが大切です。

【ポイント】

- 何気ないことを伝え合える先生間の関係性をつくりましょう。
- 日々の些細な出来事を記録しておきましょう。
- 気になる出来事を身近な先生に相談しましょう。
- 他の先生や園長などから様々な意見をもらい、園全体で関わることで、障害のある幼児などの困難さに応じた早期支援につなげましょう。
- 保護者の思いを受け止め、一緒に障害のある幼児などの姿を捉えましょう。

園内の他の先生と幼児の普段の姿を語り合うことは非常に重要です。普段の雑談の中で新たな発見があることもあります。自分の一方的な捉え方ではなく、他の先生のような意見を聞いてみることは、幼児の多角的・多面的な理解につながります。ここでは、そのことで、障害のある幼児などの抱える困難さに気付き、支援に関して検討を始めた事例を紹介します。

○おとなしくて手がかからない子だと捉えて一隣のクラスの先生との会話から—

A児は一人っ子で、両親に大切に育てられている様子。園に来ると、大好きな積み木を始める。積むことそのものを楽しんでいるようなこともあれば、何かを作っているようなこともあるが、黙々と一人で遊んでいることが多い。担任は手がかからないおとなしい子と捉えた。保育時間が長くなってきたある日、「お外に行くからトイレに行って、片付けをしてね」と担任がクラス全体に声掛けをし、多くの幼児が外に行く支度をしていた。Aちゃんにも「トイレに行ってね」と声を掛け、外に

出た。しばらくして室内を見に行くと、Aちゃんが泣いていた。見るとお漏らしを
してしまっていた。

別の日、砂場で遊んでいて、「そろそろお弁当の時間だよ」と保育室に入る準備を
したが、Aちゃんはいつまでも砂場で遊んでいる。「Aちゃん、お弁当だよ」と顔を
見て話すとなっこりして一緒に室内に入ってきた。

担任は、A児は、一つのことに没頭すると夢中になってしまうのだろうと捉えてい
ました。一人遊びを好み、おとなしくて手がかからない子だということを隣のクラス
のB先生に伝えました。B先生は、A児は没頭して遊ぶタイプの子なのだろうけれど、
お漏らしをするまで、周りの様子に気付かないことが気に掛かりました。B先生は、
A児は周りの様子に気がつきにくいとともに、自分から困ったことを伝えることも苦手
なのではないかと担任に伝えました。

○不安感が強い子だと捉えて—学年の先生との会話から—

保育室のテラスの部分に巧技台で一本橋など渡って歩けるコースを作った。多く
の幼児が繰り返し楽しんでいて、A児はいつもの積み木の場所で遊んでいる。担
任は室内では積み木、屋外では砂場の2か所でのみ遊んでいることに気付く。

担任は、大人に大切に育てられてきたから、初めての場所では不安感が強いのだろ
うと捉えていました。そのことを学年会の際に話題にすると、確かにA児はいつも決
まった場所で遊んでいることが多いということが話題になりました。初めての場所や
遊具に関わる時には、担任がそばにいて安心できるのではないかとということ
を担任に伝えました。

そこで、担任がA児の近くで遊び、一緒に手をつないで移動すると、少し安心した
のか、一本橋の近くで友達の様子をじっと見ていました。しばらく見ていると、手をつ
ないだまま、友達のまねをして渡ろうとしました。うまくいかず落ちてしまうと、
再び友達のしていることを見ていました。

不安な場合には手をつないでいると安心すること、初めてのことはじっと見ている
ことが多いことなど、新たなA児の理解につながりました。初めての遊具に関わる際
には、担任と一緒に友達の様子を見ていることで安心できるように担任がそばに
いることにしました。

○聞いてないことが多いと感じて—主任のアドバイスから—

また別の日、外に出るときに水筒を持ってくるようにクラス全体の幼児に伝えたが、A児は周りをきょろきょろ見ながらぼうっと立っていた。もう一度「水筒を持ってくるよ。」と実物を見せ指示をすると、はっと気付いて、水筒を持ってきた。

母の日の似顔絵をかくときにも、クレヨンを持ってくるように伝えたものの、A児は画用紙を見てにこにこしているだけ。個別に「クレヨンだよ」と実物を見せ、顔を見て伝えると、分かったようであった。

担任は全体の指示は聞き取りにくいのか、ぼうっとしていることが多く、一度きりの指示では伝わらないようなので、次回からは個別に声掛けをするようにしました。学年で話題にしていると、主任の先生に、一度で聞き取れないようだけれど、具体物を示すと理解できるようだ、個別でも具体物がないと理解できないときもあるのかどうか、確かめた方がよさそうだとおっしゃられたので、留意して関わるようにしました。

○どのように伝えると伝わるのか—主任の関わりから園長とも共有して—

次の日、主任はA児が積み木で遊んでいるところに行って後ろ側から「Aちゃん、何してるの?」と話し掛けてみたが、反応がない。右側から「Aちゃん」と言っても遊び続けている。左側から「Aちゃん」と言うとやっとな顔を上げる。正面からの「何を作っているの?」の問い掛けにはにこにこ応じているが、積み木を指差している。「おうちかな?」と言うと嬉しそうにうなずく。しばらくして、担任が「片付けだよ」と言う。Aちゃんは周りの友達が片付け始めた様子を見て、積み木を片付け始めた。

主任は、A児は聞こえに問題があるのではないかと捉えたので、背後から声を掛けてみたのでした。左側からこちらの言っていることが伝わるようでしたので、主任は右側の聞こえが悪いのではないかと考えました。また、先生が話していることへの理解はしており、質問の答えに対する反応はあるため、家庭では気付きにくいのではないかと思いました。そのことを園長と担任に伝えました。園でA児が言葉を発する機会があまりないため、一対一での関わりがどの程度できるか確認することや家庭ではどのような様子なのか、保護者の話も聞いてみることにしました。

○保護者から幼児の家庭での様子を聞いて—保護者との情報の共有—

家庭では何でものんびりな性格だと捉えているようだ。発語も遅めだったようで、ゆっくり話してあげると理解できるので、家庭内で困ることはないようだ。園での出来事を伝えたところ、家庭でも遠くからの呼び掛けには気付かないことがあるということが話題になった。

園でA児が積み木や砂場など好きな遊びにじっくり取り組み楽しんでいる様子を伝えるとともに、全体的な指示があるときには個別に分かるように具体的な指示をしていること、初めての遊具や場所の移動の際には、担任が手をつないでいれば安心できることなどを伝え、園でも更に丁寧に関わり、集団の生活の中でどのような困難さがあるかを引き続き観察し、保護者と共有することにしました。

保護者は家庭でももう少し様子を見て、病院を受診してみることも考えたいということになりました。

事例から読み取れること

○何気ないことを伝え合える先生間の関係性をつくっておくことが大切です。

自分にとっては気になる出来事ではなくても、他の誰かに話すことでその重要性に気付くこともあります。特に、他の幼児との関わりで迷惑をかけないようなおとなしい子と捉えてしまい、本人の困難さに気付きにくいことは数多くあります。園全体で一人一人の幼児の理解を深めていくことは、障害のある幼児などの抱える困難さへの早期の気づきや支援につながります。

○些細な出来事を記録しておくことが大切です。

日々の幼児の遊びや生活の様子を記録しておくようにしましょう。その日の特定の活動だけでは気にならない幼児の様子も、数日間の記録を通して分かることもあります。また、先生同士で話し合う際の根拠ともなります。

他の先生から気になる視点に関する助言をもらった場合には、その視点から障害のある幼児などの遊びや生活の様子を記録するだけでなく、当該幼児の思いを推測したり、先生の関わりやそれに対する当該幼児の反応も記録したりするようにしましょう。障害のある幼児などの抱える困難さや支援について考えるヒントとなります。

○気になる出来事を身近な先生に相談しましょう。

ちょっと気になる出来事があったときには、園内の身近な先生に相談しましょう。自分にとっては初めてのことで同じような経験をしたことがある先生もいます。様々な意見を聞くことで多様な見方や解釈ができるようになります。障害のある幼児などとの関わり方の新たな視点が見つかることも多いでしょう。

○他の先生や園長などから様々な意見をもらい、園全体で関わることで、障害のある幼児などの困難さに応じた早期支援につながります。

園全体で一人一人の幼児の理解に努めていくことが重要です。担任が問題意識をもっていない際にも、経験豊富な主任等が関わることで、障害のある幼児などがどのようなことに困難さを抱えているのか、どのような支援を必要としているのか、実態把握に必要な情報を整理することができます。障害への気づきや必要な支援、保護者との共通理解につなげていくことができるのです。

○保護者の思いを受け止め、一緒に障害のある幼児などの姿を捉えていきましょう。

家庭での一対一での生活と園のような集団生活の場での生活とでは障害のある幼児などの実態は変わってきます。保護者は、集団の中での当該幼児の様子等については理解しにくいかもしれません。その際には、園でどのような支援をしているか、どのように支援することで困難さを克服できているかなど具体的な場面を挙げて丁寧に伝えることが必要です。また、保護者の思いや日常している関わり方などをよく聞き、園でも取り入れていけそうなことなどを話し合い、当該幼児のためにできる支援を一緒に考えていくことも必要です。保護者との信頼関係を築き、一緒に当該幼児の特性の理解に努め、更に今後の支援の方向性を共に考えていくことにつなげていきましょう。

(第2章(3) 幼児の障害の状態等に応じた必要な支援のためのアセスメントの重要性 9頁参照、第3章2. 合理的配慮を含む必要な支援を考えるために必要なアセスメント 19頁参照、第3章3. 先生の基本的な姿勢 24頁参照)

事例2 日々の様子を共有していくことで障害のある幼児などの実態把握につなげていく

入園後、園生活の中でうまくいかない場面が多いことがあります。先生が困っているということは、障害のある幼児なども困っている可能性があることを踏まえ、園全体で当該幼児の特性、好きなことや得意なこと、苦手なことなど、当該幼児の実態を把握し、必要な支援につなげていくことが大切です。

【ポイント】

- 日々の出来事から行動の特性を把握していくことが大切です。
- その時々で考えられる支援を試していくことで実態把握を更に深めます。
- 実態把握で気付いた当該幼児の特性に応じた指導や対応の仕方を共有します。
- 実態把握の積み重ねで見えてきた好きなことや得意なことを中心に、他の幼児への理解を促す場面を見付けていきます。
- 家庭と情報共有し、入園前のこと、園外での様子を把握し、当該幼児の理解を深めます。

幼児の障害の有無にかかわらず、幼児理解を深めていくことは基本です。しかし、様々な幼児と関わる担任にとっては、困った場面ばかり目についてしまい、どうしたらよいか分からず、幼児の全体像は見えにくくなっていることがあります。日頃から先生同士のコミュニケーションをとり、相談しやすい雰囲気をつくっていくことも重要です。また、家庭での様子やこれまでの育ち、園以外の場での様子など、保護者からの情報も実態把握には必要となります。担任やその他の情報を基に、様々な角度から障害のある幼児などの実態を把握していくことが大切です。

ここでは、入園当初は、B児は、目が離せず、困った行動が多いと捉えていた担任が、様々な場面を通してB児を把握していくことで、担任のB児の捉え方が変化し、B児に変容が見られた事例を紹介します。

○入園当初…興味のままに行動する—補助の先生との毎日の振り返りから—

B児は、二人兄弟の一番上で、3歳で入園。入園前の情報はない。母親は育てにくさを感じているものの、どうしたらよいか分からず、B児に手を焼いている様

子。

B児は、初めての園にも物怖じせずに遊び出した。園庭の遊具が気に入った様子で、入園式後、母親と園庭の遊具でいつまでも遊んでいた。次の日、担任は保育室で遊べる環境を用意して園児を待っていた。B児に「おはよう」と声を掛けると、担任とは目を合わせず、昨日遊んでいた園庭の遊具のところに走って行ってしまった。B児のことを補助に入っている先生にお願いして、担任が他の園児の対応に追われ、呼びにいくことができずにいると、補助の先生と一緒におやつの時間に保育室に戻ってきた。手洗いやトイレは自分で済ませることができたようだ。帰りの支度をすると、外にすぐに出ようとするので、「先生と一緒にいこうね」と手をつなごうとすると、手を振り払われてしまった。「お母さんのところに連れて行ってあげるからね」と一緒に行くようにすると、何とか手をつないで一緒に歩いてくれた。アリを見つけると、「アリさん…」と動かなくなり、他の園児も同じようにアリに気をとられて進めなくなってしまった。

園児が帰った後、補助の先生と、B児について話をしました。補助の先生は、「このくらいの年齢の幼児は自分の興味のあることしか、目に入らないから仕方ないですね」と言っていました。養護教諭は、入園初日のB児が好きな遊具に走っていく様子を見て、あまりにも周りの状況が見えていないことが気になるようでした。自分の「興味のままに行動する、目についたもの（この日は遊具、アリなど）に反応するのはこのくらいの年齢の幼児の特徴ではあるものの、B児の行動に違和感を感じたようでした。そこで、まずは、B児の行動を規制するのではなく、次の日からは、必ず誰かがB児の行動を把握するようにしました。

○興味をめまぐるしく変わっていく—自分はどうしたいという思いの中で—
—学年主任と共有—

多くの園児が園に慣れ、それぞれのお気に入りの遊びができてきた。B児は、友達の楽しそうにしている雰囲気が分かり、遊んでいるところに行くが、友達の使っているものを取ってしまう。砂場で遊んでいると、X児が使っているスコップをB児は無理に取って使い始めてしまった。取られてしまったX児は、泣いて

訴えるが、B児は返さない。担任は「これは、Xちゃんが使っていたんだよ。こっちを使おうね」と同じ種類のスコップを渡すが、ゆずらない。仕方なく、X児に新しいスコップを使ってもらうことにした。B児と先生と一緒に砂の山を作っていたが、先生がちょっと目を離した隙に、砂場からいなくなってしまった。遠くから泣いている声が聞こえ、行ってみると、B児がブランコに乗ろうとしてY児を押しつけている。「だめだよ！ Bちゃん」とZ児が止めると、急に表情が変わってZ児に向かって砂を投げつけた。担任が「ブランコ乗りたかったの？ お友達のこと押しちゃったの？」と聞くと「押しでないよ、Bが乗るの！」と言ってブランコに乗り始めようとする。Y児とZ児には「ブランコにどうしても乗りたかったんだね。順番守れるように先生からお話しておくね」と言って別のブランコに乗るように促した。しばらくブランコに乗った後、「お友達、困っていたよね」とB児に伝えたが、何のことか分かっていない様子。

担任は、学年主任に相談してみました。主任からは、この年齢の幼児は友達の使っているものが目に入るとすぐに欲しくなってしまうから、クラスの人数に近い数だけ同じものを確保しておくこと、B児の分は別に準備しておくこととのアドバイスももらいました。また、目に入ってやりたいと思ったことは、自分で良いか悪いか考える前に、やってしまうようなところがあるので、トラブルを未然に防げるような配慮が必要、否定的な言葉に反応している姿から自分に自信がないのかもしれないので、家庭での様子について保護者と話をしてみた方がよいとも言われました。園では、B児が否定される場面を減らし、B児の思いを受け止めながら、B児と一緒に方法を考えていけるような支援も必要ではないかということになりました。

○支援について保護者と共に考えるー園外での様子を知るー

B児が他の幼児から意地悪な子という印象をもたれないようにと担任は配慮していたが、友達とのトラブルが絶えず、母親と話をする機会も増えてきた。母親との関係性ができ、母親が入園前や家庭での様子を少しずつ話してくれるようになってきた。入園前は親子教室に通っていたとのことだが、そこで自分勝手に行動してしまうことが目立ち、恥ずかしかったこと、小さいころからスーパーに買い物に行

くと必ず迷子になっていたこと、家では言うことを聞かないので厳しく叱ってしまうことが多いことなどを話してくれた。

担任は、保護者の大変さを受け止めながら聞くようにしました。また、園では、目につく遊具に反応してしまうことが多いけれど、友達とトラブルになる前に同じものを必ず準備しておくことや、否定的な言葉に過剰に反応してしまい、衝動的な行動が出てしまうことがあるので、一度話を聞いたり、時間や場所を変えて気持ちを切り替えられるようにしたりしていることを伝えました。担任は、今後は、B児の得意なことを見付けて自信をもてるような指導をしていくことにしました。

○今後の指導の方向性を考えるースクールカウンセラーに相談するー

これまでの園での様子から、B児は、興味や関心の移り変わりが大きく、衝動性があると捉え、B児の困難さに応じた配慮についてスクールカウンセラーに相談することにした。スクールカウンセラーに、B児の普段の園での様子を見てもらった。その日は、幼児皆で保育室や園庭で大きな画用紙にローラーで絵の具を塗る遊びを楽しんでいた。B児もローラーが楽しくなっているところなど塗ることを楽しんでた。すると、自分が絵の具だらけになることが楽しくなり、次には全ての水道を全開に回して、水を思い切り出すことが楽しくなってきたようだ。さらに、自分が足洗い場に寝そべって水しぶきを浴びることが楽しくなったようだ。

気持ちを発散させるような遊びや水に関する遊びには特に興奮し、積極的に遊びましたが、エスカレートしすぎてしまい、担任は対応が間に合わないことがしばしばありました。保育参観後のスクールカウンセラーとの協議において、多動の傾向や衝動性が強い傾向が見られるので、生活の中でB児がしてもよいことが分かりやすい環境のつくり方を工夫することが大切であること、B児の困難さや支援の手立てを園全体で共有することになりました。また、園での支援などについて、保護者の気持ちにも配慮しながら、共有することになりました。

○B児の得意なことを見つけてー他の友達との関係性を考えるー

運動会の練習のとき、B児は自分の出番を待てず、自分のやりたい遊びを続け

ていることが多く、担任は困っていた。玉入れが始まると、楽しそうな様子にB児も交じってきた。玉を思いっきり投げるのが楽しくて何度も楽しんでいる。最初は他の幼児が玉入れを終えてもB児は投げ続けていたが、何度も繰り返すうちに笛の合図で終わりということが分かり、友達と一緒にルールを守って遊ぶことができるようになった。B児は、体の動きが活発で投げることも得意だったので、担任が「Bちゃんのチームは玉入れ強いね」と他の幼児にも聞こえるように褒めると、「ほんとだね」、「Bちゃん、投げるの上手だからね」、「Bちゃん、次も頑張ろうね」と友達から声を掛けられ、B児も嬉しそう。玉入れの練習には毎日張り切って参加し、運動会が終わった後もクラスで玉入れ遊びを楽しんだ。

運動会の練習は苦手だったのですが、玉入れのルールが分かりやすいことでB児が張り切って参加できました。そのことを担任がすぐに気付き、B児の自信につながる言葉掛けをしました。他の幼児にも聞こえるようにしたことで、他の幼児がB児のよさに気付くきっかけになりました。

事例から読み取れること

○日々の出来事から行動の特性を把握していくことが大切です。

担任のちょっと気になる、幼児の行動に対して違和感があるという場面があったときには、毎日のちょっと気になる場面、行動、出来事などを記録しておき、振り返ったときに、どのような場面で苦手なことがあるのかなど、一緒に関わっている先生と情報共有し、行動の特性を把握していくことが大切です。どのようなときにどのような行動をするのかということのを少しでも客観的に捉えていくことを積み重ねていくことが大切です。ここでは、まずは、B児の様子を把握できるように補助の先生が傍について注視することから始めています。

○その時々で考えられる支援を試していくことで実態把握を更に深めます。

障害の有無がはっきりしていない場合には、特に日常の遊びの状況から対応を判断する必要があります。担任や副担任だけではどのように対応したらよいか判断が難しい場合や、他の幼児との関わりの中で危険なことが伴うときには、学年主任等を中心に園全体として相談することが大切です。他の幼児とのいざこざにならないように、人数分に近い数の遊具を出しておくことや、いざこざの際には当該幼児の思いを周り

の幼児に代弁するなど、特別な支援ではなくても有効な支援はないかを探っていきます。そうすることで、遊具へのこだわりや当該幼児なりの出来事の捉え方などにより詳細に気付いていくことにつながります。初めは、その場その場での対応しかできないかもしれませんが、同じような場面が多く見られたり、最初の支援の方法ではうまくいかないことが見えてきたりします。当該幼児が落ち着いて行動できた支援や、そうではなかった支援を整理し、当該幼児の支援について園全体で検討するようにします。その際には、できるだけ具体的な場面を挙げて、多くの先生で意見を出し合うことも重要です。

○実態把握で気付いた当該幼児の特性に応じた指導や対応の仕方を共有します。

実態把握の中で、B児は特に否定的な言葉を掛けられたことに反応するのではないかとの見方が出てきました。他の幼児に対しての危険な行動などは制止しなければならないこともありますが、「だめ」、「やりません」など否定的な言葉を掛けるのではなく、「どうしたかったのかな？」など本人の思いを聞きながら、気持ちが落ち着くようにするための方法を見付けることが有効なようでした。保護者から話を聞く中で、家庭での関わり方なども知ることができます。ここでは、家庭では言うことを聞かないことが多く、その度に厳しく叱っているとのことでした。大人から行動を強く規制されたり、叱責されたりしてそのことに対して反発することが増えたり、自己肯定感が低くならないような関わりを園の中では心掛けることを共有するようにしました。保護者の気持ちに配慮しながら、実態把握の中で気付いた当該幼児の特性に応じた対応の仕方について考えていくことが必要です。

○実態把握の積み重ねで見えてきた好きなことや得意なことを中心に、他の幼児への理解を促す場面を見つけていきます。

実態把握を重ねていくと、行動の特性や、出来事理解の仕方など、その子なりの特性が分かってきます。得意なこと、苦手なことなども分かってくるでしょう。皆と一緒に活動が苦手な幼児も、分かりやすいルールがあることで、遊び方が理解しやすい場合もあります。さらに、当該幼児の好きなことや得意なことを先生が理解し、そのことを中心に他の幼児との関わりをつくり、他の幼児に分かるように褒め、よさを認め合える関係性を築けるようにしていくことを忘れないようにしたいものです。

○家庭と情報共有し、入園前のこと、園外での様子を把握し、障害のある幼児などの理解を深めます。

園での場面だけでなく、家庭での様子やこれまでの子育ての困難さなどを共有し、対応の仕方を一緒に考えていくことは、どの幼児にとっても必要なことです。特に、障害のある幼児などをもつ保護者に対しては、困難さを受け止め、家庭での様子を聞くことで、園での対応を丁寧に考えていくことができます。保護者が、当該幼児の特性の理解が不十分なときには、日々の当該幼児の実態把握を丁寧に積み重ねていくことが重要です。また、保護者から入園前の様子や、園以外の場での様子や困難さなどの情報が得られると、総合的に当該幼児のことが捉えられるようになります。保護者との十分な信頼関係を築いた上で専門機関等への相談なども話題にしていくとよいでしょう。

(第3章2. 合理的配慮を含む必要な支援を考えるために必要なアセスメント 19
頁参照、第4章1. 障害のある幼児などの困難さに応じつつ全体的な発達を促す支援
の在り方 35頁参照)

事例3 障害のある幼児などの困難さから支援を考えるために園内委員会を活用する

障害のある幼児などの困っている姿に出会うと、担任も戸惑い悩みます。その悩みを一人で抱え込むのではなく、先生全員で思いを共有し知恵を出し合い、当該幼児の健やかな成長につなげていくことが大切です。当該幼児の困難さについて先生間で共通理解を深め、当該幼児の実態に応じた支援を考えるためには、園内委員会をどのように活用したらよいでしょうか。

【ポイント】

- 園内委員会は当該幼児や先生からのSOSに応じ、適時、開催しましょう。
- 次の視点を大切にして、先生間の協議を行きましょう。
 - ・ケース検討は具体的な記録に基づくこと
 - ・当該幼児の困難さのみへの注目は避け、よさも含めて総合的に捉えること
 - ・障害特定ではなく、客観性をもって当該幼児の実態を捉えること
 - ・当該幼児の実態を捉える視点は具体的であること
 - ・どのような支援（先生の関わりや環境の工夫等）があれば、当該幼児は安心して遊びに没頭できるのか、他の幼児との関わりが広がるのか、場面を想定して具体的にアイデアを出すこと
 - ・当該幼児のよさや困難さに関して、保護者との共有に向け、今の保護者の気持ちに寄り添った段階的な情報共有について話し合うこと
- 必要に応じて、関係機関と連携しましょう。
- 終了時には、次回開催に向けて取り組むことを確認しましょう。

先生は、障害のある幼児などの園での遊びや生活の様子から、当該幼児の発達の遅れや偏りに気付くことがあります。このような気付きを大切にして、先生全員で当該幼児の困難さについて話し合うことから、必要な支援は始まります。このとき、障害の有無を判断することが目的ではなく、目の前の幼児の困難さを適切に捉え、困難さに応じた支援を検討することが大切です。園内委員会は、当該幼児を理解し、健やかな発達を促すために園全体で取り組むための組織であり、この組織を有効に活用することにより先生全員が共通理解を図り、組織的な支援をすることができます。

障害のある幼児などの困難さを捉えようと話し合いをしている二つの園内委員会の様子を紹介します。先生がそれぞれに意見を出し合い、当該幼児の困難さへの理解を深めるためには、どのようなことに留意すればよいのかについて考えていきましょう。

園内委員会① 「視線の合わない」C児への対応

2年保育 4歳

入園当初の5月の園内委員会では、視線を合わせない、他の幼児との関わりが少ない、場面の切り替えに遅れるといったC児の様子について話し合いました。しかし、当該幼児の困難さの要因が分からなかったため、どのような視点から更に当該幼児の姿を見ていけばよいのかについて共有しました。

先生全員で共有した視点に注意して当該幼児の姿を見た結果、視覚的な問題よりも興味や関心の偏りや経験不足による不安が強い傾向にあることが分かったので、保護者や関係機関と連携した支援について検討しました。

園内委員会の様子は次のとおりです。

5月の園内委員会

「遊びが広がらない、他の幼児との関わりが見られない」など、新入園児の気になる様子を共有することになりました。その中で、視線が合わず、遊びが広がらないC児について何に困っているのか、丁寧に姿を捉えることとなりました。最初に、担任から具体的なエピソードの報告がありました。以下は、報告のあったエピソードのうちの一つです。

【担任からのエピソード報告】

登園時、「おはよう」と声を掛けても、遠くを見て目を合わせようとしません。最初はお母さんの陰に隠れていたため恥ずかしいのかなと思ったのですが、一人で玄関に入ってきたときに声を掛けても反応がありません。近づいて「おはよう」と言うと、目を合わせずに単調な声で「おはよう」と返ってきます。室内遊びが多く、友達との関わりもあまり見られません。場面の切り替えに遅れて、部屋の隅で固まってしまうことがよくあります。

担任からC児の具体的なエピソードが語られると、他の先生からもC児の困難さに

関した意見がありました。しかし、一度の園内委員会ではC児の困難さの的確な把握や困難さに応じた支援策の決定は難しく、次回開催までに各先生が何に取り組むのかについて話し合い、次のとおりまとめました。

【C児の困っている姿について丁寧に観察】

○ 「視線が合わない」という状態は、物が見えにくい、人と関わるのが苦手等、様々な要因が考えられます。C児の困難さを適切に捉えるため、具体的な観察場面について共有しました。

・物が見えにくいという視点から

C児は周りをどのように見ているのか、見えているのかについて、日常生活での視線の向け方に注意します。例えば、物を注視することはできるか、前に立つ先生に注目することはできるか、絵本や紙芝居の読み聞かせのときの視線はどうかなどについて、気を付けて見るようにします。

・人と関わるのが苦手という視点から

わらべ歌やにらめっこなどの遊びの様子、人への関心や他の幼児からの働き掛けへの応じ方、普段の言葉のやり取りなどについて、気を付けて見るようにします。「対人関係」に課題が見受けられる場合、本人の特性によるものか、初めての集団生活での戸惑いのように環境の影響なのかなどについて丁寧に検討する必要があります。そのため、日常的な関わりの記録を行うとともに、生育歴や保護者の関わりの様子などの情報収集を行うこととしました。

・場面の切り替えに遅れるという視点から

場面の切り替えが難しいのは指示がうまく理解できていない可能性があります。他の幼児の様子を見て動く様子が見られるか、普段の言葉のやり取りはどうかなどについて、気を付けて見るようにします。また、個別の声掛けや、次の活動や遊び方の手順の提示などの視覚的ガイドの手立てを講じて、C児がスムーズに動けるかどうかを確認します。

・発達全般の視点から

体の動きや生活動作など、発達全般の状況も確認する必要があります。

【C児が楽しく遊んでいる姿について丁寧に観察】

○ 楽しく遊べることで支援の手掛かりになることから、C児の好きなこと、興味や

関心について探ることになりました。例えば、スムーズに参加して、豊かな関わりが見られるのはどんなときか、笑顔や言葉が発せられるのはどのような場面かについて、気を付けて見るようにします。

6月の園内委員会

○C児の実態の把握

5月の園内委員会で示された視点に注意して見てきたC児の姿を共有し話し合ったところ、視覚的な問題よりも興味や関心の偏りや経験不足による不安が強い傾向があることが確認されました。他の幼児と一緒にいる運動遊びや製作活動など、初めての場面では遠巻きに見ているけれど、2回目には近づいて覗き込む様子が見られることも分かりました。保護者は不安を抱きつつも個人差の範囲であると受け止めている様子でした。

○園での支援

園としては「個別の指導計画」を作成して、具体的な支援方法を共有し実践するとともに、記録を積み重ね、児童発達支援センターからの巡回訪問の際、ケース検討対象とすることにしました。近々行われる保護者との面談では、C児の園での様子と園での支援について伝えながら、4月以降の成長を保護者とともに確認し、今後に向けて共に取り組めることについて話し合う予定です。保護者が専門機関への受診を検討するときのために、特別支援教育コーディネーターが地域の関連機関の情報を整理しておくことになりました。

園内委員会② 「落ち着きがない」D児への対応

3年保育 3歳児

入園後しばらくした園内委員会で、「クラスが落ち着かない。特にD児が落ち着かないことがきっかけになっている」との先生からの相談を取り上げて、話し合うことになりました。話し合いの中で、D児は聞こえにくい可能性があるとの意見がありましたが、発達の個人差などの他の可能性も視野に丁寧にD児の様子を見るとともに、聞こえにくさの支援についても合わせて行ってみることとしました。

その結果、聞こえにくい可能性が高いことが分かり、視覚的手掛かりや正面からの声掛けが有効であることも分かりました。家庭での様子や保護者の思いなども聞きな

がら、聴覚特別支援学校と連携し、必要に応じて助言を得つつ、D児の支援を行うことになりました。

園内委員会の様子は次のとおりです。

春の園内委員会

【担任からのエピソード報告】

D児は、いつもきょろきょろしています。じっと座っていることもありますが、誰かが動き出すとすぐ後をついて動き出します。園庭では遊具を中心に体を動かしていることが多いです。友達のことはよく見ていてまねをしています。遊びに夢中になると声を掛けても振り向きません。言葉はあまり多くなく、何かあると指差して伝えます。友達が声を上げて泣いたときに一緒に泣き出し、わけを聞いても何も言わず、しがみついて泣き続けていました。最近、そんなことがよくあります。どうしたらいいのでしょうか。

担任からD児の具体的なエピソードが語られ、D児の困っている様子について話し合いました。その結果、いつもきょろきょろしているのは聞こえにくいから視覚情報を探しているのではないか、他の幼児が動くにつれていくのも周囲の音が聞こえにくいので周りの行動に合わせているのではないかなどの意見がありました。しかし、発達の個人差などの可能性も否定できないため、丁寧にD児の様子を見るとともに、聞こえにくさへの支援についても合わせて行ってみることとしました。支援については、具体的なアイデアを出すようにしました。

【D児の困っている姿や支援の有効性について丁寧に観察】

○ 聞こえにくい可能性があるとの意見がありましたが、発達の個人差などの可能性も視野に、幼児の困難さを適切に捉えるため、具体的な観察場面について共有しました。

・ 3歳児の発達の段階の視点から

活発に動くことや夢中になると声掛けに気付かないこと、友達が泣くとつられて泣くということは、3歳児にはあり得ることです。何をきっかけに動き出す

のか、声掛けに気付かないのはどういう場面か、誰かが泣くと必ず泣くのかなどについて、状況や頻度を客観的に把握することとしました。また、言葉の理解や表出の状況を把握するため、言葉での指示は伝わっているか、ルーティンでない活動に迷わず参加できているかなどについても、気を付けて見るようにします。なお、他の幼児との言葉のやり取りなどのように、発達の遅れと聞こえにくさのいずれにも該当する状況については、より丁寧な周囲の状況や幼児の様子把握が必要となります。

さらに、十分に参加できている運動的な遊びや製作活動などにおいて、D児が困っている様子がないか確認し、発達状況を把握するようにします。

・聞こえにくいという視点から

担任から報告されたエピソードは、聴覚に障害がある場合に起こりうる行動であることを共有し、「聞こえ」の様子を観察することとしました。「きょろきょろしている」のが顕著に見られるのはどのような場面か、言葉の表出はどんなときに見られるか、他の幼児とのやり取りはどのようになっているかなどについて、気を付けて見るようにします。さらに、聞くことに困難があるために視覚から情報を得ようとしている可能性を考えて、視覚的な手掛かりの提示や正面からの声掛けを試みることにしました。

【D児と他の幼児との関わりへの支援】

- 周囲の音声が聞こえにくいとため、D児が他の幼児を遊びに誘うことが少なく、次々に展開する遊びの場合には状況が分からなくて不安を感じている可能性があることから、先生がD児に聞こえるように個別に声掛けをしたり、イラストや身振り手振りで伝えたりすることにしました。
- D児にとって、他の幼児が泣くことはとても不安なことのようです。不安の原因はまだ分かりませんが、他の幼児が泣き出したときには、D児が落ち着けるように、集団から離したり、状況を説明したり、先生が寄り添ったりするようにしました。

初夏の園内委員会

園全体で丁寧にD児の姿を捉えたところ、D児は「聞こえ」に課題がある可能性が高く、視覚情報の提示や正面での声掛けが支援として有効であることが分かりました。

3歳児健診の結果について入園時資料を確認するとともに、「聞こえ」の状況など、D児の育ちについて保護者はどう受け止めているか、面談を行うこととしました。保護者の承諾が得られれば、「聞こえ」の状況を把握し、さらに支援策について検討するために、聴覚特別支援学校の巡回相談を活用する予定です。

夏の園内委員会（保護者面談後）

○保護者面談から分かったこと

保護者もD児の様子について、「ご飯だからおもちゃを片付けて」と言っても知らん顔をしているなど、言ったことが伝わらないことがあり、つい叱責することが多くなっていると悩んでいたことが分かりました。D児は強く叱られる経験を繰り返して不安が募っていることが推測されます。このことが、友達が泣くことに敏感になっている理由かもしれません。聞こえにくい可能性が保護者と共有できたので、専門機関への受診を勧めることを確認しました。

○関係機関との連携

保護者の承諾が得られたので、D児の様子を聴覚特別支援学校と共有し、D児が安心して園での生活を送るための環境の構成や配慮の在り方について具体的な助言を受け、「個別の指導計画」を作成することとしました。

クラス担任は、D児が聞こえにくいことを踏まえて、引き続き、正面からの声掛け、ジェスチャーや絵カードを用いての説明などに取り組むこととしました。D児にとっての分かりやすい説明は他の幼児にとっても分かりやすいことを確認し、クラス経営上の工夫につなげました。

事例から読み取れること

園内委員会で大切にしなければならないのは、全ての先生が、障害のある幼児などに対する配慮の必要性を共通理解するとともに、先生間の協働により指導内容や指導方法が充実することです。

二つの事例から、園内委員会を進める上で大切にしたいことを確認します。

○障害のある幼児などの姿を全先生で客観的に捉える視点

日々の保育において、意識して関わる場面や支援の手立てについて具体的に提案し合いながら、幼児の姿をより精緻に捉えようとしています。当該幼児が見せる姿が障

害に起因するものなのか、それともその他の要因によるものなのか、多角的な視点で協議しています。その姿は一過性のものか、頻繁に見られるものか、環境や場面によって変わるのか、関わり方によって変わるのか、検討することが大切です。

○指導内容や指導方法の共有と実践

事例では、園内委員会で確認された情報を全ての先生が共有し、それに基づく指導内容や指導方法を全ての先生が理解し実践しようとしています。支援の具体的手立てを共通にすることにより、障害のある幼児などは日々の生活に安心感を得ることができます。そのためにも個別の指導計画の作成が有効です。

○障害のある幼児などの姿とその背景を読み解く視点

障害のある幼児などの困っている姿の背景として、家庭環境や生育歴が関係している場合もあります。また、身体の動きの困難や感覚の障害が潜んでいる場合もあります。いずれにしても、園での姿を観察するだけでは情報を得ることができません。保護者や関係機関との連携が必要になります。

○保護者との連携における留意点

入園時に障害が明らかになっていない場合には、保護者も当該幼児の様子を十分把握できていない場合が多いと考えられます。保護者との意見交換や情報共有については慎重かつ謙虚に取り組まなければなりません。十分な信頼関係を築き、当該幼児の困っている姿を共有できたときに連携がスタートします。C児の事例では、保護者との面談を重ねながら専門機関へつなげる方針を立てています。

○関係機関との連携と「個別の教育支援計画」

D児の事例では、保護者の承諾を得た上で、聴覚特別支援学校と連携してD児への支援を検討しています。医療機関の受診と併せて、D児に関わる関係機関が協働して「個別の教育支援計画」を作成し、長期的な一貫した支援を見据えた体制を築くことが大切です。

(第5章1. 体制整備の必要性 128頁参照)

事例4 外部有識者の助言を生かして支援の手立てを考える

障害のある幼児などの支援を考える際には、障害に関する専門的な知識等が必要です。外部有識者の助言を活用することも重要な方策の一つです。当該幼児の状況や感じている困難さを専門的な視点から把握し、障害の状態等に応じた具体的な支援方法などについて相談することができます。一方で、来園する外部有識者が園の訪問に慣れていないということもあります。保育について、また自園の特色や体制などを伝え理解を図ることは、当該幼児が集団の中で力を伸ばしていくための支援を考える上で重要なことです。

外部有識者による巡回相談などを活用して、当該幼児の障害の状態等に応じた支援を考えるには、どのようなことを大切にするとよいでしょうか。

【ポイント】

- 双方の専門性を発揮して、障害のある幼児などの支援を考えましょう。
- 事前の準備や事後の取組を行い、確実に実践につなげましょう。
- 保育に関する理解を図りましょう。
- 外部有識者の助言と幼児教育を考え合わせて、支援を検討しましょう。

ここでは、2年保育4歳児E児について、巡回相談を経て園での支援を考えていったプロセスを紹介します。

① 入園当初のE児の様子と保護者との関わり

2年保育4歳児 4月

入園式の日。保護者と共に登園したE児は少し緊張した面持ちでしたが、保護者と一緒に保育室に入り、自分のロッカーを見るなどしました。けれども、式場である遊戯室に入ると大声で泣き出し、入園式は途中で保護者と退出しました。式後の保育室での活動には保護者に抱かれながら泣かずに参加し、先生の読む絵本を見ていました。帰りの挨拶をする際に、先生は保護者に、E児のペースでゆっくり慣れていきましょと伝えました。

翌日以降、E児は保護者との別れ際は不安そうにしていたましたが、先生と一緒に保育室にある乗り物のおもちゃで遊ぶなどしながら、徐々に慣れていきました。とりわ

け園庭で遊ぶことを好み、走り回ったり好きなテレビ番組のキャラクター（以下、キャラクターとする）のまねをしたりして笑顔が多く見られました。

園生活に慣れてくると、楽しく遊ぶ一方で、近くにいる他の幼児をぶったりけったりする、他の幼児が遊んでいる積み木を倒したりするなどのことが目立ち始めました。先生はE児に、ぶたれたり遊んでいるものを壊されたりすると、相手は痛かったり悲しかったりすることを、その都度伝えました。E児は、そのときには「分かった」「ごめんね」と言いますが、同様のことは繰り返されました。また、対面式や誕生会、避難訓練などを嫌がり、遊戯室に入ると泣き出してその場から離れることが続きました。

保護者には、降園時にその日の楽しかった様子を伝えることを中心にしながら、徐々にうまくいかない場面のことや先生の対応を伝えました。保護者は、家庭でのエピソードや保護者が感じる育てにくさについて少しずつ話すようになっていきました。先生は、保護者が困っている状況やこれまで丁寧に配慮しながら子育てをしてくれていることなどを受け止め、園は保護者と一緒に子育てをしていく場であることを伝えました。その上で、巡回相談の仕組みを説明し、E児について相談することを提案し、了承を得ました。

② 巡回相談の実際（準備、当日、事後）

事前準備

巡回相談で来園する外部有識者が、園の訪問は初めてであるとの情報を得て、保育や自園の方針などを丁寧に伝える必要があると考えました。そこで、2種類の資料を事前に準備することとしました。

ア 保育や自園の方針や体制などを伝えるために（管理職や特別支援教育コーディネーターが準備）

- ・既存の保護者向けの説明資料など（秋の入園希望者対象の園説明会資料や年度当初の保護者会資料）を活用して作成したもの
- ・園要覧、園便り等

イ E児の様子を伝えるために（担任が準備）

- ・これまでの支援の経過や最近の様子を、学年会などこれまでに話し合った記録や、日常の保育記録を基にポイントをまとめておく。視点は、日常の記録の視点（遊び、人間関係、生活）とする。

- ・担任が対応に苦慮している点について、具体的なエピソードと現時点で行っている支援の方向性や方法をまとめておく。

巡回相談の当日は、参観の前に園長から外部有識者に自園の概要や特色を伝え、保育室の場所を案内しながら、実際のE児の姿を基に保育について説明することとしました。また、個人情報が含まれるため、この資料は項目のみ記載したものを配布し、具体的な内容は口頭で説明することとしました。

巡回相談 当日

外部有識者は、園長から園の概要等を聞き、園内を見ながら保育について説明を受けました。その後、E児の在籍するクラスで自由に参観し、保育後に協議会に参加して助言及び質疑応答を行いました。

<参考>当日の日程

9:30 来園 園長から園の概要や保育の説明、E児の概要を説明する。

園内案内

10:00 E児の在籍するクラスの保育参観

- ・好きな遊び
- ・片付け
- ・クラスでの活動
- ・昼食（弁当）

（昼食休憩）園長等と昼食を取りながら懇談

- ・好きな遊び
- ・身支度
- ・降園時の活動
- ・降園の様子

14:20 協議会（司会：特別支援教育コーディネーター）

- ・園長挨拶
- ・担任からE児に関する状況や指導について説明
- ・外部有識者からE児の様子や今後の支援について説明
- ・E児の発達等や今後の支援について協議

【外部有識者からの報告】

○E児の様子について

- ・全体的に落ち着いて生活している。注意が移りやすい傾向や行動のコントロールが難しい傾向が見られる。
- ・身支度や生活面では、先生が近くで声を掛けたり見届けたりすることで、時間はかかるが最後までできている。
- ・ボタン掛けなど細かな作業等は、経験不足なのか苦手なのかは、継続して様子を見たい部分である。
- ・戸外で、好きなキャラクターになりながら、走ったりポーズを取ったりしながら笑顔が多く見られている。
- ・友達の様子を目で追っていたり、後をついて動いたりすることから、関心がある様子である。

○担任が苦慮していることについて

<「友達をぶったり、使っているものを壊したりしてしまう」ことについて>

- ・本日も複数回見られた。どの場面も、仕草やつぶやきからキャラクターになっているように見受けられる。先生がE児の名前を呼んだりたしなめたりする口調で、ハッとすることがあった。その後はすぐに「ごめんね」と言い、先生の話には「分かった」と応じている。「分かった」と言っているが理解しているかどうかは検討が必要であると考えます。
- ・クラスでの集合時にも、つぶやきや仕草からキャラクターになっているように見える。

<全体の集会などに、参加しにくいことについて>

- ・大勢で集まることや遊戯室という場所への不安などが予想される。どのようなときにどのような反応をするのか、事実を捉えて対応を考えていく。
- ・その場所へ行くことを強く嫌がったり激しく泣いたりするなどの場合、嫌な場所（活動）という印象が強くついてしまうため、無理強いすることは望ましくない。園生活が楽しいと感じることを優先して、少しずつ進めてはどうか。
- ・特定の場所を嫌がる場合、その幼児にとって何らかの原因があると考えられる。例えば暗い、圧迫感があるなど様々であるが、受け止めや感じ方の強さは人によ

って違い、幼児はそのことを明示的に意識したり言語化したりすることは難しい。

外部有識者による報告の後、E児の実態及び今後の指導について、率直に意見を出しながら協議しました。これまで気付かなかったE児の様子や、担任が指導に苦慮している点を主な観点としています。

【協議】 ○園の先生 ●外部有識者

<E児の様子について>

○好きな遊び以外のときにも、キャラクターになりきっている時間が長いことが初めて分かった。

○何かになりきって楽しめることは、幼児期の発達としても大切で、E児のよさであると思っている。切り替えが難しいことは気付かなかった。

<友達をぶったり、遊んでいるものを壊したりすることについて>

○友達をぶったり、遊んでいるものを壊したりするときも、E児にとってはキャラクターになりきっている延長なのかもしれない。そのキャラクターになって遊ぶことで、行動がエスカレートしてしまうのではないだろうか。

○ぶったり壊したりすることばかりではなく、楽しく遊ぶ場面も多く、園生活の安定にもつながっている。プラスに捉えたい。

○他の幼児への関心も見られてきているので、なりきって遊ぶ楽しさを生かしながら、一緒に動く楽しさを高めたり、他の体験を織り込んだりしていくことができるとよいのではないか。

●遊びは、同じ活動に見えても一人一人に応じるように展開されていくことが分かった。その幼児の興味や関心や楽しさを重視することは、障害のある幼児などにとっても大変重要である。

●他の幼児との関わりを無理なく促すことは、園だからこそできることである。

E児は、結果的には友達を怒らせてしまっているが、本当は友達と遊びたいと願っているように感じる。

●止める必要がある行動は、起きてしまう前に止められることが望ましい。E児にとって分かりやすく、否定的でない端的な言葉や身振りを使って、いつも同じように働き掛けることが効果的であるように思う。E児への関わり方を、全ての先生で共有できるとよい。

●長期的な見通しを共有することも大切である。E児は、今は行動のコントロールができていない状況である。まずは先生の言葉や行動などがE児にとって外からのブレーキになる。2年間を通して少しずつ、E児が外にあったコントローラーを自分の中にもっていけるようなイメージで進めてはどうだろうか。

<集会への参加が難しいことについて>

○今は無理をさせないことが重要であることは理解した。ただ、避難訓練だけは命に関わることでもあり、参加させたい。

●集団生活の上で、また教育的な側面からも避難訓練が重要であることはよく分かる。参加する活動について軽重をつけてはどうか。

協議会終了後、週末の学年会でE児の指導を具体的に考えることを確認して、解散しました。

事後の話し合い

学年会で、翌週の打ち合わせの後、外部有識者との協議を踏まえてE児の指導について話し合いました。

【学年会】参加者 クラス担任2名 特別支援教育コーディネーター（主任）

<E児の様子について> ○先生の発言 ◆今後の支援

○皆で集まっているときや、ゲームをしているときに、つぶやいたりポーズを取ったりしていることが多くある。声を掛けるときは、遠くから呼びかけるよりも近くで話し掛けた方が、ハッと気付くようだ。

◆好きな遊びからクラスの活動の時間などの切り替えの際に、キャラクターになっただままでいる様子の中には、肩に触れたり正面から向き合ったりして穏やかに名前を呼ぶ。そして、両手をとって「Eちゃんマン、お、し、ま、い」と合図をする。

○腕輪状のものを何色か用意しておいたところ、好きなキャラクターになっている他の幼児が使っているのを見て、E児も身に着けた。「おんなじ」と言って友達と一緒に走ったりポーズをとったりしていた。

◆簡単に身に着けて友達と一緒に気分を味わえるもの、巧技台からジャンプするなど運動的な要素のもの、ショーのように曲をかけながら踊ることなど、なりきる楽しさは大切にしながら、体験を広げていけるような環境を構成する。

<友達をぶったり、遊んでいるものを壊したりすることについて>

○すごい勢いで走ってきたときに、否定的でない言葉をと思い、とっさに「Eちゃん、ブレーキ」と言った。E児がキュッと止まったので、「止まれてよかった。ぶつからなかったね」と言うと、うなずいていた。こんな感じだろうか。

○E児が止まることができたのであれば、それを続けてみたらよいかもしれない。うまく止まったら「ナイス、ブレーキ！」とか、端的でリズムのよいほめるフレーズを使ってはどうだろうか。

◆「Eちゃん、ブレーキ」、「ナイス、ブレーキ！」のフレーズを変えずに関わってみる。うまく伝わらないときには、身振りを加える等しながら、E児にとって入りやすい言葉や身振りなどを探っていく。

○行動のコントロールについて意識してみると、例えば鬼ごっこで合図を聞いて動くことや、音楽に乗って体操すること、音に合わせて静かに歩いたり思い切り跳んだりすることなどは、E児にとって、意識して行動をコントロールする体験にもなっていると思った。

◆動きのメリハリのあるもの、慎重に動くなど動きのコントロールを伴うものを、クラス皆で遊ぶときに意識的に取り入れていく。

その他、集会は避難訓練のみ先生が抱いて入口から訓練の様子を見るなどして、参加の方法を考えていくこと、遊戯室の窓下に、明るい色のカーテンを掛けることなどを話し合いました。

その後、学年会で話し合ったことを実践し、E児の様子に応じて調整しながら支援を続けていくことにしました。併せて、個別の指導計画の案を作成しました。その際、園の様式にある「遊び、人間関係、生活」の視点に加え、E児独自の視点として「行動のコントロール」を加え、月末の園内委員会で検討することとしました。

また、保護者へは、巡回相談後にE児に対する支援で行っていることやそのときのE児の様子などを伝え、E児にとって分かりやすい方法を共有しました。

事例から読み取れること

外部有識者との連携を進める上で大切にしたいことをまとめます。

1 双方の専門性を発揮して、障害のある幼児などの指導を考えます。

外部有識者には様々な職種があり、連携の方法も多様です。どのような場合でも、当該幼児の実態を基に双方の専門性を発揮して、当該幼児のよりよい成長を一緒に考えていくことが重要です。

①保育に関する理解を図ります。

外部有識者に保育を理解してもらうことにより、園生活を生かして、障害のある幼児などが力を伸ばしていくための支援を共に考えることができます。事例にあるように、既存の資料を生かした資料作り、実際の保育場面を見ながらの説明などを通して伝えていくことが考えられます。

②外部有識者の見立てやアセスメントから学びます。

事例では、E児の様子を専門的な視点から観察し、園の先生と協議をする様子が示されています。当該幼児の状況によっては、発達検査などの方法を用いたアセスメントが行われることもあります。障害の特性や程度によっては、当該幼児自身ができるようになることを目指して支援を行うことが重要である場合もあります。外部有識者からアセスメント等の結果を示された際には、その背後にある検査等の方法や障害の専門的な観点からの見解などを合わせて聞くことが大切です。

障害に関する専門的な観点からの見立てやアセスメントは、障害のある幼児などの幼児理解をより深め、障害の状態等を踏まえた当該幼児に適した支援を考えることにつながります。

③外部有識者の助言と幼児教育を考え合わせて、支援を検討します。

事例では、「端的な分かりやすい言葉で関わる」、「外からのコントロールからE児自身のコントロールへ」といった外部有識者の助言を受け止めながら、園生活の中でE児に適した支援を考える様子が示されています。

外部有識者との連携の中では、アセスメント等の結果に基づいた具体的な支援の方

法を示されることがあります。療育機関等では日常的に行われる方法でも、当該幼児だけを対象にした教材や活動を個別に行うことは、幼児教育の特質を生かした支援とは言い難いこともあります。専門的な方法を学びながら、園生活の中で当該幼児のもてる力を伸ばすためにどのように体験を重ねていくことが必要かを考えていきましょう。その際、障害のある幼児などと他の幼児との関係性を捉える、障害の状態等に応じた支援の中で他の幼児と共有できることを見出して、クラスの幼児皆にとって楽しいことになるように工夫するなどのことが考えられます。さらに、このことは、障害のある幼児などを含む全ての幼児にとって、園生活が充実することにもつながります。障害に関する専門的な知識や方法と幼児教育を併せて考え、当該幼児に適したものになるようアレンジしていくことは、園の先生の専門性と言えるでしょう。

2 連携の機会を有効に活用するために、事前の準備や事後の取組を確実に行いましょう。

巡回相談等、外部有識者との連携の機会は限られていることが多いものです。貴重な機会を有効に活用するためには、事前の準備や具体的な指導につなげるための事後の取組が重要です。

①相談する障害のある幼児などの状況を的確に伝えましょう。

相談する障害のある幼児などの状況を端的に説明できるよう、外部有識者に伝えたいポイントを明確にし、当該幼児の実態を整理しておきます。資料作成に負担がかかりすぎないように、新たな資料ばかりでなく、日常の記録や園内委員会で作成したものなど、既存の資料を活用してもよいでしょう。資料作成や共有に当たっては、個人情報保護の観点から、口頭での報告や配布資料の回収など、資料の扱いを決めておくことが必要です。

事例では、初めて相談したときの様子が示されています。そのため、E児の全体的な発達や先生が苦慮していることについて協議されています。2回目以降は、前の回で焦点化されたことに絞って、指導の経過や当該幼児の様子を説明することが考えられます。この事例の場合、例えばE児の場面の切り替えに関すること、行動のコントロールに関すること、集会への参加に関することなどが該当するでしょう。

次回の計画に当たっては、当該場面が現れやすい時間帯に参観を設定したり、当該場面を撮影したビデオを活用したりするなどのことも、当該幼児の状況を的確に伝え

る手段として有効です。

②外部有識者との協議を踏まえ、確実に実践につなげましょう。

巡回相談等で話し合われたことは、実践につなげていくことが重要です。そのため、支援の方向性や具体的な方法を確実に検討し実施することが求められます。当日、外部専門家との協議の後に話し合うことも考えられますし、事例のように、期日を決めて後日話し合ってもよいでしょう。

事例では、学年会までの間に、担任が外部有識者の助言を念頭に置いて、改めてE児の姿を捉えたり具体的な手立てを試行したりしています。その上で他の先生と話し合うことで、よりE児に合った支援を考えることにつながっています。さらに、検討した内容を個別の指導計画に反映させ、全ての先生で共有しながら指導を進めていくことも重要です。

また、保護者に巡回相談等を経て支援を工夫した点や、その際の当該幼児の様子などを伝えることも大切です。当該幼児にとって有効な支援を家庭と共有するとともに、保護者が専門機関とのつながりを考えるきっかけの一つになることも期待されます。

(第2章(5) 互いの専門性を発揮する専門機関との連携 11頁参照、第5章4.

(2) 巡回相談 143頁参照)

事例5 個別の指導計画の作成を通して、障害のある幼児などの発達に必要な体験を考える

個々の障害のある幼児などの実態に応じて適切な指導を行うためには、個別の指導計画を作成するとよいでしょう。個別の指導計画は、教育課程を具体化し、障害のある幼児など一人一人のねらい、指導内容及び指導方法を明確にして、きめ細やかに指導するために作成するものです。個別の指導計画は、作成して終わりではなく、PDCAサイクルによる見直しを行うことが大切です。

【ポイント】

●個別の指導計画作成の流れ

- ①障害のある幼児などの姿から実態を把握しましょう。
- ②ねらいを考えましょう。
- ③環境の構成を考えましょう。

●個別の指導計画作成に当たっての留意点

- ・障害のある幼児などの現状、強み、思いを把握しましょう。
- ・多面的・多角的な視点で検討しましょう。
- ・障害のある幼児などの困難さだけに着目するのではなく、その幼児のよさや得意なことを大切にし、その幼児を肯定的に捉えましょう。
- ・スモールステップを意識しましょう。

ここでは、一斉的な活動や行事等に参加しようとしないう4歳F児の実態や指導の過程の振り返りを通して、個別の指導計画におけるねらいや指導内容、指導方法について検討したF児（3年保育4歳児）の事例を示します。

①F児の実態を把握する

F児は、気になるものなどを見付け自分の世界に入ると、全く周りの状況は意識の中に入らず、ずっとそのことをやり続けます。友達のしていることに興味はあるようで近くで見えていたり、まねてみようとしたりすることはありますが、関わりはほとんどありません。また、クラス全体での活動などには、自分から参加しようとはしませんが、支援員の言葉掛けなどにより、気分が乗ると参加することもあります。

最近、F児は給食を食べ終わるとランチルームの中をうろうろと歩き回るようにな

りました。以前は、友達が食べ終わるまで、おとなしく席に座って待っていましたが、今はじっとしていません。席に着くように声を掛けますが、担任の言葉は全く耳に入らない様子です。担任は、先輩の先生にアドバイスを求めることにしました。

先輩の先生からは、「F児が歩き回らないようにするのはではなく、なぜF児が歩き回るのかを考えるのよ」とアドバイスをもらいました。そこで、支援員とともにF児の言動を観察し、F児の思いを推し量ってみました。その結果、「最近、食事のペースが早くなり、友達より早く食べ終わってしまい、次に何かすることを探しているのではないか」という仮説にたどり着きました。そのことを先輩の先生に報告すると、「F児は、自分から楽しみを見つけて活動したいという思いをもてるようになってきたのね」と言われました。

担任は、F児が歩き回らないように行動の制限をかける指導をするのではなく、「なぜ、F児は歩き回るのだろう？」と問い直すことで、F児の思いが分かり、F児の行動についても理解することができることに気がきました。そこで、担任は、F児をもっと深く理解するために、様々な場面でF児のエピソードを集め、次の表を作成して、まとめてみました。

	保育室	保育室以外
一斉的な活動	体を動かす活動は、先生の支えにより参加するが、途中でやめたり、また参加したりする。	運動会のリレーの練習で、わざと転んで、転ぶ感覚を繰り返し楽しんでいる。
自由に遊んでいるとき	人形を使って遊ぶことが好きでブロックで家を作り、自分なりにイメージをわかせて遊んでいる。	幼児が複数名で追いかけてっこをしていると、近くで同じようにやってみようとする。
生活場面	朝の気分で、自分から身支度をしたりしなかったりする。	食事を終わると歩き回る。お気に入りの椅子があり、そこに座って周りを眺めている。

F児は、周りの環境や条件が変わると全く違う姿を見せることが分かりました。そして、担任は、これまで一斉的な活動や生活場面だけでしかF児の姿を見ていなかったことに気づき、一方的な面からしかF児を理解していなかったことを反省しました。そのことを先輩の先生に話すと、先輩の先生から、「あなたは、多様な場面でのF児の

生活の様子、『最近変わってきたな』とか『どうしてこのような行動をとるのか』など、気になった場面を記録していたから、この資料をまとめることができたのよ。でも、F児の困ったことに着目しすぎて、F児を多面的・多角的に捉えることの意識が少し低くなってしまったのかもしれないわね」と言われました。

②ねらいを考える

次に、担任は、F児のよさや得意なことと困難さを踏まえて、ねらいを作成することにしました。F児の実態を捉えるときと同様、F児の困難さだけに着目するのではなく、他の幼児と同じように、F児の中に育ってきているものを捉えた上で、F児のよさを生かしながら困難さに応じた必要な支援をすることが大切であると考えました。F児に対して、担任は「クラス全体の活動に楽しく参加してほしい」と思いました。様々な場面でF児のエピソードから、「幼児が複数名で追いかけっこをしていると、近くで同じようにやってみようとする」に着目しました。F児は、他の幼児と共に追いかけっこはしていませんが、他の幼児がしていることが気になってきていると考えた先生は、今のF児には、他の幼児の存在を肯定的に思うこと、他の幼児の中にいる心地よさを経験することが大切であると考えました。他の幼児と同じ活動を求めたり、他の幼児の発達の状況と比較したりするのではなく、F児なりのやり方で他の幼児と関わっていけるようにすることが、F児が抱える困難さに応じた支援をする上で大切であると考えました。F児が他の幼児の中にいる心地よさを経験していくためには、その時々遊びをF児自身が楽しむことが大切であるとも考えました。他の幼児と直接的に関わらなくとも、他の幼児と共有した場や空間、時間がF児にとって心地よく楽しいものであれば、F児は他の幼児との心の距離が次第に縮まっていくのではないかと考えました。これらから、担任は、ねらいを「自分の好きな遊びを十分に楽しみながら、友達の中にいる心地よさを感ずる」にしたいと思いました。

しかし、担任は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のことが気になりました。卒園までに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が育っていくためには、このねらいではだめなのではないか、F児の今の実態に応じたねらいを設定することとの関係をどのように考えたらよいのかについて迷いが生じました。そこで、先輩の先生に相談したところ、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は到達目標ではないのよ。今、あなたが設定したねらいは、将来的には、『協同性』などにつながっていると思う

わ。でも、幼児の発達状況などによって、どのような姿として現れるのかは違うわ。卒園時に、F児なりの『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』が現れていればいいのではないかしら。先生が、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を念頭において指導することは大切だけれど、目の前の幼児の実態を踏まえて、その幼児なりの発達のペースに応じることが大切なの。もちろん、他の幼児と関わることに困難を抱えている幼児について、その幼児の好きにさせては他の幼児と関わる機会がない可能性がある。だから、あなたは、他の幼児と場や空間を共有する経験を重ねて、次のステップにつなげようと思ったのでしょう。それに、きっと、F児に経験してほしいことは他にもたくさんあったと思うけど、優先順位を考えて、F児にとって、今、大切にしたい経験に絞ってねらいを設定していることもよいと思うわ」と助言されました。

③環境の構成を考える

ねらいを「自分の好きな遊びを十分に楽しみながら、友達の中にいる心地よさを感じる」と設定したので、F児のよさや困難さを踏まえた指導内容や指導方法を考える必要があります。そのため、ねらいで示したようなことをF児が体験できるように、困難さに応じた支援も考慮して、環境の構成を具体的に考えることにしました。

今、F児は、人形遊びや先生との追いかっこ、友達のにしていることに興味があります。一方、クラスの幼児は、リレーごっこや鬼ごっこ、ブロック遊びに興味があります。F児が遊びに没頭するためには、保育室のどこかに人形遊びのコーナーを作って、一人でじっくり取り組めるスペースが必須だと思いました。また、F児と他の幼児との接点が生まれそうな遊びとして、追いかっこが考えられます。そこで、一日の生活の流れの中で鬼遊びをするようにしたらよいと思いました。そうすることで、F児がやりたいことをやりながら、思わず他の幼児と関わってしまうような場面をつくることのできるのではないかと考えました。そして、具体的にF児やクラスの幼児が遊んでいる姿を想像しながら、どのようなものを使ってどのような状況をつくるとよいのか、また、どのような支援が必要なのかを考え、環境の構成を具体的に考えていくことにしました。

④保育を振り返り、次の指導に生かす

毎日の保育を振り返り、見直し、改善していくことはもちろんですが、F児の実態に応じたねらいや指導とするためには、定期的な見直しが必要です。F児の発達を見通しながら、計画的に指導を始めて3か月が過ぎたところで、担任は、改めてF児の姿を捉えてみることにしました。

最近、F児は、友達に敬遠されることが多くなってしまいました。担任は「他の幼児が使っているものを取ってしまったり、他の幼児へのスキンシップが過剰になってしまったりして、他の幼児といざこざを起こすことが多くなって困っているんです。前はそんなことなかったのに」と、先輩の先生に相談しました。すると、先輩の先生から「それはF児の中で、他の幼児と直接関わりたい気持ちや他の幼児のしていることが面白そうで自分もやってみたいと思う気持ちが育ってきたからじゃないの？」と言われ、ハッとしました。

「自分の好きな遊びを十分に楽しみながら、友達の中にいる心地よさを感じる」をねらいとしていましたが、F児は他の幼児と直接的に関わろうとしています。したがって、ねらいも見直す必要があります。その際には、どのような状況がF児の変容を生み出したか、F児にとってどのような支援が効果的であったのかなどについても振り返って考えることが大切です。担任はF児のお気に入りの場をクラスの幼児が遊んでいる様子が見える場所に設定したり、F児が他の幼児と関わっているときは遠くから見守ったりするなど、F児と他の幼児との関わりを大切にしてきました。F児のお気に入りの場の位置は、F児が自分の遊びに没頭しながらも、クラス全体の雰囲気を感じられる位置であり、今のF児にとって最適な環境であったと考えられます。今後は、F児が直接的にクラスの幼児と関われるように、F児のお気に入りの場所の囲いを少し低くしようと思いました。それと同時に、F児のよさをクラスの幼児に知らせるために、F児の興味や関心がある遊びに周囲の幼児を誘ってみようと考えています。また、個別の指導計画やF児の変容の過程を園全体で共有し、園の先生全員が同じ方針でF児の指導に当たることが必要であると感じ、修正した個別の指導計画を次回の園内委員会で協議することにしました。

事例から読み取れること

個別の指導計画の作成の流れは、指導計画の作成と同じであることが事例から分か

ります。しかし、障害のある幼児などは、障害の特性等により発達に偏りなどがある場合があります。発達の偏り等にばかり着目して、当該幼児を否定的に捉えたり、当該幼児の発達の過程や状況と乖離^{かい}した当該幼児にとっては負担過重ともなりかねないねらいを設定したりすることのないようにすることが大切です。障害のある幼児などが感じる困難さは一様ではありませんが、「第4章 障害に関する基本的な理解と障害のある幼児などの困難さに応じた支援の手立ての考え方」において、困難さや支援の例を掲載しています。障害のある幼児などの抱える困難さの原因を考え、その困難さに応じた支援を考え、環境の構成を検討する中でその支援についても併せて検討していくことが大切です。そして、障害のある幼児などが抱える困難さについて、「できないこと」と捉えるのではなく、当該幼児なりの発達の過程として温かなまなざしで肯定的に捉えることが大切です。この事例において、先生が、個別の指導計画の作成に当たって大切にすることをまとめます。

①障害のある幼児などにとっての幼児教育

障害のある幼児などは、他の幼児と同じように幼児教育を受けています。したがって、幼稚園教育要領等に示されたねらいや内容も同じです。一人一人の発達に応じて必要な経験を導き出し、環境を通して教育を行うことも同じです。そのことを踏まえた上で、障害の状態等に応じた指導方法の工夫をすることが大切です。幼児教育は、教育の成果がすぐに現れないこともあります。だからこそ、幼児の発達を見通して、幼児の発達を促すような指導の方向性を探っていくことが重要です。

②障害のある幼児などを肯定的に捉えること

障害のある幼児などは、先生にとって理解し難い言動をすることがあります。先生は、どうしてもその言動を「困ったこと」と捉えて抑制してしまいがちです。しかし、その言動を抑制したところで、その場の言動に変化はあるかもしれませんが、長期的な視点で障害のある幼児などの発達を考えると、あまり効果はありません。障害のある幼児などの言動は、その幼児の発達の過程において必要なものであり、その言動から当該幼児の思いを推し量ることで、今、当該幼児にとって必要な体験が見えてきます。障害のある幼児などの抱える困難さについて、否定的に捉えるのではなく、当該幼児が今の自分の興味や関心、能力等に応じて必要としている体験を読み解くヒント

として捉えることが大切です。そして、当該幼児なりの変容していく姿を捉え、その成長を先生間で喜び合う姿勢が大切です。

③目の前の障害のある幼児などの実態に応じたものとする

障害のある幼児などは成長していきます。先生の目の前にいる障害のある幼児などの実態に応じて、個別の指導計画の見直しをする必要があります。そのためには、当該幼児の実態を捉えるため、当該幼児の現状、強み、思いなどについて、多面的・多角的な視点から定期的に園内で話し合います。そして、スモールステップを意識しながら、目の前の障害のある幼児などの実態に応じたねらいを考えます。

こうしたPDCAサイクルを構築することにより、先生は、目の前の障害のある幼児などの言動に振り回されることなく、発達を見通して指導することができるようになります。そして、指導内容や指導方法などが明確になり、よりきめ細やかな指導が可能となります。

(第2章(2) 教育課程と一人一人の発達に応じた指導 8頁参照、第2章(4) 園における個別の指導計画の考え方 10頁参照、第5章2.(2) 個別の指導計画 137頁参照)

事例6 障害のある幼児などの実態に応じた行事参加について考える

園で行われる様々な行事においては、障害のある幼児などに応じた指導を考えていく必要があります。その行事が当該幼児にとって、どのような意味をもつのかを考えながら、これまでの経験を踏まえて、当該幼児にとって今、発達に必要な体験が得られるように、行事が終わった後の園生活も見通した上で考えていく必要があります。

そして、障害のある幼児などが行事に期待感をもち、主体的に取り組むことができるように、先生は当該幼児の困難さに応じてどのように取り組むのか支援を考えていきます。

また、行事の多くは、保護者が日頃の障害のある幼児などの育ちの様子を参観したり、保護者自身も一緒に参加したりする機会となるため、当該幼児の保護者への配慮も同様に考えていく必要があります。

【ポイント】

- 園全体で組織的、計画的に取り組みましょう。
- これまでの指導の積み重ねを生かして指導内容や参加の仕方を検討しましょう。
- 当該幼児や保護者と思いを共有し、参加の仕方や配慮について理解を得ながら進めましょう。

ここでは、行事を通してG児の3年間の取組の変容とそのときの状況に応じた支援策について紹介します。

<G児について>

G児は3歳児からの入園です。右半身に麻痺ひがあります。動作は体の左側で行うことが多いようです。右手や右足はゆっくりとぎこちなくですが、動かすことができます。一つ一つの動きがゆっくりのため時間がかかったり、バランスを崩して転んだりしてしまうことがあります。

① 3歳児 ～保護者と一緒に安心して取り組む～

G児は、入園当初から、保護者と離れることに不安な表情を見せていました。1学期に保護者と一緒に遊ぶ参観の機会があり、保護者と一緒にリズムに合わせて踊ることが楽しかったようで、普段の遊びでも少しずつ体を動かすことの楽しさは感じているようでした。

そこで運動会では、G児への安全面に配慮しながら、リズムに合わせて歩いたり、他の幼児と手をつないで入場するようにしたり、リズムの曲のテンポもG児ができそうなゆっくりした曲を選んだりするなどの工夫をしました。更にリズム遊びは、保護者と一緒にあまり動かずにその場で踊るような構成を考えて、安心して取り組めるようにしました。

当日、G児は、入場行進では落ち着いて参加しましたが、リズム遊びになると、いつもの雰囲気とは違う雰囲気に緊張したのか、踊らずに保護者に抱きついたまま何もせずに友達が踊っているのを見ていました。

② 4歳児 ～友達と一緒に楽しんで取り組む～

1学期の保育参観で、保護者と一緒にフリスビーで遊んだところ、G児は回転をかけて飛ばすのが上手で、周りの幼児たちも驚くほどでした。これをきっかけに自分から友達に声を掛けて遊んだり、戸外でも活発に遊んだりするようになってきました。

そこで、運動会では、友達と一緒に楽しめるように、4人が力を合わせて取り組む乗り物競争を取り入れました。何度か遊ぶ中でG児がいるチームは「G児がいるから遅い」「Gちゃんは、(乗り物を)両手で持てない」などの声が上がりました。G児は、「もうやりたくない」と言い出しました。先生は「この乗り物は、4人の運転手さんが揃わないと動かないんだけどな。Gちゃん運転手さんがいないと困るなあ」と言い、続けて「Gちゃんはこの前のフリスビーを投げて遊んだとき、とても上手だったよね」「何かいい方法がないか、先生、考えてみるね。皆も何かいい方法があったら教えてね」とG児のいるチームの幼児に投げ掛けました。

園内では、会議で、G児も楽しめるように乗り物を改良すること、フリスビーでの経験を生かして、ボールを投げる的当ての要素を組み込むこと、走る距離を短くすることなどの検討をしました。

そして、段ボール箱で作った乗り物の持ち手の部分を、G児が持ちやすいように大

きめの穴を開けて、G児が遊びの中でいつでも使えるように出しておき、段ボールの乗り物の持ち方や走り方などを自然となじめるようにしておきました。

直前の練習では、G児は得意の的当てで力を十分に発揮し、G児がいるチームが勝ちました。「やったー！」とG児もチームも大喜びでした。先生は「Gちゃんの的当て、すぐに当たったね」「今日は、皆、運転がとても上手だったね、息がぴったりだったね」と声を掛けました。

運動会当日、G児は、チームの友達と楽しそうに乗り物競争に参加し、満足した表情を見せていました。

③ 5歳児 ～自信をもって取り組む～

G児は、5歳児になり体力もついてきて、友達と一緒に遊ぶ楽しさや、体を動かして遊ぶ楽しさなどを重ねてきたことで、様々に表現することの楽しさも味わえるようになってきました。今まで思うように体が動かないことで不安を感じていることもありましたが、困っていることを自分の言葉で伝えるようになるなど、成長した姿も見られています。そのようなG児の姿にクラスの幼児のG児に対する理解も進んできています。

これまでのG児の姿から、2月の発表会では、G児にどのようなことを願うのかを園内で検討しました。担任は「これまでの経験を生かして、友達と様々な表現を楽しみ、自信をもって取り組んでほしい」と考えました。

5歳児では「ブレーメンの音楽隊」の劇を行うことになり、G児はロバの役を選びました。ロバ役の友達同士で、「ロバはギターを弾いて登場しようよ」「一人ずつ弾くのはどう？」「何の曲にする？」などの考えを出し合い、早速、自分たちで材料を探しギター作りが始まりました。G児は、友達が作っている様子を見ながら作り始めましたが、細かな製作など、自分で上手にできないところは言葉で自分のイメージを伝え、友達に手伝ってもらいながらギターを作りました。

G児は、作ったギターを手に持ち、「いいこと考えた」と言って、友達に手伝ってもらいながらギターの端にスズランテープを付け、肩にかけられるようにしました。そして、早速、肩からかけて右手でギターを押さえ、左手を上下に動かし、左を向いたり右を向いたりして弾いて見せると、それを見ていた周りの幼児から「Gちゃん、格好いい！」「本当に弾いているみたい」と声を掛けられて、嬉しそうな表情を見せまし

た。先生も「ロバの人たち、皆それぞれギターの弾き方が違って面白いね。一人ずつ弾くっていいこと考えたよね」と声を掛けると、その後、自分たちで登場の仕方やギターを弾く順番などを話し始め、G児は「皆、何番目がいい?」、「ロバだから格好いいのいいよね」などと、リードする姿も見られるようになりました。他のロバ役の幼児たちが考えた表現とは違う、G児なりに考えたG児らしい表現がクラスの皆から認められたことが自信となったようです。G児は当日の発表会では、大勢のお客さんの前で堂々と演じることができました。

保護者もG児の成長を喜ぶとともに、他の保護者もこれまで行事を通しての育ちを見てきたことで、G児の成長を共に喜ぶ様子も見られました。

事例から読み取れること

障害のある幼児などが行事に向けて取り組む際に大切にしたいことをまとめます。

1 障害のある幼児などの状況に応じた指導内容や指導方法を園全体で検討し、組織的、計画的に取り組めます。

先生は、行事から得られる体験的な学びを期待して、クラスの一つのまとまりを意識するあまり、つい統一感や参加を促してしまうことがあります。

行事は、そもそも幼児の生活に変化や潤いを与えるものであり、幼児が主体的に楽しく活動できるようにすることが大切です。そのため、障害のある幼児などに無理をさせることがないように、園としての方針やその行事を通して何を体験してほしいのかについて、ねらいや内容を十分に検討する必要があります。

事例のように、運動会や発表会などでは、いつものやり方にとらわれず、プログラムの構成や内容を当該幼児にとって参加しやすいものに工夫するなど、園全体で考えていくことが大切です。

さらには、行事によっては、全部参加することを求めず、一部参加するなど、当該幼児の状況に応じて考えていくことも必要です。行事は、参加することが目的ではなく、行事の準備も含めて、幼児が何を体験し、何を学ぶのかが重要です。その体験や学びは幼児ごとに異なります。行事だからといって、画一的な体験や学びがあるわけではありません。

事例では、3歳児のときには、安心して取り組めるように保護者と一緒に参加する

ような内容にしました。G児は園での生活に慣れつつありますが、他の幼児と同じ動きをすることは困難であり、ときには、慌ててしまいふらつくこともあります。そのことをG児も何となく感じて不安そうです。そのため、保護者がG児に笑い掛けながら踊ることで安心できることや、G児がふらつくようならすぐに手を差し伸べることができるようにすることが大切だと考えました。練習では参加できましたが、本番では参加できませんでした。しかし、練習で他の幼児と一緒に踊った経験は、G児に他の幼児と関わろうとする気持ちを育みました。また、リズム遊びを繰り返すことで、自分なりに工夫して体を動かすことも体験することができました。そうした体験は、行事終了後の日々の生活の中でも、遊びの工夫として生かされていきます。そして、学年が上がるにつれて、これまでの経験を生かした行事の工夫について検討することが大切です。その際、担任のみで検討するのではなく、園全体で話し合うことが大切です。例えば、練習のときに常に保護者が園に来ることができるとは限りません。そういった場合には、保護者の代役となる先生を決めておく方がよいでしょう。また、G児も他の幼児も楽しむことができる振付や、日々の園生活の中でリズム遊びをどのように取り入れるのかなどについても園全体で話し合うようにしましょう。他の先生からのアイデアも取り入れながら、G児も他の幼児も楽しむことができる行事となるように工夫します。

2 日々の積み重ねの延長上に行事があることを意識して、障害のある幼児などの得意なことや好きなこと、育ってきたことが発揮できるようにします。

行事によっては、少し長期的に取り組む必要があります。そのため、取組の過程では、障害のある幼児などがこれまで経験してきたことを生かしながら、その日、その時間で体験してほしいことを少しずつ積み重ねて、無理が生じないように、また、期待をもって当日を迎えられるようにします。

事例では、G児は、他の幼児から「遅い」などと言われ、「もうやりたくない」と言い出しますが、先生は、G児がボールを投げるような動きが得意であることを思い出して、それを乗り物競争の要素に取り入れていくことにしました。

障害のある幼児などが期待をもって楽しく参加できるようにするためには、日々の「楽しかった」、「できた」という小さな成功体験を積み重ねることが大切です。当該幼児の得意なこと、これまでの経験の中で育ってきていることなどを捉え、取組の内

容に生かしていきます。

何度も繰り返し取り組むことで慣れてくることはよいことですが、先生が「あともう1回やろう」と言って、練習の回数を増やしたり、準備不足で当該幼児が待つ時間が長くなったりすると、楽しさや期待感は薄れてしまいます。当日までの見通しをもちつつ、当日に向かうまでのその時々当該幼児の気持ちを捉えて、参加できそうな時間、回数などに配慮して進めていきましょう。

3 保護者と思いを共有し、参加の仕方や配慮について理解を得ながら進めます。

多くの保護者がこの日を楽しみにしています。期待が大きい一方で、障害のある幼児などの保護者は、我が子が参加できるのかといった不安や周りの保護者の目を気にして参加しない保護者もいるかもしれません。園として大事にしている体験を、障害があるからといって体験できないことはとても残念なことです。そうならないために、保護者の思いを十分に聞き取り、当該幼児が楽しく取り組めるように配慮する必要があります。

また、行事は、日々の遊びとは少し異なり、その日だけの特別感があります。その意味では、いつもと違う雰囲気であることや普段よりも大勢の大人がいたり、見慣れない人がいたりすることによって、当該幼児が取組の過程で見られた姿と異なる姿を見せることがあります。

そこで、事前に本人や保護者に場所や物を見てもらう、取組の過程を見てもらうなど保護者と共有するなどし、安心して取り組めるようにすることも考えられます。

事例では、3歳児のときに、練習は保護者と一緒にリズム遊びに参加していますが、本番では参加することができませんでした。保護者は、本番で他の幼児と同じようにできなかったことから、悲しそうであったり、将来への不安を口にしたりする様子が見られました。本番では多くの保護者が見ていることなどもあり、リズム遊びに参加できませんでした。練習でG児が体験したことはG児の成長にとって貴重な体験であること、園での他の幼児との生活や保育参観などの体験を繰り返すことで多くの人が見守る中でも自己発揮できるようになっていくことなどを、先生は保護者に説明しました。また、G児とは、他の幼児と一緒に入場する楽しさを共感し、リズム遊びはG児も一緒だともっと楽しかったという先生の思いを伝えるとともに、行事を終えた数日後に園生活の中にリズム遊びを取り入れるなど、G児と達成感や喜びを共有する

ことも考えられます。そうして、G児が次の行事への期待感をもてるように配慮するとともに、保護者とも期待感を共有するようにします。4歳児のときには、得意な遊びができてきています。活動の際に必要な配慮についても、先生が具体的に考えられるようになっていきます。G児が安心して楽しめるように、活動への配慮を行うとともに、保護者と行事の参加の仕方についても共有するようにしましょう。本事例では、G児は全ての行事に一人で参加していますが、状況によっては、先生や保護者が近くで声を掛けたり、ある行事には参加せずに応援したりすることもあるかもしれません。行事前に保護者と相談し、G児の気持ちや状態に応じた柔軟な対応ができるようにすることが大切です。さらに、5歳児になると、幼児同士で考えを出し合う姿が見られるようになります。このことはG児も同様です。障害の有無にかかわらず、幼児が互いの思いを共有し、発表会に向けて準備できるようにします。ギター演奏の表現方法は、幼児なりの工夫や発想を生かせるようにすることで、G児は動かしやすい左手で自分の思いを描く弾き方を実演し、楽しそうでした。他の幼児も、G児の演奏の様子を見て、それぞれに自分なりの演奏を工夫しています。

全てを先生が考えて決めるのではなく、当該幼児の思いを丁寧に受け止め、クラスでどのように取り組んだらよいかを考える、大事な成長の機会として捉え、保護者に対してもそうした幼児同士の育ち合いの機会となることの理解を得ながら進めていくことが大切です。

(第5章 2. 個別の教育支援計画と個別の指導計画 134頁参照、第5章6. 保護者との連携 148頁参照)

事例7 多様な幼児が共に遊びや生活を楽しむことのできる関係をつくる

幼児は、園で多数の同年代の幼児と関わり、気持ちを伝え合い、協力して活動に取り組むなどの多様な体験をし、その過程で、支え合って生活する楽しさを味わい、主体性や社会的態度を身に付けていきます。

障害のある幼児などには、他の幼児と同じ環境の中では、その体験や態度を身に付けていくことが難しく、障害のある幼児などの困難さに応じた支援が必要となります。また、障害に応じた合理的配慮やクラスの幼児たちと共に育つための配慮が必要となります。しかし、このことによって、障害のある幼児などが集団に入れないと思うことは適切ではありません。障害のある幼児などだけではなく、他の幼児にとっても、豊かな体験の機会を逃すことになりかねません。障害のある幼児などの困難さに応じた支援を行うとともに、当該幼児のよさを生かしたクラスづくりが大切です。

【ポイント】

- ①入園当初は、障害のある幼児などが園で安心して過ごせるよう、保護者との分離の時期、先生と保護者の関係、環境の工夫などを考えましょう。
- ②障害のある幼児などの困難さに応じた支援の下、先生と一緒に遊びが楽しめるようにしましょう。
- ③先生を仲立ちとして他の幼児と関わっていけるようにしましょう。
- ④障害の有無にかかわらず、幼児が育ち合える関係をつくりましょう。

<H児を取り巻く状況>

- ・ 4歳のH児は自閉スペクトラム症があり、知的障害もあると診断されています。
- ・ 保護者はH児の診断により早期から療育機関に通わせ、入園後にも療育機関を利用しています。
- ・ 感覚過敏があり、身に着ける物を嫌がったり、着る物へのこだわりがあったりします。
- ・ 一つのことに取り組む持続時間が短く多動の傾向があり、危険への判断ができないので安全を確保するために補助する先生（補助者）を配置しています。

<入園までと入園当初の取組>

H児の姿

- ・入園申し込みの際に、保護者からH児の状況を聞く。
- ・入園が決まり、4月以前に園庭開放の際に遊びに来る。
- ・入園式は、泣いて会場や保育室内に入ることができず廊下で過ごす。
- ・2日目、園庭のブランコで遊んで過ごす。
- ・3日目、所持品の始末をしてから園庭のブランコで補助者に見守られて遊ぶ。

先生の支援

- ・園に慣れるため、未就園児対象の園庭開放に来ることを提案する。
- ・来園時に、先生は意識的にH児と保護者に声を掛ける。
- ・入園式の翌日は保護者に一緒に過ごしてもらうことを提案する。
- ・補助者と保護者が見守る。

- ・前日と登園時の様子で、保護者には送迎後すぐに帰ってもらう。補助者から、「おはよう、Hちゃん今日もブランコして遊ぶ？」と声を掛け、ブランコで遊べるようにする。

自閉症のあるH児は、初めての環境に不安を感じやすいので、安心して入園を迎えられるようにするために、園庭開放などを利用して園内に入ることや雰囲気慣れていけるようにしました。そして入園当初は、保護者がそのまま園でH児と共に過ごし、安心感をもてるようにもしました。クラスの幼児たちは保育室で遊んでいても、H児は、補助者と一緒に好きな場所で好きなことをして過ごし、園が楽しいと感じることができるようになりました。

この時期の環境の工夫は次のとおりです。

- ・靴箱、ロッカー、幼児たちが集まるときのH児の位置は、H児に分かりやすいように端にして、目印となるシールを貼る。端にすることで、補助者の動きが他の幼児の活動の妨げにもならない。
- ・登降園の際に毎日行うことは、絵で表示しておくことでH児を含めて、皆が自分で身の回りのことをできるようにする。
- ・集まって先生が話をするときには、視覚優位のH児が集中できるように、視線の先の物には布を掛けた。

<園で安心して過ごすために>

H児の姿

- ・補助者がブランコの絵カードを見せ「Hちゃんブランコに行く？」と遊びたいことを確認する。「先生(担任)に言ってこよう」とH児に声を掛ける。
- ・補助者がH児を連れ「先生、ブランコに行ってきます」と代弁してから園庭に出る。
- ・園庭で遊ぶ際のカラー帽子をかぶらず、補助者が持って出る。
- ・戸外遊びを好み、連日ブランコや築山からのフープ転がしをして遊ぶ。

先生の支援

- ・絵カードを用いて、意思確認をする。
- ・「先生、園庭に行ってきます」と行き先を伝える約束事を設け、H児が補助者と一緒に意思表示している雰囲気をつくる。
- ・無理にカラー帽子をかぶせず、柔軟に対応する。
- ・好きなことができることで、園を楽しんでいるようにする。

入園してしばらくは室内遊びを中心としたり、園庭の遊びでは遊具を限定したりして安全に遊べるようにします。しかし、限られた場や遊具だけで過ごすことが難しい場合がありますので、補助者は柔軟な対応をするようにしました。H児はブランコが好きなので、好きなブランコ遊びを楽しめるようにしました。

また、言葉で意思表示をすることが難しいので遊具や場所、物や人などの絵カードを作成し、H児と先生とのコミュニケーションツールとしました。H児は感覚過敏があり、カラー帽子を嫌がったので、無理強いせず、夢中になって遊んでいてかぶれそうなときにそっとかぶせることを繰り返すようにしました。

<Hちゃん、何か違う>

クラスの幼児の姿

- ・「Hちゃん、何で話さないの？ 赤ちゃんなの？」と発語がないことが気になる幼児は担任や他の先生に繰り返し聞く。それでも「えー、どうして」と不思議に思っている幼児がいる。
- ・ H児はリズムや音楽的なことが好きで、歓声を上げながら体を動かして楽しんでいる。他の幼児は、何か違うなど感じている。

先生の支援

- ・「そうね、今はまだ話せないけど、赤ちゃんじゃなくて皆と同じ4歳よ」、「話せるようになるまで少し時間がかかっているの」、「話せないけど先生たちがHちゃんの気持ちを知らせてあげるね」、「背の高い人や低い人がいるように、話せるようになるまでに時間のかかる人もいるの」など、対応する。
- ・「Hちゃんも楽しいね」と楽しさやその表現の仕方を言葉で伝えて知らせる。

他の幼児たちは、H児が言葉を発しなかったり異なる動きをしたりする姿からなんだか自分とは違うと思いはじめます。不思議に思う幼児の気持ちを受け止めながら、人それぞれが異なっていてよいことを伝えます。また、楽しさや嬉しさの表現の仕方も様々でよいことを知らせます。このことは、H児だけのことではなくクラスの幼児一人一人に違いがあり、違っているからこそ個性を大事にしていきたい先生の姿勢を伝えていきます。

<H児が友達の遊びの場に加わるために>

H児の姿

- ① H児はX児が積み木でタワーを作る遊びに興味をもち、タワーを崩す。X児が「やめて」と怒る。補助者が「ごめんね。Hちゃんもやりたいて」と言う。X児が再度積んで

先生の支援

- ① 友達と関わるよい機会として、様子を見守る。
 - ・ 積むことを楽しみたいX児と崩すことを楽しみたいH児とで、楽しみ方が異なる。H児に相手が嫌な気持ち

いくとH児もまた同じように崩そうとするため、補助者が止めようとする。X児はH児を叩き、「もう、やめてよ」と怒る。補助者がH児に対して「Xちゃん崩されるの嫌なんだって」と言う。

- ② 積み木で電車を作って遊んでいる幼児たちの場にH児が入ろうとする。Y児に「入っちゃだめ」と言われる。補助者が「どうして」と聞く。「入れないから（狭いから）」と答える。補助者は「そうか」と答える。

・H児の座る場所ができたことで、「いいよ」と受け入れてもらえる。

- ③ H児が友達の遊びに興味をもち近くで見ている。また、ときには人にぶつかったりすることもあり、補助者と一緒に、遊びや人との関わりに必要な言葉を知っていく。

であることを知らせる。

- ・「Hちゃんも自分で積んでみる」と隣で同じことをして遊ぶことを提案する。

- ② 「そうか」とY児の思いを受け止めつつ、積み木を増やして場所を広げてH児が座れるようにする。

「ここに座るようにすればHちゃん入れてもらえる」と交渉する。

- ③ H児に「入れてって言ってみよう」と声を掛け、補助者が「入れて、Hちゃん入れてもらえるかしら」と仲立ちをする。

また、「ぶつかったからごめんね、だね」とH児に必要な言葉を知らせて一緒に言う。

6月頃になると2～3人の幼児たちで場をつくって遊ぶようになります。H児も周りの友達の遊びに興味をもつようになります。しかし、H児は相手の思いを察することや「やめて」と言われても動きを止めることができません。そのため、先生がH児に代わって遊びに必要な言葉「入れて」、「貸して」、「ありがとう」を言って仲立ちをしたり、「後でだって」、「今使っているみたい」など幼児たちの思いを端的にH児に知らせたりしながら他の幼児と関わる機会をつくっていきます。

<1学期末になるとクラスの一員として受け止められるように>

H児の姿

- ① 補助者の支援があると「貸して」が言えるようになり、物を媒介に少しずつ友達との関わりがもてるようになる。また、友達と同じ場で、補助者を仲立ちに友達と同じ物に関わりながら短時間一緒に過ごすようになる。
- ② H児と補助者との遊びに興味をもったZ児が、H児と同じことをしながら関わりをもつようになる。
- ③ クラス活動でのリズム遊びの際に、歓声を上げながら体を動かして遊ぶことを楽しんでいる。

先生の支援

- ① 友達と同じ場で過ごす中で、互いの思いを言葉で伝えて仲立ちをする。
- ② H児を支援しながら、周りの幼児との関わりや同じ動きをする楽しさを感じられるようにする。
- ③ リズム遊びの楽しさを受け止め、共感していく。

一緒に生活していく中で、他の幼児は自分とはどこか違うと感じながらも、H児の特性が何となく分かってくるようになると、補助者の見守りや仲立ちによって、友達と同じ場で過ごすことができるようになっていきます。また、幼児が皆でリズム遊びをするときには、歓声を上げながら体を動かす行為がH児の楽しみ方であることを受け止められるようになってきます。

<できたり、できなかつたりすることがある>

H児の姿

- ・身の回りのことを自分でやろうとすることやできることが増えていく。その一方で、身の回りのことや弁当の片付けなど全てを嫌がる日もある。

先生の支援

- ・その日、そのときの姿を受け止めながら、「〇〇するよ」と声を掛けたり、「今日は先生がしておくからね」と手伝ったりする。

・参観では、前半の集会には参加できるが、後半の遊びの時間には参加できない。更に「おやつを食べるよ」と会食に誘うと一度は戻るが、おやつを見て離席する。

・いつもと違う雰囲気では、活動が切り替わるときに誘うが、無理強いをせずにH児の思いに寄り添う。

H児は、朝の家庭での出来事や登園途中の出来事、体調など、きっかけは様々であるがちょっとしたことをきっかけに、朝、保護者と離れたがらずぐずったり、自分でできることをやろうとしなかったりするなど、日頃できていることでも崩れてしまうことがあります。登園時に保護者からその要因を聞いたり、受け入れ方を考えたりしていきます。いつもは自分ですることでも、先生や補助者が代わりに行うなどをして、H児の気持ちを受け止め、気持ちが切り替わることを支えるようにします。また、いつもと違う雰囲気の行事や会場などに対応することが難しいので、H児の思いに寄り添いながら、活動の切り替え時などに誘うようにしています。

<3学期 友達との関わりを通して>

H児の姿

・年長組から誕生会の引継ぎを行う。
「Hちゃん誘ってあげて」とY児に補助者が声を掛ける。Y児に「Hちゃん行くよ」と背中をポンポンと合図され、一緒に前に出る。司会用の積み木に乗る際にも「ここ」と教えてもらって並ぶ。
・同じ係の友達の後に付いて自席に戻る。

先生の支援

・H児に直接働き掛けるのではなく、「Hちゃん誘ってあげて」と友達の間わりによって行動を促す。
・同じ係の幼児にはH児に関心を寄せてもらう。
・戻ってきたときに「Hちゃんもできたね」と褒めるとともに「Yちゃんありがとう」と声を掛ける。

H児への支援について、友達を介してもできるようになってきます。そのきっかけを先生が周りの幼児に気付かせたり知らせたりすることが大切です。その行為は、障害の有無にかかわらず、困っている友達や自分の順番などを忘れていた友達に声を掛

けることと同じで、人への関心や思いやりの気持ちにつながっていきます。

<H児ちゃんキラキラしているものが好きだよね>

H児の姿

- ・冠を作っている友達に関心をもったH児に「H児ちゃんキラキラしているものが好きだよね」とZ児が言う。
- ・先生がキラキラする材料を出すとH児も冠を補助者と作り、キラキラを貼る。
- ・Z児が「H児ちゃんもお城ごっこに入る？」と誘い、友達と同じ場で遊ぶ。

先生の支援

- ・キラキラしているものとして、大きめのスパンコールやシールなどを提示する。
- ・冠は補助者が主となって作り、キラキラを貼ることをH児が楽しめるようにする。
- ・同じものを身に着けることで友達とのつながりがもてるようにする。

H児の好きなこと、興味や関心のあることなどについて、クラスの他の幼児が分かるようになっていきます。H児の興味や関心のあること、遊具などの物をきっかけに、先生が環境を用意することで、友達と一緒に遊ぶようになってきました。

<5歳時のリレーを通して>

H児の姿

- ・クラスの円周リレーに初めて参加する。走順を確認したり、並んだり、ビブスを着けたりする時間には参加せず、直前に列に入る。
- ・リングバトンを受け取り、補助者が伴走し、トラック内に入りながら一周する。
- ・その次の回では、H児は3走目に走る。担任はトラック内、補助者は前

先生の支援

- ・活動の環境が整った段階で参加を促して、気持ちが途切れないようにする。
- ・トラックは白線だけでは走るコースを区別しにくいいため、皆にとっても分かりやすくなるように小さいコーンを置く。また、一緒に走り、走る範囲を知らせる。

方で一緒に走り、「頑張れ」と声を掛ける。チームの友達が「頑張れ」と応援する。

- ・リレーでは、H児のチームの負けが続く。次回に向けた走順決めで、「Hちゃんの番までに差をつけておくといい」という意見が出る。結果は後半の幼児が力を抜いて負けたため、担任が一生懸命走るということについて話す。
- ・運動会の走順決めでは、「Hちゃんの後で、僕やMちゃんが速いから追い上げるよ」、「それがいいね」と追い上げる作戦に決まる。「Hちゃんいるから負ける気がする」と言うN児の発言を受け、先生が「Hちゃん、走るのが得意ではないから、抜かされて嫌だなんていう気持ちはわかるよ」と、これまでの負け続きの経験を振り返る機会にする。N児「でもHちゃん仲間だから」、O児「同じ〇〇組だから」、P児「〇〇組の一員なんだよね」と言う。
- ・運動会当日はH児の着たい洋服ではないことや会場の雰囲気になじめず、参加できない。
- ・運動会后、「この前はHちゃんがいなかったから勝てたんだよ。Hちゃん

- ・負けが続くチーム内の幼児の気持ちを受け止めつつも、一人一人がH児と一緒に頑張ろうとする気持ちをもってほしいことを伝える。

- ・気持ちが落ち着くのを待ったり、リングバトンを見せて誘ったりするが、保護者と共に参加の難しさを感じる。

がいたら負けちゃうよ」と言う幼児に対して「Hちゃんがいても勝てるかもしれないよ」と言う幼児がいる。そこで、リレーを試してみるようになった。リレーの結果は同着となる。H児の走りが早くなり、「Hちゃん頑張ったね」、「Hちゃんがいても勝てるって言っていたとおりでっ」と喜んだり、自分の追い上げで勝てたと自信につながったりした幼児がいる。

- ・ H児の頑張りを喜び、同着ゴールの嬉しさを共感する。

幼児同士が話し合う時間は、言葉でのやり取りが苦手なH児は参加が難しいようです。また、準備に時間を要する場合も、参加する時間まで気持ちが続かなくなるようです。そのため、他の幼児で先に準備を進め、ある程度準備が整ってからH児は参加するようにしました。

H児の入るチームは負けることが多くありました。そのチームの幼児たちの負ける悔しさを受け止めながらも、一人一人が一生懸命走ることや互いの走力を補い合って頑張ることを経験してほしいと思い、先生は幼児に声を掛けました。一つのことを成し遂げた嬉しさなどを幼児同士が共感し合える経験の積み重ねが、幼児同士の心のつながりを深めていきます。

<H児が園で楽しそうよかった>

H児の姿

- ・ 5歳児の表現活動では、カニの役で「さるかにがっせん」の劇に参加する。
- ・ 保護者や兄姉が参観する。
- ・ H児の兄が帰り際に「Hちゃん、楽

先生の支援

- ・ 参加する役をH児と決め、同じ役の幼児との仲立ちをしたり、参加する時間まで気持ちをつないだりする。
- ・ 兄なりにH児が園でどうしているのか心配していた様子。兄の思いを受

しそう。よかった」と言って帰る。

け止め、H児の成長した姿を共に喜ぶ。

H児の兄は、家族としてのつながりや喜びを感じながらも、生活のしづらさや周りからの視線を感じているのかもしれませんが。H児が園で皆と一緒に楽しく生活できることは、家族にとっても安心感や喜びにつながっていきます。

H児と他の幼児との関わりを振り返り、担任は次のように感じました。

《H児の姿を通して》

- ・友達や先生をモデルとして刺激を受け、興味や関心を広げたり、やってみようとする機会やできるようになったりすることが増えていった。
- ・様々な人との関わりを通して、支援を受けながら、遊びや生活に必要な言葉を知ったり獲得したりして、気持ちが伝わり合う嬉しさを感じるようになった。
- ・友達との遊びやクラスの活動に部分的に参加することを通して、自分が受け止めてもらえる嬉しさや皆と一緒に活動する楽しさを感じるようになった。
- ・友達から刺激を受けたり繰り返したりすることで自立に向けた基本的な生活習慣が身に付いてきた。

《他の幼児の姿を通して》

- ・どこか違う、何か違うと感じるその思いを先生が受け止め、H児の気持ちやよさを伝えることで、一人一人に違いがあることや、違いがあつてよいことを幼児なりに理解していった。

事例から読み取れること

集団生活の中で幼児の行う活動は、個人での活動、グループでの活動、クラス全体での活動など多様な形態で展開されることが必要です。特に、幼児教育においては、一人一人に応じることが大切にされていますが、このことは個人の活動のみを重視しているということではありません。グループやクラス全体などいずれの活動においても一人一人が活かされることが必要であることを意味しています。そのためには、集団が、障害の有無にかかわらず、一人一人の幼児にとって、安心して自己を発揮できる場になっていることが大切であり、先生と幼児、さらに、幼児同士の心のつながり

のある集団とならなければなりません。そのためには、以下のような配慮が大切です。

①入園当初は、障害のある幼児などが園で安心して過ごせるよう、保護者との分離の時期、先生と保護者の関係、環境の工夫などを考えます。

安心して園での生活を楽しみ、先生との信頼関係を基盤に他の幼児との関わりを深めていけるようにすることは、障害の有無にかかわらず、全ての幼児に必要な配慮です。しかし、障害のある幼児などは、新しい環境に慣れるのに時間を要したり、障害の状態等に応じて安心できる環境が異なったりします。入園当初に、保護者が当該幼児と一緒に過ごすかどうかは、当該幼児にとっては、周囲の環境の全てが見知らぬものとなるのか、自分がこれまで親しんできた存在があるのかという点で大きな違いがあります。当該幼児が親しみ信頼する保護者、当該幼児、先生が、遊びや生活を共にすることから始まり、当該幼児が先生との信頼関係を構築し、園での生活に慣れていけるようにします。また、登降園の際に毎日行うことは、絵の表示で分かりやすく示して生活の流れの見通しをもてるようにするなど、当該幼児の困難さに応じた環境の工夫も行う必要があります。

②障害のある幼児などの困難さに応じた支援の下、先生と一緒に遊びが楽しめるようにします。

障害のある幼児などの園での遊びや生活の様子を観察し、当該幼児の困難さに応じた支援について検討を行います。支援策について、最初は試行錯誤することでしょう。しかし、次第に、当該幼児がどのような場面で不安や不快に思うのか、どのような支援が有効であるのかが分かってきます。先生が、当該幼児との関わり方が分かってくるように、当該幼児も次第に園での遊びや生活に慣れてきます。

しかし、この時期はまだ他の幼児と積極的に関わることはできません。同じ場や空間を他の幼児と共有することで精一杯の時期なのかもしれません。他の幼児との直接的な関わりはなくとも、同じ場や同じ空間を共有することで、当該幼児と他の幼児の心の距離は縮まっていきます。そうして、当該幼児が他の幼児の楽しんでいる遊びに興味や関心をもったりするようになっていきます。

③先生を仲立ちとして他の幼児と関わっていけるようにします。

当該幼児は自分の気持ちを他の幼児にうまく伝えることが難しいようです。先生が、当該幼児の気持ちを他の幼児に伝えることで、物の貸し借り等から始まり、次第に他の幼児と共に遊ぶようになっていきます。

一方、他の幼児は、当該幼児の言動を見ていて、「Hちゃん、何かが違う」と感じたりするかもしれません。他の幼児だけでは気付きにくい当該幼児の思いや状況、伝わりにくい頑張っている姿などを先生が代弁することが大切です。そうすることで、他の幼児は当該幼児を理解し、ありのままに受け入れていくことができます。更に大切なことは、先生が当該幼児を、他の幼児と同様に尊重することです。できないことの多い当該幼児に対して、怒ってばかりいる、手伝ってあげるといった姿勢で先生が関わると、他の幼児もそのように接してしまうかもしれません。先生は、障害の有無にかかわらず、幼児一人一人を尊重し、受け止める姿勢が大切です。

④障害の有無にかかわらず幼児が育ち合える関係をつくれます。

当該幼児の困難さに応じた支援が、幼児同士の関わりの中で自然に取り入れられるようにします。先生が、当該幼児の気持ちや頑張っている姿を伝えてきたので、他の幼児も当該幼児と一緒に遊ぶときに絵カードを使ったりするなどの支援が、当たり前のこととして受け止めていけるようになるとよいでしょう。また、活動によっては、途中から参加したり、できないことがあったりするかもしれません。しかし、苦手なことや不得意なことがあるのはどの幼児も同じです。そして、当該幼児にも好きなことや得意なことがあります。それぞれの幼児のよさを生かし、学び合える関係づくりが大切です。

(第3章4. 障害の有無にかかわらず一人一人のよさを生かすクラス経営 27頁参照、第4章各項目の(4) 困難さに応じた支援を活用して園での遊びや生活を展開するにおける コラム参照)

事例8 先生の実践経験を考慮し、活発な協議ができる園内研修を考える

障害のある幼児などが、園での遊びや生活を通して成長していけることが大切であり、先生には、特別支援教育に関して学び、障害のある幼児などへの理解を深め、実践に生かしていく力が求められます。そのためには、園内研修等を通じて、障害のある幼児などの困難さに応じた支援について具体的に学び、自らの保育を振り返り、明日の保育に生かしていけるようになることが大切です。

【ポイント】

- 園の実態や課題を捉え、先生が必要な学びを得られる研修を計画しましょう。
 - ・園の実態や課題から研修内容を考えましょう。
 - ・年間の研修の計画を考えましょう。
- 記録を活用し、当該幼児の困難さや支援について具体的に協議しましょう。
 - ・具体的に協議する方法を考えましょう。
 - ・協議を深められる題材を考えましょう。
- 各先生の迷いや不安を受け止め、実践経験を生かした活発な協議としましょう。
 - ・各先生の思いや経験を生かした協議とする方法を考えましょう。
 - ・活発な協議とする方法を考えましょう。

ここでは、A園において、園の実態や課題を踏まえて年間の研修計画を作成し、先生同士の学びが深まるように協議を深めていった事例を示します。

①園内研修の年間計画を考える

A園には、4歳児クラスに障害のあるI児が在園しています。4歳児クラスの担任は先生になって2年目なので、I児にどのように対応したらよいのか戸惑っているようです。園全体でI児の支援について話し合うためには、障害に関する理解を先生一人一人が深めていく必要があります。

特別支援教育コーディネーターは、園内研修の第1回は、まず幼児理解の基本に立ち戻ることが大切だと考えました。幼児のできないことに目を向けるのではなく、なぜこのような言動をしたのかといった幼児の内面を推測することの大切さを再確認したいと思いました。そうすることで、幼児が何に困っているのか捉えようという意識

がより強くなるのではないかと思ったからです。そして、第2回以降は、障害のある幼児などの活動の様子を記録した資料を用いた事例検討を通じて、当該幼児の困難さや困難さに応じた支援について具体的に協議をしたいと考えました。この協議のテーマは、園の1年間の流れを踏まえ、次のように考えました。

- ・ 1学期の終わりに保育を振り返り、個別の教育支援計画や個別の指導計画に生かしたい。
 - ・ 2学期、3学期には運動会や生活発表会といった行事があるので、その前に、日々の保育における支援をこれらの行事に生かしていくことを考えたい。
 - ・ 3学期には、障害のある幼児などの困難さに応じた支援において、保護者の気持ちの揺れ動きに配慮した支援や保護者と当該幼児の育ちを共有すること、専門家の助言を得ながら支援を考えることの大切さについて、保護者や関係機関との連携も含めて、園長を中心にこれまでを振り返り、今後に向けて意見交換を行いたい。
- こうしたことを踏まえ、園内研修の年間計画の案を次のとおり作成しました。

◆令和〇年度 特別支援教育に関わる園内研修年間計画（案） A園

月	テーマ
4月	幼児一人一人を理解すること 以下について園長から話をした後に先生同士の協議 <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児の言動の奥に潜む思いを捉え、その思いを尊重した支援をする ・ 幼児を肯定的に受け止め、よさや好きなことを捉える
6月	障害のある幼児などの遊びや生活の記録の取り方 I児の園での活動の映像を見て、先生がそれぞれに記録を取り、次のことなどの話し合いを行う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ I児の印象に残った言動、気になる言動 ・ 気になる言動について、それはどのような状況で起こっているか 話し合いを通して、I児の困難さや支援の手立てを考えるために必要なことをしっかりと記録するためには、先生は日頃から何を意識する必要があるのかを考える。
8月	「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」の作成 1学期のI児の記録を持ち寄り、個別の教育支援計画や個別の指導計画について話し合う。
10月	日々の保育における支援の見直しと運動会に向けた支援の検討 特別支援学校（知的障害）から講師を招き、保育参観を通して見えてきたI児が感じているであろう困難さや支援の手立てについて講師から助言を得た後に、先生が感じている疑問や不安、考えている支援などについて意見交換をする。そして、運動会に向けた支援についても考える。

12月	日々の保育における支援の見直しと生活発表会に向けた支援の検討 I児の活動の映像を見て、I児が感じているであろう困難さや支援について話し合う。話し合いでは、I児の成長を踏まえた支援の見直しを意識するようにする。そして、生活発表会に向けた支援を考える。
1月	関係機関と連携し、園として障害のある幼児などと保護者を支援する体制の整備 関係機関との連携や専門家の助言を生かした保育や保護者支援について考える。さらに、これまでを振り返り、今後の支援の体制や内容について話し合う。

②園内研修を充実させる方策を考える

先生が障害のある幼児などへの支援について理解を深めていくには、各回の研修が充実し、先生同士の協議が活発であることが大切です。A園には、B先生（5歳児担任、経験年数15年目）、C先生（3歳児担任、経験年数6年目、特別支援教育コーディネーター）、D先生（I児の担任、経験年数2年目）がいます。特別支援教育コーディネーターであるC先生は、12月の園内研修では、経験豊富なB先生の知見、D先生が捉えるI児の成長の様子などについて共有したり協議を深めたりしたいと考えました。そのため、I児の遊びや生活の映像を視聴し、I児が抱える困難さや支援について具体的に協議することにしました。C先生は司会を務め、各先生の感じたことや考えたことを引き出せるように、参加した先生に質問したり、論点を整理したりすることを心掛けました。

日頃のI児の園での様子

I児（3年保育4歳児）は、活発で遊ぶことが大好きですが、友達といざこざになることが多いです。新しい環境や初めての活動に不安が大きく、参加しにくいところがある一方で関心があることには一生懸命取り組みます。周りの友達と一緒に遊ぶこともありますが、かっとなって手が出たりいざこざになったりして遊びから離れることがよくあります。人が多くざわざわした感じが苦手なようで、お弁当のときは、皆の用意ができてから保育室に入ります。担任はI児と信頼関係を築きつつありますが、行動はあまり変わらず、I児に関わることで全体の遊びの流れを止めてしまう難しさを感じています。

（映像1）10月、保育室

遊びの片付けが終わり、数人の幼児がトイレに行くために歩き出しました。その中のX児の手が立っていたI児の体に触れると、I児は黙ってX児のお腹のあ

たりを叩きました。

「Iちゃんが何もしていないのに叩いた」とX児が担任のところに伝えに行きました。担任はI児、X児と視線を合わせながら、何があったのか尋ねたり思いを聞き出したりしましたが、I児の表情は硬いままでした。

(映像2) 12月、遊戯室

生活発表会に向けた活動で、クラスの幼児たちは遊戯室でネコになって劇遊びをしていました。I児は遊戯室の隅で支援の先生と一緒にコマを回して遊んでいました。劇遊びで、ネコが海へ出かける場面になると、I児は立って皆が劇遊びをしているところに行き、素早い動きで走り回ります。Y児が「Iちゃん、やめて。危ない」と言いますが、I児は構わず走りながら友達にぶつかっていきました。

支援の先生がI児に「Iちゃんネコも海におでかけしたいのかな」と言いながら手を引き、ネコのお面を見せました。I児はお面を見てしばらく黙っていましたが、首を横に振ります。支援の先生が、「じゃあ、Iちゃんはもしかしてお魚さんかな？ ネコさんにつかまらないように、先生と一緒に静かに見ようか」と声を掛けると、支援の先生の手を握ってその場に座りました。Y児は「Iちゃんはお魚やから、泳いでたんやね」とI児の顔を覗き込みました。担任が「さあ、大きなお魚がいるみたいよ。ネコさんたち、船に乗ったかな。皆で出発！」と声を掛けると、幼児は船に乗り込み、口々に「出発だ!」、「大きな魚を探しに行こう」などと話しています。I児は支援の先生と一緒に座り、ネコたちが船に乗って出発するところを見ていました。

まずは、映像1について協議を行いました。

C先生：今日はビデオを見ながら、I児の支援について考えていきます。I児は、入園当初に比べ、友達と遊ぶなど成長がうかがえます。友達との関わりが増えてくると、いざこざも生じます。D先生、映像1を見てどうでしたか。

D先生：戸惑ったように立っているI児の表情から、ざわざわした感じが嫌ということが分かります。私は、I児は自分の前を人が横切ること嫌な気持ちになり、近くにいたX児につい手が出ってしまったと考えました。

C先生：確かにビデオからそのようにも見えますね。ではもう少し踏み込んで考えていきましょう。D先生はなぜそのように考えたのですか。また、ビデオを見て、改めて、I児にどのように関わったらよいと思いますか。

D先生：なぜと言われるとうまく言えませんが、I児は、自分から悪いことをしようとする意識はないと思います。それをどのように他の幼児に伝えていけばい

いのか悩みます。他の幼児も遊びに夢中だと気にならないようですが、何度もされると嫌なようで私のところに言いに来ます。私はつい I 児に謝るように促して、その場を収めてしまいがちです。どのように I 児の思いを理解し代弁するといいいのかを考える必要があると感じました。また、他の幼児が I 児の思いを受け止められるように普段から関わる必要がありますね。

B先生：他の幼児も含めて考えることは大切ですね。では、I 児が困っていることについて考えてみます。無意識に手が出てしまうなら、自分の衝動を抑えることが難しいのだと思います。目の前を人に横切られると、視界が遮られたように感じて不快になり、衝動的に叩いてしまったと考えてみます。この場合、このようなことが起こらないような指導を考えた方がよいと思います。

D先生：私は、何かあってから支援を考えるところがありました。人の流れを考え、I 児の周りで人が密集しないように環境を考えることも必要ですね。

C先生：I 児の困難を捉えると何らかの障害の特性に結びつくかもしれません。私たちは診断をする立場ではありませんが、発達障害について学ぶことも必要ですね。しかし、障害のある幼児などの困難さは一様ではないので、I 児の実態から困難さを捉える必要がありますね。

D先生：それが難しいです。支援についても、前にうまくいっても次もうまくいくわけではないのでいつも悩みます。B先生はどうしていますか。

B先生：私も悩みながらやっています。普段、私たちは気持ちを切り替えながら過ごしています。I 児は、気持ちの切り替えがうまくできないのだと思います。先生が、I 児に何かをするのをやめさせることに焦ること、保育の流れを優先して I 児の思いを結果として無視することにならないようにしたいですね。

C先生：B先生が考える支援について具体的に教えてください。

B先生：例えば、気持ちの切り替えがしやすいように、お弁当の時間が近づいたら、遊んでいる I 児に後 5 分でお弁当であることを伝えたりします。クールダウンのスペースを保育室の隅に用意し、不快な気持ちになって衝動的に叩いてしまったときには、一時的にそこに行って気持ちを落ち着かせる、「10、数えようね」、「深呼吸してみよう」等、気持ちをコントロールする方法を事前に一緒に考えて探っておき、不快そうな様子を示したときには、「I ちゃん、深呼吸！」と言って落ち着くよう促す、「気持ちカード」を用意してお

いて、今の気持ちをカードから選んで担任のところへ持っていき、担任に自分の気持ちを分かってもらうことで落ち着かせるなどの工夫をしています。I児が落ち着いた後で、叩かれた幼児の気持ちも伝えるようにしています。そして、「お友達の後ろに並べたね」、「最後まで座ってお話聞けたね」、「一番でなかったのに怒らなかったね」など、できたことをほめてI児に行動の規範を示します。してはいけない言動には、短い言葉で区切ってはっきりと伝えます。例えば、走っていて危ないなら「廊下は歩きます」、場に合わない大声で話していたら「1の大きさの声で話します」等です。できるだけダメといった否定的な表現を使わず、どうすればよいかについて具体的に分かりやすい指示を心掛けます。

C先生：同じ場にいる他の幼児が遊びを楽しめるように配慮しながら、I児の思いに共感して支援をすることが大切なのですね。そうするうちに、I児が他の幼児と同じ場にいることができるようになり、次第に他の幼児とも関わるようになって楽しいことを共有したりしていくのですね。

休憩をはさんで、映像2について協議を行いました。

C先生：2月の生活発表会に向けて、幼児は劇遊びなどをしています。D先生、映像2を見てどうでしたか。

D先生：I児はクラス全体の活動に参加しておらず、保育に入ってほしいと思います。

C先生：支援の先生は、今のI児の興味や関心を考えてコマ遊びをしていたのではないのでしょうか。しかし、隣で劇遊びをしていればI児も興味や関心をもつかもれないということも考えたのではないのでしょうか。

D先生：私はそこまで考えていなかったです。クラス全体の活動とI児の支援について、支援の先生ともっと話し合う必要がありますね。確かにその後、I児は走るという表現の仕方では危なかったですが、遊びに参加していましたね。

B先生：I児が走っていたのを、I児なりの表現で遊びに参加していたと捉えたことは素晴らしいと思います。走ることで、体で表現し楽しんでいたと考えられますね。無理に集団での遊びに誘うのではなく、I児の気持ちが向くのを待つのも大切です。

D先生：ほめていただいて嬉しいです。幼児をほめることの大切さを再確認しました。

- B先生：遊戯室でのコマ遊びにも意味があると思います。遊戯室の隅で、大好きな先生と好きなコマ遊びをして楽しく安定した気持ちで過ごします。I児は、遊戯室が楽しい場であると感じています。これから生活発表会に向けて遊戯室で活動するのに、遊戯室は楽しいことが起こる場であると思うことは大切です。この日、コマ遊びをして楽しい気持ちのまま、皆の劇遊びに自分から入っていったのだと思います。
- C先生：しかし、周りの幼児からは「危ないからやめて」と声が上がっていました。この場面は、先生の支援についてどう考えていけばよいでしょうか。
- D先生：私なら、I児の行動を止めるために「危ないから止まろうね」と声掛けしたと思います。しかし、映像1の協議で、否定的な言葉ではなく、分かりやすく具体的な指示が大切とB先生がおっしゃっていました。支援の先生はどう考えていたのでしょうか。
- B先生：「Iちゃんネコもおでかけしたいのかな」と声掛けすることで、I児の劇遊びに参加したいという気持ちを大切にしたのだと思います。そして、小道具の面をすかさず出したのだと思います。
- C先生：先生のこの一言をきっかけに、他の幼児は、I児を危険なことをする子ではなく、魚役で劇遊びを楽しんでいる仲間として受け止めたように見えました。
- B先生：I児の走りたい衝動を無理に抑制するのではなく、気持ちの切り替えができるスイッチのような言葉掛けが有効なのではと思いました。私の想像ですが、支援の先生に「Iちゃんネコ」と呼び掛けられて、「ネコ？ 違う、ネコじゃない」と考えて、首を横に振っています。他の幼児も、「ネコになってたの？ それとも魚？」等といつのまにかI児の立場で考えていたのだと思います。
- C先生：「静かに座りなさい」と言わなくても、「先生と一緒にネコさんにつかまらないように見ておこうか」と言われると、「(自分はお魚だから)ネコに見つかって食べられないようにしないと」と思ったのかもしれないね。
- B先生：I児は、お話の世界でイメージを広げて楽しく遊ぶことがやや難しいのかもしれない。常に支援がうまくいくとは限りませんが、今日のような体験を積み重ね、イメージを広げる楽しさを味わってほしいと思います。
- C先生：劇遊びのお面や船などのように、遊びたくなるような具体物があるとイメージがしやすくなるのかもしれないね。

D先生：行事があると、クラスでの遊びを進めていきたいと、つい焦ってしまいがちですが、I児だけでなく、クラスの幼児一人一人の思いを受け止めてクラス活動を展開するにはどうしたらよいか、改めて考えていきたいです。

C先生：I児の困難さに応じた支援、I児を含めた全ての幼児が育ち合える関係づくりについて考えていきたいですね。保育にも支援にも正解やマニュアルはありません。今日の研修の学びを実践に生かし、次回の園内委員会で報告するようにしましょう。

事例から読み取れること

A園の事例を踏まえて、園内研修を企画・立案し、実施する上で大切にしたいことをまとめます。

○園の実態や課題を捉え、先生が必要な学びを得られる研修を計画します。

・園の実態や課題から研修内容を考えます。

先生の経験年数や保育における課題などを踏まえた研修の計画が大切です。研修内容は、基礎的環境整備と合理的配慮、障害のある幼児などの困難さに応じた支援、個別の指導計画、クラス経営、保護者の気持ちに寄り添った支援、関係機関との連携など、多様な内容が考えられます。1年間で全ての内容を深めていくことは困難です。今抱えている園や先生の課題などから、特別支援教育に関することを一通り取り上げるのか、特定のテーマに焦点を当てて年間計画を作成するのかなどを考える必要があります。研修として取り上げてほしいことを園の先生にアンケートをすることも考えられます。園に経験年数の長い先生がいるのか、障害のある幼児などを担任した経験のある先生はいるのか、経験年数の短い先生はいるのか、幼稚園教諭の教員免許状や保育士の資格を有しない者がいるのかなど、研修参加者の保育や特別支援教育に関する知識や経験を考慮して、今学んでほしいことから研修計画を考えることもあるでしょう。

・年間の研修の計画を考えます。

研修を通して、先生が学びを深めていけるよう1年間の研修計画を考えることが大切です。例えば、第1回では、障害に関する知識を得たいので、専門家から障害に応

じた困難さや支援の手立てに関する話を聞き、第2回では、在園する障害のある幼児などの困難さや支援について考えるなど、先生に何を学んでほしいのかを考えて、研修の目的を設定し、その目的に応じた研修内容を考えます。なお、外部から専門家を招く場合、障害のある幼児などの遊びや生活の様子が専門家に伝わるように、保育参観に加えて日々の記録などを準備することなどが考えられます（事例4参照）。

そして、園内研修の年間計画が毎年同じでは意味がありません。過去の園内研修、参加する先生の保育経験や参加した研修、園や先生が抱えている課題等を踏まえて、年々、研修を通した学びが深まるようにすることが大切です。障害のある幼児などが在籍していないから特別支援教育に関する研修は不要とするのではなく、いつでも障害のある幼児などを受け入れることができるように研修を通じて学び続ける姿勢が大切です。そうした姿勢が、在籍している幼児の抱える困難さに関する早期発見・早期支援にもつながります。

○記録を活用し、当該幼児の困難さや支援について具体的に協議します。

・具体的に協議する方法を考えます。

映像などの記録を活用した事例研究は、具体性をもって障害のある幼児などの支援について理解を深めることができます。「困難さに応じた支援」と言われても、具体的にどう行えばよいか分からないと思う先生もいます。研修参加者全員で同じ映像を見ながら協議することで、当該幼児の気持ち、抱えている困難さ、支援について具体的に話し合うことができます。さらに、自身の保育について映像を通して振り返ることで、そのときの当該幼児の表情や言動、周囲の幼児の反応などについて改めて考えることができます。その遊びの場面で行った先生の対応について、他の先生から具体的な意見や助言も出てきます。他の先生の当該幼児の気持ちの捉えについて、巻き戻して再生することで確認することもできます。そうして、協議を深めていく中で、一人では気付けなかった新たな気付きも生まれてきます。また、他の園や先生の過去の保育における事例研究を扱うことも考えられます。他の幼児の遊びや生活の様子を見ることで、困難さの多様性を知るとともに、支援のヒントを得ることができるかもしれません。

・協議を深められる題材を考えます。

事例研究では、どのような場面の記録を対象とするのかが大切です。A園の園内研修では、短時間で視聴できる映像を2つ選んでいます。映像1は、当該幼児が自身の衝動を抑えられず他の幼児を叩いてしまった事例です。この事例を通して、I児の気持ちや困難さの要因について理解を深めていけるように協議をしています。そして、そのような状況をつくらない、ダメなどの否定的な言葉掛けをしない、当該幼児の気持ちを他の幼児に伝えることなどを確認しています。映像2は、映像1で確認した支援を実践していると考えられます。映像1で確認した支援策について、映像2を見て、経験豊富な先生の解説なども聞くことで、どのように支援をしていけばよいのかについて、経験年数の短い先生も具体的にイメージしながら考えることができるのではないのでしょうか。

○各先生の迷いや不安を受け止め、実践経験を生かした活発な協議とします。

・各先生の思いや経験を生かした協議とする方法を考えます。

経験年数の短い先生は、幼児の捉えや指導に自信がもてないことがあります。障害のある幼児などとなれば、一層迷いや不安があるかもしれません。経験年数の短い先生が、研修においてそうした思いを述べられるよう、共感を示しながら話しやすい雰囲気をつくるのが大切です。そうすることで、経験年数の長い先生は、経験年数の短い先生が何に困っているのか知ることができ、適切な意見や助言が可能となります。何を話しても大丈夫と考えた経験年数の短い先生の質問から、協議が発展し、経験年数の長い先生も自身の保育を見直すきっかけとなるかもしれません。A園の研修において、D先生の質問に答えて、B先生が自身の経験を踏まえながらI児の具体的な支援について話すとき、明日からの保育に生かせる具体的な助言だけではなく、悩んでいるのは自分だけではないことも知ってほしいと思っていたのではないのでしょうか。

・活発な協議とする方法を考える

話しやすい雰囲気の中で協議を深めていくためには、司会者のファシリテートが大切です。特別支援教育に関する知識を基に、各先生の経験を考えて質問をしたり、論点整理をしたりして、協議を深められるようにします。

A園の研修では、映像視聴後の感想は、経験年数の短いD先生に最初に求めています。

す。D先生が何に気付き、何を疑問に思ったのかを聞きます。必要に応じて、B先生の経験を話してもらい、I児の気持ちや困難さ、支援を考えるヒントとしていきます。B先生は、自分が考えたI児の気持ちなどについて全部話すのではなく、途中で止めることで、他の先生が考えることを促しているようにも見えます。また、C先生が、研修の目的を意識しながら、自身の特別支援教育に関する知識を活用し、協議の内容を整理したり言い換えたりしながら視点を示しています。

様々な経験をもつ先生がそれぞれの役割をもって研修に前向きに取り組むことで、保育のモチベーションを高め、先生の資質能力の向上につながるようにしましょう。

(第5章1. 体制整備の必要性 128頁参照、第5章3. 先生の理解推進と専門性の向上 140頁参照)

事例9 園が療育機関での助言を生かしながら障害のある幼児などの育ちを考える

幼児は生活する場所によって異なる姿を示すことも少なくありません。園と療育機関で見立てが違ってくる場合もあります。情報ばかり集めすぎて混乱したり、専門機関からの意見ばかりを参考に障害のある幼児などに関わったりなど、園で過ごす障害のある幼児などの姿を抜きにした関わり方をしてしまうことはないでしょうか。個人的な関わりや少人数での関わりが多い療育機関での姿と大勢の同年齢の子どもたちの中での姿に違いがあって当然です。互いに見学し合ったり、意見交換し合ったりして情報共有をしながら総合的に障害のある幼児などの理解につなげていきます。

【ポイント】

- 障害のある幼児などの実態と園での生活の様子、療育機関での様子や支援策について具体的に話し合しましょう。
- ・園での当該幼児の遊びや生活の様子、困っていることを具体的に伝えるようにしましょう。
- ・療育機関における支援策や支援策の意図について聞き、当該幼児の支援策を考えるヒントとしましょう。
- 療育機関からの助言を園での生活に生かしましょう。
- ・療育機関と園で一貫した支援策を講じることは大切です。療育機関からの助言を取り入れるようにしましょう。
- ・園では他の幼児も共に生活しているなどの環境の違いから、療育機関と同じ効果があるとは限りません。その場合には、園での当該幼児の生活する様子から支援策を見直しましょう。

危険な行動が多い4歳児女児（J児）の事例から（3歳児から療育機関と併用）

家庭での行動面においても高所に登る、道路に飛び出す、家の鍵を開けて出歩き保護されるなど危険な場面があったそうです。保護者が行政の相談窓口相談し、入園の少し前から療育機関に通っていました。園では興味や関心の向くまま突発的な行動も多く、安全上の心配や認知面の幼さなどがあり、J児の特性の理解やどのように園生活をしていくのかなど、3歳児のときから療育機関との連携を深めてきました。保

護者の同意を得た上で、療育訓練や園の様子を相互に見学し、保育をする中で悩んだときには電話で相談し、年間を通してこまめに療育機関と連携を取り園での成長を考えていきました。

<園での関わり>

<園での姿> 4月

進級当初、新しい保育室にいられず、職員室で過ごすことが多くなった。職員室なら安心して過ごせるようなので、しばらく見守ることにした。

アドバイスをもとに園での対応を考える

<園での姿> 5月

J児の不安な気持ちを理解し、J児が今どこにいるのかなど居場所を互いに知らせ合うようにし、「お部屋に戻ろう」、「今は何をする時間かな」などの問い掛けはせず、J児がいたい場所でやりたいことができるようにした。6月になるとクラスにいられる時間が長くなってきた。

<療育機関での関わり>

園の様子を電話で相談

<療育機関からのアドバイス>

新しい部屋にいられず職員室で過ごすことが多かった姿については、4月当初の新入園児のざわつきや新しい保育室等の様々な周囲の変化を敏感に感じ取る特性によるのではないか。新しい環境を受け入れられるようJ児の気持ちに寄り添うよう心掛けるとよいのではないか。

療育機関での様子を見学

<療育機関での姿>

生活のこと、遊びの準備など、写真や絵カードで視覚的な指示を行っていた。それらを一つずつロールプレイングで行っていた。次に

園でも療育機関でしていることを取り入れる

<園での姿> 6月

朝の支度など、身の回りのことを絵カードで提示し一つ一つ行うロールプレイングを試みたが興味が持続しなかった。園の中では、折り紙や塗り絵、積み木や粘土、おままごとなど他に刺激を受けやすい環境があり、興味や関心が遊びに向いてしまうようだった。

園ならではの方法を考える

クラスの遊びの中で忍者ごっこを楽しんでいたため、朝の準備も遊び感覚でできたらと考え「忍者に変身しよう」と絵で示し、準備や着替えができたら一つ一つ塗り絵を塗っていくことにした。身辺整理を行えば塗り絵が完成する楽しさもあり、準備の手順や回数が見通しにもつながったようだ。1月には朝の身辺整理は自分で行えるようになった。

行く教室や使う遊具などもカードで示してあり、自分から進んで行動していた。

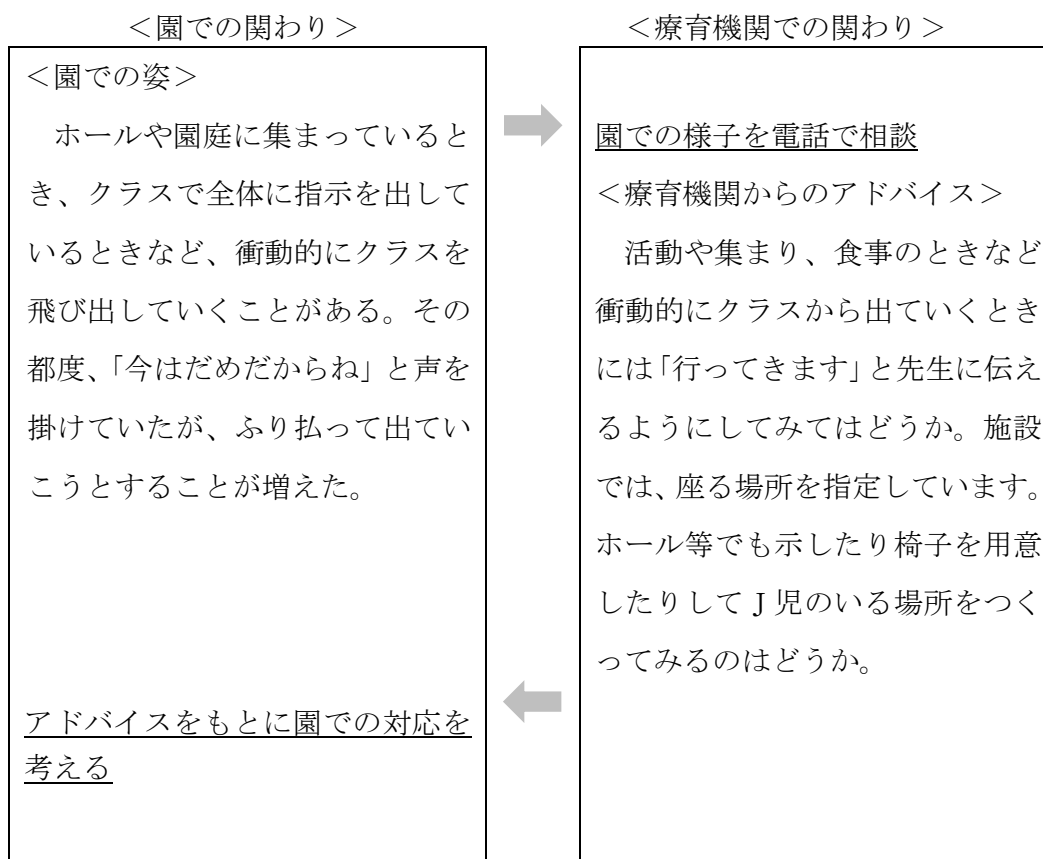
園での様子を参観

<療育機関の方の感想>

園では、大勢の友達の中で「忍者」に変身することを楽しんでいました。基本的な生活習慣について、療育機関ではロールプレイングで行っていたが、園の中で遊びの一環として楽しみながら身辺整理していくということは意外だった。

療育機関と園のお互いの参観から

療育機関では、室内は余計なものがなく、整然としていて、J児の気が散ることなく先生の話を受ける環境でした。また、やることや場所などが写真や時系列で示されているので、今、どこにいるのか、何をする時間なのか明確になっていると感じました。一方、園では、いろいろな遊具が同じ室内に置いてあったり、遊んでいる幼児がいたりして、J児にとっては情報が多い環境であることを改めて感じました。療育機関からのアドバイスをもとに、園の中でできることをしてきましたが、ロールプレイングに関しては園の中ではあまり効果がなかったため、園で楽しんでいる遊びを取り入れることにしました。そのことで、同じクラスの友達も一緒に楽しみながら身辺整理ができるようになってきました。療育機関の方の参観では、園の遊びを取り入れた支援が意外ではあったものの、周りの友達と一緒にだからこそ、できることもあるのだろうという話になりました。また、一つ終わったら一つ絵を塗ることができるという分かりやすさもJ児にはよかったのかもしれないという話も出ました。園では今後、周りの友達との関わりも含め、支援を考えていくようにしました。



<園での姿>

ホール等に集まっているときでも、「行ってきます」の約束をして出かければ、よいことにした。少しずつ「行ってきます」の意思表示ができるようになってきた。J児がクラスから出て来たときには「先生に行ってきますって言ってきたかな」など確認するようにして「行ってきます」が伝えられるように園全体で共有した。

園でのその後の姿

どこに行きたいのか、尋ねたり、写真で示せたりするようになった。「〇〇に行ってよいですか」と聞くようにもなってきた。伝えることで自分が今何をしたいのか冷静に考え、動く経験ができてきたと感じている。

療育機関での様子を見学

<療育機関での姿>

療育機関では、J児以外の幼児も、教室から出ていく際には、「〇〇に行ってきます」という写真カードを用いてどこに行くのか、自分で示せるような工夫がされていた。言葉でなくても意思を伝えることができる環境が当たり前準備されているので、幼児が困らないで意思表示できていた。

J児のできるようになったことをクラスの他の幼児と共有する

皆でいるときに別な場所に行こうとする際、「5の針になったら行こうか」などと促すと、少しずつ我慢もできるようになってきた。職員室で過ごしている際も、「今読んでいる絵本が終わったら戻ろうか」、「6の針になったらクラスに戻れるかな」などいつ戻るのか自分で決め、目安がもてるようにすることで、クラスに戻ることがイメージできてきた。クラスの友達から「Jちゃんは、こうすると待てるんだよね」と受け入れてもらったり、クラスの友達から声を掛けてもらったりする中で、クラスで過ごしたいという思いが少しずつでてきた。

J児にもクラスでの役割をもたせることで

クラスで連絡ノートなど配る際に、友達に配る役割をJ児にお願いした。友達のマークや名前を覚えたり、クラスの一員として役に立つ喜びや、友達から求められる嬉しさを感じたりできた。クラスの幼児たちがJ児と関わる姿も多くなった。劇ごっこに参加し、友達と一緒にセリフを言ったり、出番まで友達が準備した椅子に座って待ったりできた。友達への関心が深まり、2月頃にはごっこ遊びや少人数でのやり取りを楽しめるようになった。

事例から読み取れること

○療育機関の助言から幼児理解を深めます。

療育機関とこまめに情報交換をしてきたことで、園で困ったと感じる行動に対しての理解が深まります。園で先生が困ったと考えてしまう行動でも、その背景にはJ児なりの行動の特性や本人の困難さがあり、それらを理解し関わり方を変えてみることで、J児への理解が深まります。そして、それらを園全体で共有することで、J児にとって安心できる環境をつくることができました。

○療育機関の見学をもとに園内で支援の方法を考えます。

療育機関の環境を実際に見ることで、療育機関の方のアドバイスがより分かるようになります。また、園の中でできそうなことを考える手掛かりにもなります。療育機関では、写真やカードを用いて視覚的に分かりやすく、必要な情報しか入らないような室内の環境がJ児にとっては分かりやすいのだろうということが実際に見学したことでよりイメージしやすくなっています。園では、他の幼児が興味や関心に応じて遊べるように様々な遊具や用具を置いておくことも必要であり、全てが療育機関と同じようにはできません。しかし、写真やカードを使うことで、言葉でなくても互いに意思を理解することができたり、自分がどこにいるのか把握できたりするので、他の幼児にとっても分かりやすい環境として取り入れることにしました。

○園での様子から次の支援の方向を考えます（参観してもらったことで）。

身支度などのロールプレイングは、園ではあまり効果がありませんでしたが、遊びを取り入れた方法がJ児にとっては意欲的にでき、その様子を見てもらったことで、大勢の幼児の中でのJ児の育ちが共有できました。その後のJ児への支援について意

見交換の場面では、クラスの幼児とJ児との関係を大切にしながら支援することが話題になりました。また、具体的な支援の方法について、園の様子をイメージして話し合えるようになりました。

療育機関からの助言の園生活への生かし方について、大切なことをまとめます。

①療育機関での支援の方法を知り、園での障害のある幼児などの困難さや指導上の工夫などを考えます。

- ・療育機関からの情報提供や支援策を知ることで、障害のある幼児などの発達 の程度などを把握しましょう。療育機関ではどのような療育が行われているのかを知ることが大切です。また、園内で指導内容や指導方法の工夫など情報共有も大切です。今はどのような支援を模索しているのかなど園内で共有しましょう。
- ・園では個別に療育を行うことは難しいですが、状況に応じた支援を知っていることで、障害のある幼児などの困っていることを知り、指導に生かすことができます。また、障害のある幼児などは行動面や発語、言葉の理解や人間関係、考え方や喜怒哀楽の成長が複雑な場合が多く、当該幼児が一番困っているのではないのでしょうか。療育機関からの情報提供や支援策を理解することで、苦手なことや得意なこと、発達の状況なども知っておくことが大切です。当該幼児の特性を理解し、園での支援策や指導上の工夫を積み重ねていくことが重要です。

②療育機関からの助言を生かしながら、園での実態に合わせ支援策を見直します。

- ・療育機関と園では環境などが違い、療育機関からの助言どおりにはいかない場合もありますが、療育機関だからできること、園だからできることと分けて考えるのではなく、障害のある幼児などの困っていることを理解し、園の環境の中で療育機関からの助言を生かし支援策を考えていくことが大切です。また、園の生活の中で当該幼児に応じた支援ができたことなど、当該幼児の成長や園での支援策などを療育機関と共有できれば、互いに当該幼児の理解が深まります。療育機関の専門性や幼児教育の機能を十分に生かし、長期的な視点で幼児への教育的支援を行いましょう。(第5章5. 専門機関との連携 144頁参照)

コラム

障害のある幼児などが通う療育センターへの訪問を通して園の先生が感じたこと

園は、家庭、地域及び医療や福祉、保健等の業務を行う機関と連携を図り、個別の教育支援計画を作成します。療育機関等でも、個別の支援計画などを作成し、その支援方針を踏まえて日々の生活を展開しています。障害のある幼児などが園以外の場でどのような生活を送っているのかを知ることにより、当該幼児の生活の流れを踏まえた上で、園での生活を考えることができます。また、療育機関等と連携した支援策を考えるに当たっても有益な情報となり得ます。そして、連携に当たっては相互理解が大切です。園に関して理解を求めるだけでなく、療育機関の役割や活動についても理解するように心掛けることが大切です。

ここでは、参考に、園の先生が療育機関を訪問した例を取り上げます。各施設や障害のある幼児などの実態によって活動は異なりますので、訪問や意見交換を通して理解を深めていきましょう。

この春に4歳児クラスに発達障害の疑いのある幼児が入園しました。この幼児は、3歳のときから療育センターに通っていたので、これまで療育センターでどのような生活をしてきたのかを知るために、園の先生で施設見学に行きました。

療育センターでは、発達障害の診断のある幼児が多く、支援のニーズも大きいクラスを見学しました。障害のある幼児など9名を3名で担任しています。障害のある幼児などは4時間程度を療育センターで過ごし、大まかな流れは以下のとおりです。

- 10:00 登園
- 10:10 朝の身支度・着替え・排泄^{せつ}・自由遊び
- 10:45 朝の集会
- 11:00 クラス活動
- 11:40 自由遊び
- 12:00 給食
- 12:30 歯磨きなど
- 13:00 クラス活動

13:15 自由遊び・着替え・排泄^{せつ}

13:40 帰りの集会・降園

部屋は、集団・自由遊び・個々に遊ぶスペースなどが障害のある幼児などに分かりやすく設定されています。写真やイラストを使ったスケジュール表、コミュニケーションに使えるカードなどが置かれており、障害のある幼児などの困難さに応じた工夫が部屋の中に多くありました。

朝の集会は、担任が各幼児の写真を示して名前を呼んだり、手遊びをしたりしています。あえて毎日同じことをすることで、安心して療育センターでの生活ができるようにしていました。クラスの幼児は認知的・発達的な状況が異なるので、グループを2つに分けて活動をしていました。あるグループはお店屋さんごっこです。お客さん役の幼児は、担任から提示されたカード（イラスト・言葉）にかかっている「もの」をお店役の幼児のところに持っていきます。そして、最後には、買った「もの」を使ってカレーを作ります。もう一つのグループは、ブロックや積み木で遊びます。このグループは、午後には話し合いながらゲームをしていました。これらの活動の中で、担任は、各幼児の困難さに応じた支援を随所で行っていました。このようなクラス活動に加え、幼児が自由に遊ぶことができる時間、一人一人の幼児に応じた個別的な指導の時間もありました。個別的な指導の時間が充実しているからこそ、他の幼児と関わるクラス活動もできるのだと感じました。そして、自由に遊べる時間があるから、他の時間で集中することができるのかもしれないと感じました。

幼児が帰った後に、支援方針などについて意見交換をしました。療育センターでは、大きなビジョンとして「サービス等利用計画書」を作成し、その計画に基づき「個別支援計画」を作成します。各幼児の得意なことや苦手なことなど、各幼児の実態を把握した上で作成していました。長期目標を二つ程度設定し、現在の様子（食事・排泄^{せつ}・支度などの基本的な生活習慣、運動・感覚、遊び、コミュニケーション、対人・社会性、集団活動）を踏まえて、支援内容と具体的な手立てを考えていました。こうした考え方は園と同様であり、療育センターでも、組織的かつ計画的に行っていました。

療育センターでは、その幼児に応じた組織的、計画的な支援が展開されていると思いました。例えば、幼児がこの後の行動を見通しやすいうように、毎日同じことを繰り返したり、時間の区切りを毎日同じにしたり、イラストなどの視覚情報を部屋に提示したりなどすることによって、安心して過ごせるのだと感じました。しかし、園での

集団生活の中では、一つの遊びが別の遊びに発展したり、他の幼児のふとした思い付きから予定していたスケジュールを大きく変更したりすることもあります。他の幼児は、そうした生活の中で出会う出来事を楽しみ、楽しむことで多くのことを学んでいきます。しかし、障害のある幼児などは、その特性から、それらの出来事を楽しむためには、少しだけ多くの時間を要したり、特別な配慮が必要だったりするのかもしれませんが。

療育センターと連携して障害のある幼児などの支援を行い、当該幼児が年長になる頃、保護者の方から、「療育センターでは、少人数で先生の人数も多く、幼児たちへのフォローも手厚いので落ち着いて過ごせていたように思います。園では、幼児の人数が多く、大きな集団に入って自分なりに考えて行動する力やお友達と関わるができるようになってきたと思います。療育センターと園の先生の両方からうちの子の様子を聞くことができたので、いろいろな姿を知ることができました」との話がありました。この発言から、園、療育センター、家庭が、それぞれの役割を果たしつつ、連携することの大切さを再認識しました。

事例 10 家庭、園、関係機関が連携して障害のある幼児などの支援を考える

障害のある幼児などへの支援を行っているのは、園だけではありません。家庭では保護者が、児童発達支援センター等では指導員等が、医療機関では医師や看護師が関わっています。保護者や関係機関と連携して一貫した支援を行うことが大切です。

【ポイント】

- 障害のある幼児などが関わる関係機関や家庭での幼児の実態、保護者の願い、支援策等を共有しましょう。
- 支援の方針を共有した上で、それぞれの生活の場で示す障害のある幼児などの実態に応じた具体的な支援策を共有しましょう。
- 個別の指導計画との関連を図り、先生自身の保育に生かせるようにしましょう。

幼児の生活は、家庭と園で連続しています。療育機関等に通っている場合には、ここでの障害のある幼児などの生活も含め、家庭、園、関係機関が連携して、初めて当該幼児の生活する姿全体を捉えることができると言えるでしょう。当該幼児の生活する姿から困難さを捉えるためには、家庭、園、地域の連携が必要です。そして、それぞれが個別に支援策を作成しては、当該幼児の生活する場所によって支援策が異なってしまう、当該幼児は混乱してしまう恐れもあります。障害のある幼児などの抱える困難さに対応した支援を行うためには、当該幼児に関わる様々な大人が、困難さや支援方針を共有することが大切です。

家庭、園、関係機関の連携は一朝一夕に実現するものではありません。園と保護者との連携、関係機関と保護者との連携を基盤に、3者の連携を深めましょう。

集団の雰囲気苦手なK児の発達を共有するまで

2年保育5歳児

K児は、幼児が大勢集まって何かをする雰囲気が苦手で、そのような状況になると奇声を上げたり保育室を飛び出したりします。園からの勧めで、4歳児の10月から発達支援センターに通っています。

年長に進級し、新しく担任になった先生は、K児に対して環境の構成を工夫してみ

たり、様々な関わり方を試してみたりしましたが、症状はだんだん強く現れるようになりました。

○保護者の思いを知る

担任は、園でのK児の様子を保護者に伝えながら、保護者の思いを聞くことにしました。

「皆と同じ行動をとってほしい」と願う保護者

(4月)

保育室に入ってきた保護者の表情はとても硬く、担任に何か指摘されるのではないかと構えているようでした。保護者の気持ちを少しでもほぐすために、K児にはお気に入りの固定遊具があって、そこで体を動かして遊ぶことが大好きなことから話し始めましたが、保護者は「そのとき、他の子は何をしていたんですか？」と、我が子が皆と同じ行動が取れないことをとても気にしていました。「他の子も、それぞれ好きな遊びに取り組んでいました」と伝えましたが、「ずっと自由に遊ばせていて指導はしないんですか？ うちの子は、発達支援センターではきちんと椅子に座って、先生の言うことを聞きながら工作をしたり、紙芝居を見たりすることができます」と担任の指導方法に疑問を感じているようです。

保護者は、K児の好きなことや得意なことに目を向ける余裕はなく、K児が他の幼児と同じように行動できることを望み、担任の指導方法に不満があることが分かりました。しかし、一方で、その話しぶりや表情から、実は園でのK児の姿に戸惑いを感じ、不安を抱えながら子育てをしていることも感じ取れました。保護者には、園で展開される生活や指導の在り方について丁寧に伝え、少しずつ理解してもらう必要があると考えました。また、保護者から、初めて発達支援センターでのK児の様子を聞き、今後の指導の手掛かりになるのではないかと考え、その指導や支援の方法について詳しく知りたいと思いました。

○関係機関から情報を得る

早速、保護者に了解を得て、発達支援センターに連絡をし、出向いて話を聞くことにしました。

「落ち着いて紙芝居を見ている」発達支援センターでのK児の姿 (5月)

発達支援センターの相談室はとても落ち着いた雰囲気でした。指導員は「K児はパズルや積み木など構成しながら遊ぶ遊具が大好きで、じっくり取り組むことができますよ。紙芝居や読み聞かせも大好きです」と言いました。園での姿との違いに驚き、「最初から落ち着いていましたか？」と質問をすると、「いいえ、紙芝居のときは、最初は相談室から出て行ってしまったんです。だから、1対1の読み聞かせから始めて、少しずつ一緒に聞く人数を増やしていきました。今では10人くらいなら一緒に聞けるようになりました」と教えてくれました。その他にも、K児の周りに必要以上にものを置かないこと、語りかける声の音量に留意していること、活動に見通しがもてるようにしてから始めることなど、K児が集中して活動に取り組めるように工夫していることを教えてくれました。K児は戸外で体を動かして遊ぶことが大好きなこと、幼児が大勢集まる状況が苦手なことなど、園での様子を伝えると、「発達支援センターでは外で体を動かして発散するような遊びはしていません。もしかしたら、こちらでの活動に多少ストレスを感じていて、それを園で発散しているのかもしれないね」と答えてくれました。

そして、「K児にとっては、園も発達支援センターも生活の場です。お互いに情報交換をしながら、K児への関わり方を考えなければならないですね」と今後も連携する意思を確認し合うことができました。

発達支援センターでは、K児は落ち着いていました。K児の言動は、周りの環境条件にかなり影響されることが今回の訪問で分かりましたので、発達支援センターのK児への支援の方法を参考に、今後の指導について検討することになりました。しかし、園は、集団での生活の場でもあります。全てを発達支援センターと同じにすることはできません。幼児教育の特質について保護者や発達支援センターに理解を求めながら、K児の支援策を共有していく必要があります。

○保護者に園の役割を説明する

保護者と面談をする前に、発達支援センターで得た情報を園全体で共有し、K児の発達の見通しや今後の指導の在り方について話し合いました。

面談の当日、担任は、特別支援教育コーディネーターにも同席してもらおうと考えましたが、保護者はあまり気が進まない様子だったので、園長室で二人きりで話すこ

とにしました。

「なぜ園ではできないのでしょうか」と訴える保護者

(6月)

担任は、発達支援センターでのK児の姿を見て驚いたこと、発達支援センターでの支援が参考になったことを保護者に伝えました。それに対して保護者は「もともと家では、物事に集中してじっくり取り組むことができる子でした。発達支援センターに通うようになって、できることが増えました。指導員さんの言うことはよく聞けるし、皆と一緒に行動できます。なぜ園だと、うちの子だけが目立ってしまうのでしょうか」と涙ながらに訴えてきました。担任は、これまでのK児への指導がうまくいかずに困っていたことや、K児らしさを十分に発揮させてあげられない自分への不甲斐なさを正直に話しました。さらに、保護者の言い分を十分に受け止めた上で、「Kちゃんは、毎日、楽しそうに体を思いきり動かして遊んでいます。これは、体幹をきたえたり、体をスムーズに動かしたりするための大切な経験です。そして、体を動かして遊ぶ心地よさを味わいながら、気分を発散しているのかもしれませんが。園での指導の成果は、すぐに目に見えることが少なく分かりにくいのですが、Kちゃんにとっては必要な経験です。このように、園では、Kちゃんの将来を見通して、今、Kちゃんに必要な経験を考えて指導や支援をするようにしています」と説明しました。そして「ぜひ、Kちゃんをどのように育てていったらいいのか、一緒に考えていただけませんか？ 家庭、発達支援センターと、その思いを共有した上で、園での指導を見直していきたいんです」と話しました。保護者は「ぜひ、そうしてください」と少し安心した様子でした。

話をしていくうちに、保護者の表情は少しずつ柔らかくなっていきました。担任が、正直に思いを伝え、共に考える姿勢で臨んだからだと思います。また、K児の具体的な姿を示しながら幼児教育について説明したことも、保護者にとっては理解しやすく、受け入れやすかったのかもしれませんが。

そして、園、家庭、発達支援センターが各々の役割を認識し、同じ思いでK児を育てていけるように三者で話し合いの場をもつことにしました。

○長期的な視点でK児の発達を共有する

保護者と指導員に来園してもらい、保育参観後、2時間程度話し合うことにしました。短い時間でも話し合いが充実するよう、事前に話し合う内容を伝えておきました。

まず、互いに「K児の様子や変容」と「支援の過程」を報告し合い、「K児にどのような姿を期待するのか」「今後、各々がどのようにK児に関わったらよいか」などの意見交換ができるとよいと思いました。

「三者の共通の思い」を話し合う

(7月)

今回は、保護者と指導員が、園でのK児の姿を具体的にイメージできるよう、保育室で話し合うことにしました。初めに、現在のK児の様子や4月からの変容、指導や支援の過程について報告し合いました。

(担任) 4月は、登園すると園庭に行き、一人で楽しそうに固定遊具を使って身体を動かして遊んでいました。最近、友達のしている面白そうな遊びに興味があるのか、ごっこ遊びをしている友達をじっと見ているところをよく見かけます。友達が大量集まる雰囲気慣れるよう、K児の遊びを周りの子に紹介したり、同じ興味をもつ友達とつないだりして、K児の周りに友達が集まるよう工夫してきました。少しずつ、友達の存在を肯定的に受け止めてくれるようになったのでしょうか。

(指導員) 粘土や積み木などに関わって集中する時間が長くなりました。イメージも豊かで、いろいろなものが作れるようになりました。先日は、隣に座っていたX児に「何を作ったの?」と聞かれて、「ライオン」と答えていました。

(保護者) 朝起きて身支度をする行動が素早くなりました。指導員さんのアドバイスどおりに、ある行動パターンをつくって、毎日、繰り返してきたので、習慣になったみたいです。

様々な状況下でのK児の姿や4月からの成長を知り感動するとともに、どの姿もK児であることや各々のK児への関わり方で参考になることなどについて確認しました。そして、「今後、K児にどのような姿を期待するのか」について意見交換をしました。

(担任) 安心して友達の中にいられるようになってほしいです。

(指導員) 友達と言葉でのやり取りができるようになってほしいです。

(保護者) 他の子と同じ行動がとれるようになってほしいです。

期待する姿は様々でした。しかし、もう少し長い目で見て、将来、K児にどのようになっしてほしいかなどを話し合っているうちに、「今、K児にとって必要なことは集団の中で安定した情緒で過ごすことなのではないか」という三者の共通の思いが出てきました。

「今後、K児にどのような姿を期待するのか」について、三者で意見を出してみると、最初は三者それぞれの意見が出ました。園では、他の幼児との関わりが少しずつ見られるようになってきましたが、他の幼児と一緒に遊んだり、話し合ったりする姿まではまだあまり見られません。他の幼児の遊んでいる様子が気になっているものの、多くの幼児が様々な場所で思い思いに遊んでいるので、まだ少し落ち着かないのかもしれないかもしれません。一方、発達支援センターでは、園と比較して物や人が多くないこともあり、他の幼児と言葉を交わすことも増えてきているようです。K児のそれぞれの生活の場で示す姿を受け止め、発達支援センターで他の幼児と会話ができているからといって、園で無理に会話を促すことは避けることになりました。発達支援センターで他の幼児と関わる楽しさを知ったり、園で他の幼児と一緒に踊ったり歌ったりする体験を重ねていくうちに、園でも他の幼児と一緒に遊び、会話をするようになっていくと考えました。

そして、保護者の「他の子と同じ行動がとれるようになってほしい」という思いも受け止めつつ、K児ができるようになったこと、K児が得意なことについて他の幼児が感心している出来事などを伝えるようにしました。そうすることで、K児なりの成長の様子や、K児の得意なことやよさに保護者が目を向けられるようにしました。

そうした話し合いを行い、三者共通の支援方針としては、集団の中で安定した情緒で過ごすこととした上で、具体的な支援策はそれぞれの生活の場で示すK児の姿に応じて検討することになりました。この具体的な支援策についても、その方向性などを共有することが大切です。例えば、他の幼児と場や空間を共有し、同じ活動をすることで、他の幼児と直接的な関わりはなくとも、何となく他の幼児と行動を共にしているような雰囲気をK児が味わえるようにし、機会があれば他の幼児との会話を先生が仲立ちするといった支援策を三者で共有することが考えられます。具体的には、園では、リズム遊びなど、他の幼児と同じ空間で同じ音楽を聴きながら踊れるように配慮します。一方、発達支援センターでは、他の幼児と隣り合ってそれぞれに車を製作しながら、隣の幼児の工夫を取り入れたり、ときには自分の工夫を先生や隣の幼児に説

明する機会を設けたりすることなどが考えられます。家庭でも、他の幼児が今熱中している遊びを取り入れてK児がその遊びに興味や関心がもてるようにしたり、一定時間同じ遊びが続けられるように保護者が一緒に遊んだりなどが考えられます。このように、それぞれの場での障害のある幼児などの生活する姿に応じるとともに、支援策について具体的に共有していくことが大切です。

○個別の教育支援計画を作成する

K児に対してきめ細やかな指導や支援を行うために、このように対面で話し合う機会を設けることは、有効な手段の一つです。しかし、なかなか頻繁には行うことができません。そこで、保護者の承諾を得て、今回の話し合いを基に、共有した支援の目標、各々でどのような支援を行うのかなどを整理し、個別の教育支援計画として、まとめることにしました。個別の教育支援計画には以下のことなどを記載しました。

- ・保護者の願い
- ・K児の困難さや支援の内容
- ・得意なことや好きなこと、苦手なことや嫌いなこと
- ・生育歴、相談歴、診断の状況 等

個別の教育支援計画を作成することで、保護者や関係機関を含んだ複数の視点からK児を把握することができます。また、K児の状況を踏まえた計画の見直しも3者で検討することにより、一層K児の実態に応じたものとなります。そして、K児の成長や成長の過程といった情報が蓄積され、3者で共有されることで、K児の将来を見据えた支援についてよりよく考えていくことができます。

事例から読み取れること

保護者や関係機関と連携して障害のある幼児などの困難さに応じた支援を考える上で、大切にしたいことについてまとめます。なお、家庭や関係機関と連携した支援については、障害のある幼児などの実態に応じて、随時、見直しを行うとともに、進学や就職などにより生活の場が変わっても一貫した支援ができるよう、長期的な展望の下、将来の生活を見据えた継続的な支援を行うことが必要です。

○障害のある幼児などが関わる関係機関や家庭での幼児の実態、保護者の願い、支援策等を共有します。

障害のある幼児などへの支援については、園生活だけでなく、家庭や地域での生活を含め、当該幼児が過ごす家庭や施設がその幼児の実態に応じた支援を共有することが大切です。教育、医療、福祉等の当該幼児に関係する人々が、それぞれの領域の専門性を生かしつつ意見を出し合うことで、当該幼児が抱えている困難さに関しての理解が深まり、支援ニーズが明らかとなります。

関係機関との連携に当たっては、まず、保護者と信頼関係を構築し、保護者に関係機関と情報を共有することについて承諾を得る必要があります。保護者は、障害のある幼児などにとって最も身近な支援者と言えます。保護者の願いなども聞き取り、一人一人の実態やニーズに応じた支援目標を、家庭、園、関係機関で話し合い、共通理解を得るようにします。そして、支援方針に基づき、各施設が行う具体的な支援についても共有することが大切です。

○支援の方針を共有した上で、それぞれの生活の場で示す障害のある幼児などの実態に応じた具体的な支援策を共有します。

家庭、園、関係機関で支援方針を同じにしても、障害のある幼児などが見せる姿はそれぞれの生活の場で異なることがあります。これは、それぞれの施設における当該幼児を取り巻く環境等が異なることが要因の一つと考えられます。例えば、当該幼児と同じ場にいる幼児の人数、幼児当たりの教職員の人数、遊具や用具の種類や数、園庭の有無や園舎の部屋数や広さなどが異なれば、当該幼児が感じる困難さも異なる可能性があります。したがって、具体的な支援策については、それぞれの生活の場で見せる当該幼児の実態に応じて考えます。そして、それぞれの立場や観点から見た支援の在り方について共有し、役割を分担したり連絡を取ったりして支援を行います。

そのためには、当該幼児の実態とニーズ、支援目標、支援内容がそれぞれ関連をもつようにすることが大切です。例えば、「当該幼児の実態とニーズを考慮すると、これからの目標は〇〇がよいのでは。その目標に向かって当該幼児が発達していくには、家庭では〇〇、園では〇〇、関係機関では〇〇に取り組みましょう」といったように、当該幼児の実態とニーズ、支援目標、支援内容の関連と各機関での役割分担や具体的な支援策を共有するようにします。支援内容は、当該幼児にとって無理がなく、また

意欲をもって取り組めるかどうかを考慮します。また、支援が実際に行えるかどうかについても考慮します。例えば、家庭における支援の場合、保護者が無理なく行える支援内容かどうかについて考える必要があります。障害のある幼児など自身や支援者にとってよりよい支援の在り方を話し合うことが大切です。

○個別の指導計画との関連を図り、先生自身の保育に生かせるようにします。

連携で得た情報を基に、個別の指導計画を見直し、日々の保育に生かしていくことが大切です。また、個別の教育支援計画を作成し、家庭、園、関係機関での支援が整理され共有されることで、自分の指導や支援を多面的・多角的に見直す機会ともなります。さらに、個別の指導計画を作成して、障害のある幼児などへの指導や支援を明らかにし、園内で共有することで自信をもって保育をすることができます。保護者や関係機関との連携は、自分自身の保育の充実につながります。

(第5章2.(1)個別の教育支援計画 134頁参照、第5章5.専門機関との連携 144頁参照、第5章6.保護者との連携 148頁参照)

事例 11 入園前の相談を活用して受入れ体制や支援を考える

入園するという事は、初めての場所や人との出会いがあり、障害のある幼児などや保護者には期待とともに不安もあります。障害のある幼児などと保護者が安心して入園するために、園はどのような準備をして受入れ体制を整えていけばよいのでしょうか。

【ポイント】

- 保護者から障害のある幼児などの状態を聞き取り必要な支援につなげていきましょう。
 - ・保護者の思いを受け入れる温かい雰囲気話を聞くことを心掛けましょう。
 - ・当該幼児の状態を聞き取りましょう（具体的な障害の状態等、遊びや行動の特徴、家庭で配慮していること、園に希望すること、通院の状況、緊急時の対応など）。
- 園での施設環境や体制を整えましょう。
 - ・障害の状態等により必要な施設の安全性を確認しましょう（保育室、廊下等の段差や物の配置、使用する椅子等の備品など）。
 - ・当該幼児が安心して遊べる遊具や好きな物等の準備を進めましょう。
 - ・園内での情報共有を進め、必要に応じて介助員等の配置を検討し、当該幼児の安全を確保しましょう。
- 入園前に園の施設や保育見学を行った上で支援策を保護者と共有しましょう。
 - ・在園児の保育を見学したり、未就園児への施設開放の機会や新入園児一日入園等で実際に遊んだりして、障害に応じた施設環境の整備や活動における支援について考え、保護者と共有しましょう。
- 関係機関との連携により、必要な支援につなげましょう。
 - ・関係機関と互いの施設を訪問して連携を図り、当該幼児の行動や遊びの様子、施設環境面での配慮事項等を共有し、園での生活にも生かしていきましょう。

障害のある幼児などが園に入園するに当たっては、入園前から園と保護者が連携することが必要です。さらに、関係機関とも連携し、保護者の承諾を得た上で、情報を

共有して支援策、施設環境や体制を整え、当該幼児や保護者が安心して入園できるように準備をします。ここでは、保護者が視覚特別支援学校の教育相談部門に定期的に相談しているL児が、入園するまでの事例を紹介します。

弱視のあるL児の受入れに当たって

2年保育4歳児での入園を考えたL児保護者から、園に問い合わせの電話がありました。L児は先天性の弱視です。保護者の希望により週2日園に通園したいが、入園することは可能であるかとの問い合わせでした。保護者と日程の調整を行い、来園日を決定して、その日の電話は終了しました。

○保護者の園見学と面談

初めて保護者が来園し、園内の見学と園長との面談を行いました。始めに園の施設を案内しながら、幼児の生活の流れや様子を知らせていきました。幼児が遊んだり生活したりしている場面を見てもらいながら、「登園時に靴と上履きを履き替えますが、靴箱の場所が分かれば自分で履き替えることはできますか？」と質問すると、「最初に靴箱の位置を教えてもらえれば覚えることができます。そして、L児の場所に立体的な目印をつけてもらえれば、自分で探して履き替えることができます」など、先生は必要な支援について保護者から具体的に教えてもらうことができました。そのことにより、保護者はL児が園で生活することを少しイメージすることができたようでした。会話が進むにつれて、緊張気味だった保護者の表情も和らぎ緊張が解け、保護者からも不安なことや分からないことについて質問がありました。

園内の案内後に園長との面談を行い、L児のこれまでの生育の様子やL児の見え方に関すること、家庭で配慮していること、好きな遊び、園に希望することなどを聞き取りました。次にL児と共に来園する日程を決定し、支援に関するアンケートを渡し、次回の面談のときに記入して持参するようお願いしました。

*支援に関するアンケート内容

- ・いつ、どのようなことで発達についての助言がありましたか
- ・保護者が困っていること、気になることはどのようなことですか
- ・生活習慣、衣服の着脱、食事、コミュニケーションなどで支援や配慮の必要なことはどのようなことですか

- ・その他、日常生活で支援していることはどのようなことですか
- ・現在と今後で療育、発達検査、通院、通所があれば場所と回数を教えてください
- ・集団生活の中で配慮してほしいことはありますか
- ・その他、園に知らせておきたいことなど

○L児と保護者での園見学と面談

2回目はL児と保護者が一緒に来園しました。保護者に手を引かれて初めて園に来たL児は、玄関で音や匂いを確かめるような素振りを見せていました。靴を履き替えるときには、手で段差や腰を下ろす場所を確認していました。L児に「こんにちは。園の先生です」と声を掛けると、初めて聞く声に不審そうな表情を見せつつも、「園の探検に行ってみよう」との問い掛けに、保護者と一緒に歩き出し、園内の探検に出発しました。保護者と手をつないで歩きながら、壁や棚などに触れて物や位置を確認していました。保育室に入るとL児は立ち止まり、在園児が遊んでいる音や声や気配を感じているようでした。楽器遊びの音に興味をもったため「鈴ですよ」と言って鈴を渡すと、L児は手で触ったり音を鳴らしたりして鈴を確認した後、在園児と一緒に音楽に合わせて鈴を鳴らす姿が見られました。先生は、L児の様子を見ながら、「靴箱などは触って確かめているから立体的な目印が必要なのね」、「鈴などの音が出るものを使えば、L児にも分かりやすく、他の幼児と一緒に遊びやすいかもしれない」など、園としての支援についてイメージをしました。

園内見学後、園長がL児と保護者との面談を行いました。持参した支援に関するアンケートの内容についてのことや、実際にL児が園を見学したり他の幼児と遊んだりする様子から、気が付いたことや確認したいことなどを保護者に尋ねました。保護者は、L児が遊びに参加したことを喜び、在園児との関わりに対して少し不安が薄れたとのことでした。しかし、一方で、保護者がいないところで他の幼児と一緒に遊んだり、安全に生活したりできるのかという新たな心配が生まれたとも話していました。その話を手掛かりに、L児が他の幼児と一緒に遊びや生活を安心して楽しむことができるよう、施設等の安全の確保や具体的な支援について先生間で話し合うことにしました。

○保育に参加する機会の活用

L児と保護者に未就園児の親子登園などを紹介しました。実際に園の施設で遊ぶことで気付くこともありますし、未就園児の親子登園では同年代の幼児が多く参加するため、保護者が一緒にいるという安心感の中で、L児が他の幼児と触れ合い、関わりを深めていくことができます。また、入園前に、L児が園での遊びや生活を繰り返し体験することで、L児はどこに何があるのかを知ったり、先生の声聞き分けることができるようになったりなど、新しい施設に慣れていくことができます。さらに、L児の保護者にとっても、他の幼児の保護者と知り合うきっかけにもなります。他の幼児の保護者も、L児の遊びや生活の様子を直接見たり、L児や我が子と一緒に遊んだりすることで、L児への理解が深まります。

未就園児の親子登園を繰り返し、L児が安心して園で過ごす姿が見られるようになってきたら、保護者はL児から離れ、先生がL児と関わる時間を設けます。保護者が不在の場で、先生がL児と一緒に遊ぶ中で気付いたことを入園後の支援につなげていくようにしました。

○園での施設環境や体制の検討

保護者からの聞き取りや、未就園児の親子登園でのL児の姿を踏まえて、園内委員会でL児を受け入れるに当たっての施設環境の整備や支援体制について話し合いをしました。事前にL児の保護者が教育相談に通っている視覚特別支援学校に連絡を取り、支援についての助言を得るようにしました。

施設等に関して次のような配慮を行うことになりました。

- ・保育室出入口の段差や柱、棚などに緩衝材を取り付ける
- ・靴箱やロッカーなど個人が使用する場所は動線から一番近い場所にして、L児が手で触って分かるように立体的なマークを付ける
- ・L児が好きな音の出る遊具や感触を味わう遊具、CDラジカセや好きな曲の入ったCDなどを準備する
- ・運動遊び用に鈴の入ったボールを用意する
- ・活動時の座席は先生の声がよく聞こえ、先生がすぐに支援できる位置にする
- ・L児の活動支援や安全のために介助員を配置するとともに、先生全体で注意して見守る

園内委員会で決定したことを保護者に伝え情報を共有しました。また、何か心配なことや不安なことがあった場合には、いつでも園に聞いてほしいことも伝えました。

○親子で施設環境の確認

施設環境を整え、いよいよ入園式を迎えます。入園式の日には人が多く時間の都合もあり、ゆっくりと確認することが難しいため、入園式の前日に親子で来園してもらい、施設環境の確認をしました。正門からの動線、テラスや保育室の確認、靴箱やロッカーなどの目印、段差や柱の緩衝材など、園で準備したことを実際に親子で歩いて確認します。ゆっくりと時間をかけて確認できたことで、翌日の入園式には親子共に安心して参加する姿が見られました。

また、事前に園歌の音源を貸し出したところ、L児は毎日のように聴いていたようで、入園式の園歌の場面では、一緒に口ずさむ姿が見られました。

事例から読み取れること

入園前に、L児と保護者には何度も来園してもらおうようにしました。初めは緊張した様子でしたが、来園する度に園や先生への親しみが増していきました。直接会って話をすることで、L児が園で安心して生活できるようにという目標に向かって、保護者の思いに寄り添いながら、保護者と一緒に考えるようにしています。保護者の言葉に耳を傾け、保護者が伝えたいことを十分に聞き取ることや、話しやすいと感じる温かい雰囲気大切にしています。障害のある幼児などの困難さに応じた支援を考える上で、保護者からの情報は重要な手掛かりとなります。保護者との信頼関係を築きながら、しっかりと聞き取っていくことが必要です。

また、障害のある幼児などの実際の姿から支援の方法が見えてくることもあります。入園前に直接当該幼児と関わったり、遊んでいる姿を見たりする機会を活用して、支援のヒントを見つけていきましょう。

園内の施設環境の整備に当たっては、保護者からの聞き取りや関係機関からの助言などを基に、できることから取り入れていくことが必要です。例えば、当該幼児に専任の先生を配置してほしい、車椅子を利用しているのでエレベータを設置してほしいなどのように、保護者の要望の全てにすぐに応じることが困難な場合もあります。その場合は、介助員の配置や必要に応じて保護者自身のお手伝いをお願いする、車椅子

用のスロープの設置や階段は先生が抱っこやおんぶをして移動するなど、次善の策について園内で検討し、保護者に相談しましょう。保護者が安心できるように、保護者の要望に応じることが困難な理由や次善の策での当該幼児の生活について具体的に説明するようにしましょう。安全を確保するだけでなく、当該幼児が安心して楽しく園生活を送れるようにすることが大切です。

(第3章1. 障害のある幼児などの遊びや生活を支える合理的配慮 14頁参照、第3章5. 保護者との信頼関係を基盤とした子育ての支援 31頁参照)

事例 12 園と小学校が連携して切れ目ない支援を考える

園は小学校教育を見通した教育を行っており、小学校では、特に入学当初では、幼児期に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜた教育に配慮しています。例えば、入学当初は、園での掲示方法を取り入れて教室の掲示をしたり、弾力的な時間割を設定したり、幼児期に親しんできた遊びを取り入れたりなどして、児童が安心して小学校生活を送れるような基盤が大切です。その上で、障害のある幼児などが小学校に安心して通うことができるようにするためには、どのようなことに配慮したらよいでしょうか。

【ポイント】

- 小学校における支援の検討の参考になるよう、保護者の承諾を得た上で、困難さや困難さに応じた園での支援について具体的に伝えましょう。
- ・ 幼児の障害の程度や状況、支援策、園での生活の様子や他の幼児との関わりなどについて具体例も交えながら話しましょう。
- ・ 現在の当該幼児の実態だけではなく、例えば、4月からの当該幼児の成長や支援策の見直しなどについて話しましょう。
- ・ 小学校の先生が、当該幼児の園での生活の様子を参観する機会を設けましょう。

ダウン症のあるM児に関する小学校への引継ぎ

ダウン症のあるM児は、人懐こく、大人と積極的に関わりをもとうとします。笑顔で関わっていくことが多いため、保護者や周りの人から愛されています。安心して楽しく、M児らしく伸び伸びと小学校生活を送ってほしいと担任は思っています。そのためには、M児の実態に応じた支援の継続性が大切です。個別の教育支援計画や自治体等で取り組んでいる就学支援シートなど、障害のある幼児などの実態や支援について記載されている資料を活用するとよいでしょう。しかし、継続的な支援を実効性のあるものとするためには、それだけでは十分とは言えません。当該幼児などがどのようなことに困っているのか、先生はどのような意図の下に支援をしているのか、当該幼児の成長等に伴う支援の見直しなどについて、園で生活する具体的な様子とともに説明し、小学校の先生が具体的にイメージできるように努めましょう。

【小学校に伝えた内容】

①障害のある幼児などを取り巻く状況

ダウン症があり、言語の遅れ、知的な遅れ、低身長などが見られる。3歳から療育機関と連携して通所している。園には4歳で入園した。

②障害のある幼児などの特性や特徴

- ・人と関わることが好きで、皆と同じ場で過ごすことができるが、活動への参加は支援を要する。
- ・音楽が好きで、リズムに乗って体を動かすことを好み、皆をまねて一緒に走ったり、追いかけて鬼に参加したりする。手先の力は弱く鉄棒などをつかむ、ボールを投げるなどの動きは難しい。
- ・自分の思いは表情や態度で表すことがほとんどで、「いや」「だめ」と拒否するときは言葉で言い、手で払いのけたりふくれ顔をしたりして示す。M児なりに気持ちを切り替えようとしても、こだわりが強くなり切り替えられなくなる傾向がある。
- ・周りからの刺激を受けやすく、自分でできることをしなかったり、食事に時間を要したりする。

③障害のある幼児などの成長の様子

○体の動きについて

【M児の姿】

- ・4歳の入園時は階段の上り下りを自分でしようとせず、抱っこを要求することが多かった。2年間の生活で階段や段差等の足取りがしっかりしてきた。
- ・三輪車に乗ったり、音楽に合わせて体を動かしたり、粗大運動の機会をもつようにしてきたことで、体のふらつきが少なくなってきた。
- ・指先の細かな動きを伴うペンでかくことや箸を使って食べることは難しく、大きな画用紙にかいたり、スプーンやフォークなどで食べたりしている。

【配慮していること】

- ・発達がゆっくりなため、日常生活で体を動かし、粗大運動を積み重ねていくことで、体の動きやバランスがよくなってきた。
- ・指先を使うことは個別に支援し、皆と同じようにできたという気持ちをもてるようにしている。

○活動への参加について

【M児の姿】

- ・興味をもったことを途中で終わりにすることができにくく、保育室に戻れなかったり物を片付けられなかったりしていたが、クラスの皆が集まることを伝えたり、次のことへの見通しをもてるようにすると、気持ちを切り替えてクラスに戻れるようになってきた。
- ・協同製作などは、個別対応でガムテープを切って渡して貼るようにしたり絵具で塗る部分を示したりするなど、皆の中でM児ができることで参加し、一緒に活動することを楽しんできている。
- ・乗り物ごっこ活動では、M児が乗り物に乗るだけでなく、先生に促されると年長の仲間として乗り物を押す役割を行えるようになってきた。

【配慮していること】

- ・クラスへ参加の意識が育ってきているので、皆と一緒に活動する中でM児のできることで参加したり、できる役割を担ったりして満足感が得られるようにした。

○自己表出・気持ちの切り替え

【M児の姿】

- ・「だめ」、「いや」の拒否する言葉以外は、表情と態度で表していたが、名前を呼ばれたら返事をしたり挨拶の言葉を言ったりするなど、少しずつ発語や語彙が増え、思いを伝えようとするようになってきた。
- ・自分の思いどおりにならないときは、先生の誘いを拒んだり物から離れようとしなかったりしていたが、先生がM児の気持ちを言葉で表して受け止めたり、M児の気持ちを満たす対応をしたりすることで、気持ちを切り替えることができるようになってきた。

【配慮していること】

- ・自分の思いを伝えようとする行為が増えてきているが、まだ言い表せない言葉も多いので、先生が気持ちなどを代弁して、M児の語彙が増えるようにした。
- ・気持ちの切り替えがしやすいように、「まだ遊んでいたいね。でも、お弁当を食べる時間だから片付けようね。お弁当を食べたらまた遊ぼうね」といったように、先生がM児の気持ちを受け止めていることを伝えるなどした。

○身の回りの生活習慣

【M児の姿】

- ・排泄が自立し、自分からトイレに行くことができるようになった。
- ・基本的な身の回りのことは自分でできるようになったが、気が散ると進まなかったり気が乗らないとやろうとしなかったりする。

【配慮していること】

- ・M児のペースを保証すると自分なりにやろうとすることやできることが増えてきた。しかし、周りの動きや音に影響されて気持ちが向かなくなると、できることもやろうとしなかったり、時間を要したりする傾向がある。物の位置や座る場所を配慮して、しようとすることに集中できるようにした。

○他の幼児との関わり

【M児の姿】

- ・人と関わるのが好きで、皆をまねて一緒に走ったり、追いかけて鬼に参加したりする。
- ・自分の気持ちをうまく言葉で表現できないために他の幼児に思いが伝わらなかったり、強いこだわりが生じて他の幼児といざこざが生じたりすることがある。
- ・M児はH児と一緒にだと落ち着いて活動に参加できる傾向にある。H児は、M児の思いを確認しながら活動に誘ったり手伝ったりしている様子が多く見られるので、M児も安心なのだろう。

【配慮していること】

- ・M児の気持ちを代弁して他の幼児に伝えるなどして、幼児同士と一緒に遊びを楽しむようにしている。

④保育参観などを通して

「③障害のある幼児などの成長の様子」において伝えたことを、実際のM児の生活する姿から具体的に伝えていきます。紙や口頭での説明だけでは、先生の口調や周囲の雰囲気、そういった環境の中でのM児の表情や言動は伝わりません。また、掲示物や集まる場所の目印といった生活環境への配慮についても、実際に見た方がよく分かります。さらに、M児が他の幼児と遊ぶ様子から、興味のあることや好きな遊びの傾

向、遊びを楽しんでいる様子や困難さを感じたときのM児の様子なども知ることができます。

保育参観を通した話し合いの様子

M児は園庭で三輪車に乗って遊んでいる。片付けてクラスに集まる時間になるが、M児は遊びをやめることができない。先生がア「Mちゃん、片付けて保育室に戻ります」と声を掛けると、「いや」と言って三輪車を放そうとしない。再度イ「Mちゃん、片付けて保育室に戻りますよ。集まったら桃太郎の劇をするから」と声を掛けても、「いや」と言って口をとがらせて怒る。そこで先生は、ウ「そうか、まだ遊んでいたいよね。あと1周ぐるっとしたら終わりにしようね」と言い、三輪車置き場で待つことにした。その間「Mちゃん、速い」と声を掛ける。

エ 三輪車置き場の手前に誘導して、一緒に片付ける。「Mちゃん、片付けるの上手」と言うと笑顔で保育室に向かう。オ 自分で靴を履き替えて保育室に戻ることができた。

保育参観後の話し合いでは、保育参観中に見られたM児の姿と先生の声掛けなどの支援（ア～オ）について、支援の意図を小学校の先生に伝えた。

ア 全体指示だけでは意識しにくいので、今することを、個別に、かつ簡潔に伝えるようにしている。

イ 次にすることを知らせて見通しをもてるようにしている。

ウ 片付けることだけを知らせていくと、片付けたくない気持ちが募り頑固になっていく傾向がある。そこで、「いや」という返答や怒って拒否する態度を、もっと遊びたい気持ちの表れと受け止め、1周乗ったら終わりにすることを提案することでM児が納得するようになっている。

エ 一緒に片付けることで、M児の気持ちがそれないようにしている。

オ 自分でできる身の回りのことは、自分で行う姿を見守っている。

園での対応の仕方を具体的に知らせることは、小学校でのM児の支援につながることで期待されます。また、単に伝えるだけではなく、小学校の先生との意見交換の機会をしっかりと設けるようにしましょう。

事例から読み取れること

小学校への引継ぎに当たっては、保護者の承諾を得た上で、なるべく具体的に伝えていきます。障害のある幼児などにとって、生活の場が園から小学校に変わることは大きな変化です。その変化に戸惑い、不安を感じ、園ではできることも一時的にできなくなったり、落ち着きがなくなったりするかもしれません。そうしたときに、園で慣れ親しんだ遊びがある、集合場所の目印や掲示物といった生活空間があるといったことは、当該幼児にとって安心できることでしょう。また、先生の指示などについても、個別に簡潔に伝えてもらっていたのが、急に他の児童と一緒に全体の指示になってしまえば、理解できないばかりか、不安もついついしてしまうことでしょう。

当該幼児の実態に応じた支援が小学校に引き継がれ、安心して小学校での生活ができるようにするためには、小学校の先生が、小学校での学習や生活の支援をイメージできることが大切です。

なお、小学校での新しい生活に不安を感じているのは、当該幼児だけではありません。保護者も、「園でこれまでやってきた支援は引き継がれるのか。我が子の生活の様子を知らない保護者もいるが、小学校ではそういったことにも配慮してくれるのか」といったことを心配するかもしれません。保護者の承諾を得た上で、小学校に、これまでの保護者の思いや要望、園とどのようなやり取りをしてきたのかなどについて伝えましょう。そして、保護者の不安が軽減され、当該幼児だけでなく保護者自身も小学校生活に期待がもてるように支援をします。

障害のある幼児などはゆっくりと新しい生活に慣れていきます。そうした様子を温かな様子で見守り、継続的な支援をしていきましょう。そのためには、家庭や関係機関とも連携した一貫した支援が必要であることも忘れてはなりません。

(第5章7. 小学校への円滑な接続 155頁参照)

事例 13 保護者の気持ちに寄り添うことで先生と保護者の協働を深めていく

我が子には特に支援の必要性を感じていない、あるいは、支援の必要性は感じていてもそのことを受け入れることができずにいる保護者に、特別な支援の必要性だけを説明することは、保護者が園に対して反感や不信感をもつことにつながる恐れがあります。先生が障害のある幼児などの保護者と関わる際には、どのようなことに留意したらよいでしょうか。

【ポイント】

- 信頼関係を築くことが大切です。
 - ・日頃から会話を多くもつように心掛けましょう。
 - ・まずは、当該幼児のよいところを伝えましょう。
 - ・保護者の状態や心の機微を敏感に受け止めて、対応しましょう。
 - ・当該幼児の成長を一緒に喜びましょう。
- 様々な機会を活用し、情報を提供することが大切です。
 - ・当該幼児の行動特性（障害特性）について、伝えましょう。
 - ・当該幼児の行動の対応でうまくいったことについて伝えましょう。
 - ・状況に応じて地域にある支援機関を伝えましょう。

幼児の障害の有無にかかわらず、幼児、保護者、園の先生との間で信頼関係を築くことは、基本です。特に、保護者との関わりでは、保護者の状態や心の機微を敏感に受け止めつつ、コミュニケーションをとっていくことが重要になります。日頃から会話を多くもつように心掛け、幼児のよいところを伝えるなどの関わりを重ねていくことが大切です。コミュニケーションは、両者の関係性の上に成り立つものなので、先生の話し方や態度も影響することを踏まえて対応するようにします。

子育てに困りながらも心を閉ざしていた保護者が、園や療育機関での支援を受ける中で、保護者自身の状況を思い悩むことから、障害のある幼児などの困難な状況に目を向けられるようになっていった事例を紹介します。この事例を通して、先生が保護者の気持ちをどのように捉え、どのように関わったのか、そして、そのことによって保護者の気持ちに変化していく様子について考えていきましょう。

保護者と先生の関わりの事例

○入園当初—信頼関係づくりと母親の状況の理解—

4歳で園に通い始めたN児は、乳幼児健診で「言葉が遅い」と指摘を受け、年に数回、保健センターの発達相談に通っています。母親は友達と遊べないN児の行動が気に入らないのか、園でもN児に向かって「ばか!」と大声を出すことがありました。送迎時の母親の表情は硬く、N児は母親の表情をうかがうようにしていたこともあります。母親は「Nに障害があることを認めたくない」という発言をしていましたが、N児が遊ぶ様子を微笑ましそうに見ていることもありました。

担任はN児と一緒に遊ぶ時間をもつように心掛け、母親には、日頃から登降園の際の挨拶や何気ない会話をするとともに、N児のよいところや甘えてくるかわいらしさを折に触れて伝えていきました。

ある日、母親が「夫に、発達相談で言語の先生やお医者さんの話を伝えるけど、うまく伝えられなくて大変で…」と話しました。担任は「そうでしたか、大変でしたね。難しいことを質問されるのですか?」と聞きましたが、内容については口をつぐんでいます。

N児の家族は、両親とN児の3人家族です。父親は会社員で、平日はN児と過ごす時間はほとんどないようです。父親は、N児の発達の遅れについて気になりながらも、発達相談と一緒にいったことはなく、子育てにはあまり関わっていない様子が、母親の話からうかがえました。また、N児の祖父母は、離れた土地に住んでいて、ちょっと来て家事や子育てを手伝ってもらうような関係ではないこともうかがえました。N児のことについては、母親が一人で関わり、N児に関する様々な事柄は、母親が父親に伝えているようでした。母親の表情が硬かったり、イライラしたりするのは、母親の身近にサポートをしてくれる人がいないからかもしれないと、担任は思いました。

○園に慣れてきた頃

—気持ちの受け止めと障害のある幼児などの状況を保護者と共有—

担任にすっかり馴染んでいるN児の様子を見て、母親があるとき「Nは他の子より遅れているから、焦ってしまうし…、イライラしたときや時間がないときは、どうしても怒鳴ってしまう」と話しました。この日をきっかけに、担任は、母親に「何か困ったことはありませんか」と声を掛け始めましたが、「障害のあるこどもを育てたこと

のない人が、いくら先生だって、分からないから」と答えて、N児を連れて、そそくさと帰っていきました。

その後、担任は、N児のかいた絵を見せて『ママ、わんわん』と言っていましたよ」など、N児とのやり取りや遊びの様子などを詳しく伝えるようにして、声を掛け続けました。そのような働き掛けがしばらく続いたある日、母親は「Nを何とかしたいと思っている」と話してきました。担任は「N児のこと、心配なんですね、N児の育ちを一緒に考えていきましょう」と言って、N児の園での様子をこれまで以上に詳しく母親に伝えるようにしました。

担任は、今までのようにN児のよいところだけを伝えるのではなく、N児が園の生活で困っていることも伝え始めました。「皆でお遊戯をしているときに本を見ていたので、お遊戯をするように誘いましたが、怒って大声を上げていました。N児は、どうやってお遊戯に参加したらよいか分からなかったのかもしれないね」そして、数日後には、「お遊戯の順番を写真に撮って示したら、N児も皆と一緒に遊んでいました」と、園でどのような工夫をしているのかも伝えました。

このようにN児の様子や成長を詳しく伝えていくことを続けていく中で、母親も家庭での様子などを話し始めました。「家では園のように騒ぐことはないですけど、知らず知らずのうちにこどものペースに合わせているかもしれないです…」、「障害があるということで、心をおおらかにしようと思うけど…納得できる部分もあるし…できない部分もある」と家での幼児の行動にうまく対応できなかったときの複雑な心の内を語ってくれることもありました。

○支援について保護者と共に考える頃—専門機関との連携—

保健センターの発達相談に出掛けた母親は、相談員から「Nちゃんの言葉が増えて成長発達が著しく、園に通ってよかったですね、と言われた」と、嬉しそうに担任に話しました。担任は日頃の母親の子育ての努力をねぎらい、「園でも発達相談の先生と相談したいので連絡を取ってもいいですか?」と尋ねました。そして、母親から発達相談のことを詳しく聞くと、療育機関に通っていることが分かりました。今まで、母親は療育機関に通っていることを認めたくなかったり恥ずかしかったりして、園に言えなかったのかもしれない。他者から褒められることで、母親はN児の成長を実感でき、また気持ちもほぐれてきて、園にも少しずついろいろなことを話せるようになって

てきたのでしょうか。

母親から了解を得た担任は療育機関に連絡を取りました。療育機関では、N児の個別指導や母親との面接相談を通じて心の安定に取り組んでいました。その後、母親の了解を得た上で、療育機関の担当者が園でのN児の様子を観察し、降園後に園の全先生が加わって、療育機関の担当者とN児の状態や対応の仕方について話し合いました。

翌日、担任は「お母さんのお陰で、療育機関の先生から、N児のことや支援の仕方を教えてもらいました。N児もお母さんも、これまで本当に頑張ってきたんですね。これからは園と療育機関などの福祉機関とお母さんと一緒になって、N児のことを考えていきましょう」と話しました。母親は、安心したような面持ちで、「これからもよろしく願います」と微笑みながら言いました。

事例から読み取れること

保護者対応のポイントで示されていることは、園が保護者に対応するときにはいつも留意していることです。しかし、障害のある幼児などをもつ保護者の場合、子育てに対する不安が大きく、そのことを周囲に相談することもできずに孤立していることもあります。そのため、保護者の家庭環境等も踏まえながら、保護者の立場に立って考え、保護者のその時々のお気持ちに応じた一層丁寧な関わりが求められます。

それぞれの時期（状況）に応じた保護者対応について、各事例から読み取れることを考えてみましょう。

○入園当初—信頼関係づくりと母親の状況の理解—

当初は、母親が我が子に向かって「ばか」と大声を出すなど、虐待の疑いも感じさせられる状況でした。虐待の背景には保護者の子育てへの不安や苦悩があることが多いと言われています。このような状況のときに、一方的に指導することは反発を招き、関係が遮断される可能性がありますから、子育てのつらさや頑張りを認めて接していくことが大切です。

先生は、母親との日頃の会話を大切にし、母親の話したい、話したくないといったその時々のお気持ちを大切にしながら、子育てのサポートの有無などの状況や母親のお気持ちを聞いています。そうした中で、母親が一人で子育てを担っていることや母親が得た情報を父親に伝えるのに困っていることが話されました。母親自身も落ち込んでい

るときに、我が子の発達の遅れを指摘されたことを父親に伝えなくてはならないつらさも述べられました。その一方、母親は我が子の状態をしばしば夫に伝えており、夫婦関係は悪くないことが推察できます。

この時期、母親は、我が子の発達の遅れが心配で、何とかしたいと思っていますが、ただ厳しく接することになっていました。そこで先生は、まずは親子関係を改善することを目指して、当該幼児のよさなどを母親に伝え、母親が当該幼児をより愛おしいと思えるように配慮しています。

母親の心が先生に開かれ始めたのは、我が子が先生を信頼していること、先生も我が子を大切に思って関わってくれていることなどが母親に伝わったからだと考えられます。長い時間がかかりますが、この間、しつこくならない程度に、当該幼児の様子を伝えたり、子育てをねぎらったりする丁寧な声掛けを続けていくことが必要です。

そして、母親は先生に自身の不安などを次第に話すようになっていきますが、「Nに障害があることを認めたくない」「障害のあるこどもを育てたことのない人が…」といった発言もあります。我が子の障害を頭では理解していながらも、気持ちとしては受け入れかねているのでしょう。母親は、「悲しみ・怒り・不安」を感じており、先生に対して攻撃的な言葉を向けるかもしれません。先生は、母親が周囲に不満や怒りを言わないとやっていけない気持ちであることを理解し、攻撃的な言葉も受け流すことが大切です。

○園に慣れてきた頃

—気持ちの受け止めと障害のある幼児などの状況を保護者と共有—

「Nは他のこどもより遅れているし…」と言う言葉からは、また一步、母親が先生に心を開き始めたと推測できます。しかし、心を開いたからといって、すぐにN児の課題を示して対応を求めていくことは控えるようにします。N児の様子を伝える中で、N児が園で困っていることを伝え、それに対してどのように関わって、N児がどう変わっていったかを伝えることが大切です。このことによって、母親は、N児の行動の見方を理解するとともにN児の理解も深まっていきます。それは、幼児の小さな変化・成長を具体的に実感できることにつながります。しかし、例えば、障害のある幼児などが家で落ち着かず、家での子育てに疲れている様子の母親に、園でのよい様子ばかり伝えていては、保護者に寄り添っていることにはなりません。保護者の発言に耳を

傾けて、子育ての大変さをねぎらい、家での当該幼児の様子を推測し、場合によっては対応策を一緒に考えていくことが必要です。

また、母親の「Nを何とかしたいと思っている」との発言は、当該幼児の困難な状況に目を向け、子育てにしっかりと向き合うようになっている兆候です。このような母親の意識の転換は、母親への対応を変えていく時期でもあります。当該幼児の困難さに目を向け始めたからと言って、思い悩むことがなくなるわけではありません。保護者の感情の機微を察して対応していくことが大切です。

さらに、母親が、障害を認めて当該幼児の状態や障害の特性からくる行動特徴を理解したからといって、当該幼児への対応が必ずしもうまくいくとは限りません。親としてこうした方がよいと分かっている、うまく実行できないことがあります。子育ての悩みを丁寧に受け止めつつ、日々の生活の中で生じる具体的な困難に対して具体的に取り組む手立てについて、先生が保護者と共に考える姿勢が大切です。園で試みたやり方を保護者に伝えたり、家庭での対応の仕方を聞いたりすることで、園と家庭で、その環境ややり方は異なっている、当該幼児を「一緒に育てている」という感覚がもてるようになります。

○支援について保護者と共に考える頃—専門機関との連携—

園の大きな集団で、皆の動きについていけない、一斉の指示では何を伝えられているのか分からず人と違うことをしている、人混みが苦手でクラスから離れたところで一人にいるなどは、当該幼児が園で困っている様子です。早期から、療育機関等の関係機関と連携して当該幼児の困難さに応じた支援をすることは重要です。

母親は、「保健センターの発達相談」と言っていました。実際は、療育機関に通っていません。初期の頃に「発達相談」の内容を夫に伝えることの大変さを口にし、その内容を担任から聞かれると、口をつぐんだのは、後から考えると、療育機関に通っていることを明言したくなかったから、とも受け止められます。

母親は、意識はしていないかもしれませんが、当該幼児と関わる保護者・療育機関・園は共に当該幼児を育てる仲間であり、連携の大切さに気づき始めたからこそ、園が療育機関に連絡することを了承したのではないのでしょうか。さらに、母親は、連携の場に参加することで、日常生活での当該幼児への接し方の手立てや方向性、様々な制度の活用について知るきっかけともなります。なお、保護者によっては、園に対し、

療育機関との関わりを伏せておきたかったり、逆に、療育機関に通っていることでより細かな配慮を求めたりすることもあります。保護者の考え方は様々であり、保護者の気持ちに寄り添った支援が大切です。

○全体を通して

本事例では先生の関わりと母親の気持ちの変容を中心に見てきました。全ての保護者がこのように変わっていくとは限りません。家庭では困っていないので相談しようとは思わない場合、当該幼児以外に家族に認知症を患った高齢者がいる場合、保護者自身に課題がある場合などもあります。卒園するまで、我が子の障害を認めない保護者もいます。しかし、当該幼児の行動特徴を把握して、その対応を考えていく上で、幼児の障害の診断の有無や保護者の障害受容の状況は問題視することではありません。園生活で当該幼児が困っている現実に対応することこそが重要です。保護者とは、当該幼児の困難さを共有し、その対応と一緒に考える関係をつくることが重要です。

そのためには、次のような先生の姿勢が大切です。

- ・笑顔で挨拶をし、話しやすい雰囲気をつくる
- ・保護者の話をよく聞いて、受け止める
- ・保護者の気持ちを推測してみる
- ・幼児の成長を一緒に喜ぶ

しかし、先生が保護者に歩み寄ってもすれ違ってしまいうこともあります。それでも日常的な関わり（挨拶や連絡帳など）や保育参観や保護者会など、様々な機会を活用し、協働で子育てをしようという意識を発信し続けることが欠かせません。

そして、障害のある幼児などへの支援に関して、本人やその保護者だけでなく、家族を視野に入れた支援を充実させていくことの重要性が指摘されています。障害のある幼児などであるがゆえに子育ての困難さがより大きくなったり、障害受容をめぐる悩みがあったりして、母親だけでなく、父親や祖父母、兄弟姉妹なども視野に入れた支援が求められています。

（第3章5. 保護者との信頼関係を基盤とした子育ての支援 31頁参照、第5章6. 保護者との連携 148頁参照）

事例 14 障害のある幼児などの保護者が一人で抱え込んだり孤立したりしないような配慮について考える

我が子が入園すると、園での催しやPTAの会等を通じて、他の幼児の保護者との関わりも生じます。我が子に障害があるかもしれないと不安を感じている保護者は、他の幼児の保護者と関わることに不安を感じていることもあります。保護者が孤立しないような配慮について考えることは、障害のある幼児などと保護者が園で安心して過ごすためには大切なことです。

【ポイント】

- 安心して保護者会等に参加できるような配慮をします。
 - ・最初は、他の保護者等と関わる際には、日常的に接している先生が近くに控え、当該保護者が困ったり居心地が悪そうにしていたりしたら話題を変えるなどの配慮をしましょう。
 - ・保護者会では、園からの連絡事項に加え、保護者同士の会話の機会を設定します。その際、当該幼児の保護者が安心して参加できる他愛のないテーマから、次第に保護者同士が子育てに関して共感できるようなテーマへと発展させるなど、保護者同士の関係づくりに配慮しましょう。
 - ・他の保護者に当該幼児の状況を説明する必要があるときには、必要に応じて専門機関と相談しましょう。
- 保護者に対して園以外の専門機関や先輩の保護者等を紹介します。
 - ・日頃から地域にある関係機関の情報を収集したり、発達障害センター等との連携を深めたりします。
 - ・当該幼児の将来などに不安を抱えている保護者については、先輩保護者の話を聞くことができる機会を設定することも考えられます。

障害のある幼児などが入園すると、その保護者も他の保護者と出会うなど、その世界が広がります。また、我が子が他の幼児と過ごす中で、他の幼児の発達と比較してしまうこともあるかもしれません。さらに、園での活動の中で幼児同士のいざこざが生じることもあるでしょう。園という場や機能を通して保護者が体験することに関して園がどこまで関与するのは難しい問題です。保護者の気持ちは、我が子や園の先

生との関係のみで決まるものではありません。核家族なのか、当該幼児に兄弟姉妹がいるのかといった家庭環境、保護者の周囲に気軽に相談できる人がいるのかといった状況、そして、園で保護者自身が安心して過ごせているのかといったことなど、様々なことが影響します。園での多様な場面を例に、障害のある幼児などの保護者が、園での生活や活動にどのように参加し、他の保護者とどのように関わっていくのかについて考えてみましょう。

事例① 保護者同士の関わりのきっかけづくり～安心して保護者会等に参加できる雰囲気をつくる～

○入園当初 ～障害のある幼児などの保護者が緊張～

4月、自閉スペクトラム症の診断を受けた〇児（3歳）が入園してきました。

入園当初、保護者は、我が子が園での生活になじめるのか心配していると考えた担任は、こまめに連絡をとるよう心掛けていました。しかし〇児の保護者は緊張しているのか、新しいクラスでの保護者会の場でも、自ら他の保護者に声を掛けるような様子は見られませんでした。担任が気にして「園で楽しく過ごしていますよ」と伝えても「ありがとうございます」という一言だけで、目も合わせずに帰って行ってしまう日々が続きました。担任はその様子が気になって、保育後に電話をかけてみますが、「家でどうですか」と聞いても「大変です。まあ、仕方ないですけど」とあまり家でのことも話してはくれません。担任に話をしても、どうせ分かってもらえないというような気持ちの隔たりを感じました。

○他の保護者との関わりの場面

降園時、当該幼児を待つ間、保護者同士が自然に言葉を交わしたり談笑したりする風景が見られるようになってきました。

ある日、〇児の保護者と数人の他の保護者とが話している様子が園長の目に留まりました。会話の流れから、「園が終わったら、近くの〇〇公園に一緒に行こう」と誘いを受け、返答に困っている様子でした。他の保護者は、好意をもって遊びに誘ってくれていることは分かりましたが、今の〇児の保護者にとっては、それが負担に感じることになるかもしれないと思い、園長はさりげなくその会話に入り、「Qさん、〇〇先

生が探していたわよ。一緒に保育室に行ってみましょうか」と流れを切り替えると、「あ、そうなんですね。じゃ、すみません」と他の保護者に挨拶して、保育室に向かいました。園長は、保育室に向かいながら、〇児の保護者の今の気持ちをさりげなく聞いてみました。〇児の保護者は、「声を掛けてくれてありがとうございます。他のお子さんと一緒に遊ぶのはまだ心配で」とは答えてくれましたが、何が心配なのかといったことはまだ言いたくないようです。

〇園からのきっかけづくり

2か月が過ぎ6月となりました。園での様子を伝える保護者会を迎えました。この中で、担任は、保護者同士が知り合う機会をつくって、互いの育児を語り合えるような場となるようにディスカッションを企画しました。皆が話しやすいようにと考えて、「夏休みに行きたい所」をテーマにしてみました。〇児の保護者は、最初はとても表情が硬く、緊張している様子でしたが、少人数のグループに分かれて、アイスブレイクなどをして、楽しい雰囲気づくりをしていった中で、〇児の保護者も、〇児と一緒に出かけられる場所を探して、出かけようと努力しているという話に、グループの保護者の方が興味をもって、「ここは、行ったことある？ どうだった？」など、徐々に〇児の保護者を中心に話が盛り上がってきました。〇児の保護者も、質問に答えているうちに時々笑顔を見せるようになり、少しリラックスした様子で帰宅しました。

その後、普段の生活の中で、〇児の保護者から笑顔が以前よりも見られるようになりました。担任は、〇児が園で楽しそうに遊んでいた様子をできるだけ具体的に伝えるようにして、〇児の得意なことやよさを認める話題を伝えていきました。

2学期に実施した保護者会でも、保護者同士のディスカッションの時間を取り入れました。「自宅での育児の困難さや解決の工夫」をテーマにしてみました。〇児の保護者が話しやすいようにと考えて、予め同じグループに、家族や兄弟姉妹で障害のある幼児などがいる保護者など、〇児の保護者の気持ちを理解してもらいやすい保護者が入るように席を用意しておきました。

育児については、皆が悩みや不安を抱えていますから、ざっくばらんな話し合いではいろいろな悩みが出てきました。「呼んでもちっとも振り向いてくれないので、つい怒ってしまう」、「手を振りほどいて走ってしまうので、追いかけるのも大変」、「優しくしようと思っているけど、ついきつく言ってしまう」など、いろいろな悩みの発言

がありました。そのような話を聞いている中で、〇児の保護者は、「聞いてくれるよう肩を叩いて顔が向いてから声を掛けている」、「靴を脱ぎ散らかさないように自分の靴を置く場所にマークを付けている」、「服の前後を間違っず着ないように、印のボタンを付けてみたらよかった」などの話が出て、周りの保護者からは「すごいね」、「どんなふうに付けているの?」、「そうすればいいのか」と言われて、表情が和んできました。保護者会を終えたときに、担任が声を掛けると「先生、皆いろいろ苦労しているのですね。自分だけかと思っていました」と話していました。保護者同士のつながりの中で、〇児の保護者の気持ちも少し軽くなり、担任とも〇児の様子について話ができるようになってきました。

事例①では、日々の生活を通して園で過ごす安心感を積み重ねることの大切さが分かります。我が子のことで精一杯な保護者にとっては、園に通園してくることへの疲労感や、中には人と関わることに緊張感をもっている保護者がいます。そのような疲労感、緊張感を徐々にほぐすことができるように、普段からその保護者自身が困っていないか、周りの保護者とほどよい距離感で関わっているかどうかを気に掛けておくことが大切です。

保護者会では、保護者の緊張や不安をほぐすために誰もが話しやすく、関心のあるテーマを設定して、話しやすい雰囲気をつくっています。このような雰囲気づくりは、先生の話し方や表情、姿勢などが影響してきます。保護者によっては、「多くの園児の中の一人なので、そんなにきちんと見てもらえていないのではないか」、「我が子について、園での様子を詳しく教えてくれたり、家庭での様子を聞いたがったりするのは、他の子よりも手がかかるからだろうか」と不安に感じたりすることもあるかもしれません。先生は、全ての幼児について、幼児一人一人の成長を支え、その子のよさや成長を保護者と共有したいと考えていることを伝えるようにしましょう。そのためには、送迎時や行事、保護者会などで、折に触れて言葉や態度で示していくことが大切です。

事例② 他の保護者からの相談をきっかけに必要な支援を検討～専門機関と連携して、障害のある幼児などと保護者を支える～

ある日、担任のところに、P児のことで他の保護者から相談がありました。「P児か

ら何度も叩かれたり、髪の毛をぎゅっと引っ張られたりしている」、「これからも乱暴が続くのは心配です。先生もクラスに乱暴なお子さんがあると手がかかって大変だと思いますが、Pちゃんのこと、しっかり見ていてほしいです」との相談、要望でした。

担任は、双方の保護者に対して、その都度状況を説明してきました。このことをすぐに園内で共有しました。園の話し合いでは、P児やP児の保護者、他の保護者への対応については、これまでも丁寧に対応してきましたが、P児の行為を無理矢理にやめさせることを考えるのではなく、今後、他にどのような支援が考えられるのか、P児の保護者に対してどのように支援したらよいのかなどをもっと知る必要があるのではないかという話になり、そこで、地域の発達障害センターの職員の助言を仰ぐことにしました。

園内で、発達障害センターの職員を招いた研修を実施し、「発達障害」について理解を深めるとともに、様々な支援策について協議をしました。園での保護者同士の関係が気まづくなるのは、P児の成長にとって望ましくはないため、P児の保護者が孤立しないように園では引き続き、気に掛けていくことに加えて、P児の保護者に応じた個別の支援を受けられるような専門的な講座があることを紹介してもらいました。

園内の先生からは、関係機関へとつなげていくことの大切さは理解していても、実際に保護者に紹介しづらい、行政の機関には、いろいろな窓口があって、保護者が求めている情報や相談は、どこがよいのかよく分からない、例え紹介しても合わなかったらかえって不信感をもたれるのではといった懸念が挙げられました。

発達障害センターの職員から、地域の様々な福祉機関につなげることで、P児の保護者にとって、子育ての不安が解消されたり、養育方法の助言によって保護者の気持ち楽になったりするなどのことを教えてもらいました。

専門家の助言を受け、P児の保護者には面談の機会を活用して、地域の発達障害センターのことを伝えようと準備をしました。実際の面談では、P児の保護者が「療育やそういった支援の情報はどこにあるのか教えてほしい」という話題となり、実際に専門講座や個別支援などを行っている発達障害センターのことを紹介すると、「どういことをするのですか？」と興味をもった様子でした。

事例②では、他の保護者からの相談、要望をきっかけに、関係機関との連携の幅が広がりました。これまでもP児やその保護者への支援について関係機関から助言を得

ていましたが、P児やその保護者を取り巻く人々に対して、P児の状況をどのように理解して説明していくのか、保護者同士の関係において当該幼児の保護者が孤立しないためにはどうしたらよいのかなどについても話し合っています。

障害のある幼児などの保護者から、他の幼児の保護者に対して、我が子の障害について説明したいという要望があることもあります。そのような場合には、一層慎重に検討する必要があります。他の幼児の保護者に対して、当該幼児の保護者から直接説明するのか、障害のある幼児などの困難といった視点から専門知識を有する者から説明するのか、どの程度の内容を説明するのかについて検討しましょう。その際、他の幼児の保護者がどのように受け止めるかなども想定して、伝わりやすい方法を考える必要があります。さらには、その後の幼児同士の関係などにも、先生は配慮する必要があります。このような機会が、偏見などにつながることなく、幼児一人一人の特性が多様であるからこそ、幼児同士が関わる中で共に育つことができると捉えられるようにしましょう。

これまでの保護者同士の関係性や、園との関係性、我が子の障害についての公表の有無なども考慮しながら、場合によっては専門家から助言を受けるなどして、担任一人で抱え込まずに、園内で今後の対応策について十分に話し合うことが重要です。

事例③ 先輩保護者から話を聞く機会を通して～少し先の見通しをもつことで安心感へとつなぐ～

保護者同士の関係ができて互いに認め合うことができ、園生活に少し余裕ができてきた頃、R児の保護者から「うちの子と同じような子は今までもいたのですか？」との質問を受けました。

担任は、かつて同じように障害のある幼児などを育てていた保護者を思い出しました。担任はその方に園で話をしてもらえれば、少し先の見通しがもてて在園児の保護者も安心するのではないかと考え、修了して数年経っている保護者に連絡をとり、園に来てもらうことにしました。

先輩保護者のWさんは、R児の保護者に当時の気持ちを振り返り、話してくれました。

Wさんは、「こどもが小さいうちは、障害を認めるのが嫌で、うちの子はできる、うちの子は変わった子ではないと思っていました。でも、年月が経つとそんなに気を張

って子育てしなくてもよかったと分かるんです。園の頃が一番つらくて、他の子と比較してばかりいました。でも、小学校中学年くらいになるとこどもの得手不得手がよく分かってきて、無理に頑張らせてもこの子が苦しいんだと分かってきたんです」と我が子は今のままでなく、必ず成長していくものであることを語ってくれました。

その他、小学校に入学した後の様子や、小学校での行事への取組などのことも詳しく教えてくれました。さらに、他の先輩保護者もご紹介いただき、様々な先輩の話を聞くこともできました。保護者の中には、兄弟姉妹二人に障害があってそれぞれのこどもに対応している時間も長ければ兄弟姉妹でのけんかも多くて困っていたと語る保護者や、下のこどもに障害があり上のこどもと向き合う時間がなかなかとれないと語る保護者もいました。先輩の話の中で、R児の保護者が印象に残ったのは、「障害を理解することは大切だけれど、焦らず、『我が子』と向き合っ一緒に生活していく中で、『我が子』の特性を徐々に理解していければよい」、「兄弟姉妹がいるときは、障害の有無にかかわらず、その子だけと向き合う時間を意図的につくるといった配慮が必要」、「親だって悩むし不安。その不安を一人で抱え込まないように、周囲の人に相談したり、自分の息抜きの時間を意識的につくったりする」といったことでした。また、保護者は、皆それぞれに子育てや将来のことに悩みや不安を抱えながらも、園の先生だけでなく、多方面にわたり、誰かに話を聞いてもらったり手伝ってもらったりして、一人ではないということに勇気づけられた様子でした。

事例③では、園が、同じような経験のある先輩の保護者から直接話を聞く場を設けることによって、R児の保護者は安心感や少し先の見通しをもつことができました。

同じような過程を経験している先輩の保護者だからこそ、より身近な存在として、R児の保護者が何に困っているのか、何に不安を感じているのかを理解し、共感し合える存在となりました。

保護者が迷いや不安を繰り返しながらも、我が子に前向きに関わっていけるようになるためには、それを励ましてくれる人の存在が大切です。園の先生自身も保護者の温かい理解者であることを心掛けながらも、同じような過程を歩んでいる保護者との触れ合いもまた重要です。

話を聞いたり、悩みを打ち明けたりすることにより、不安になるのは自分だけではない、今の状態がずっと続くものではないと、次第に不安が軽減され、自分自身の関

わり方を振り返り、自分の進むべき方向が見えてきます。

同じクラスの保護者でも、既に何人かのこどもを育てている経験の豊富な保護者もいれば、初めてのこどもで不安を抱えて育てている保護者もいます。また、子育てのことについて身近に相談のできる人がいる家庭もあれば、そういう人がいない家庭もあります。このような様々な保護者が互いに悩みを打ち明けたり、相談相手になったりできるように、園で関係づくりや場づくりを進めていくことがとても重要です。

事例から読み取れること

幼児一人一人が異なるように、保護者も一人一人異なります。他の保護者に積極的に話し掛ける保護者もいれば、話し掛ければ楽しそうに話すけれど自分からはなかなか話し掛けることができない保護者もいることでしょう。また、配偶者が近くにいない家庭もあれば、自身の両親と同居している保護者もいます。園に入園してきた障害のある幼児などが一人っ子的場合もあれば、下や上に兄弟姉妹がいる場合もあります。保護者の個性、保護者を取り巻く環境などによって、障害のある幼児などの発達の受け止め方や我が子をきっかけとして知り合った先生や他の保護者との関わり方も異なることでしょう。

園では、送迎、保護者会、園の行事などを通して、保護者同士が関わる場面も多くあります。そうした関わりの中で、保護者同士が子育ての喜びや悩みを共感したり共有したり、あるいは趣味などの他愛のない会話でリフレッシュしたりすることもあります。しかし、我が子に障害があるかもしれないと思っている保護者は、他の保護者との関わりを避けたり、他の保護者からの視線や言動が過剰に気になったり、幼児同士のいざこざがあった場合でも過剰に引け目を感じたりすることがあるかもしれません。もちろん、保護者同士の関係などについては、園が立ち入るべきではないこともあります。しかし、保護者の気持ちの安定は障害のある幼児などの成長にとってとても大切なことです。保護者が、園での活動等に関して不安感や孤立感を感じたりすることのないように配慮することは大切です。

そして、保護者の気持ちや要望等に沿って、例えば、先輩の保護者の話を聞く機会や我が子の障害の状態等について他の保護者に話す機会を設けることも考えられます。しかし、このような活動は、保護者が希望しているからといってすぐに行うことは適切ではありません。慎重な検討なくして設定したそのような機会は、保護者の気持ち

や保護者を取り巻く環境をよい方向に変えるとは限りません。先輩の保護者の話を聞くことによって希望をもてたり前向きな気持ちになったりするといった保護者がいる一方で、先輩の保護者と自分を比較して落ち込んだり、他の保護者の視線や言動を一層気にしたりする保護者がいる可能性もあります。他の保護者に話す機会を設ける場合などには、関係機関に話す内容などを相談することも考えられます。関係機関との連携に当たっては、個人情報に関して保護者の承諾を得ることが大切です。そして、こうしたときに速やかに連携していくためには、日頃から、地域の関係機関について調べたり、園内研修の講師として協力を依頼したりすることが大切です。保護者の置かれた状況や背景などは様々であり、保護者の捉え方も様々です。そのことを十分に留意して、関係機関とも連携しながら、園全体でどのように支援をしていくことがよいのか十分に協議することが重要です。

特に、関係機関との連携は、家庭、園、福祉機関や医療機関が連携して幼児の育ちを考えていくことにつながります。さらに、関係機関を活用することにより、園と家庭の生活の連続性を踏まえた支援が充実したり、小学校やその先の生活までの一貫した支援が一層充実したりします。

(第3章5. 保護者との信頼関係を基盤とした子育ての支援 31 頁参照、第5章6. 保護者との連携 148 頁参照)

